

# 楠・荒田町遺跡

## Ⅱ

神戸大学医学部附属病院  
埋蔵文化財発掘調査報告2

平成20（2008）年3月

兵庫県教育委員会

神戸市

# 楠・荒田町遺跡

## Ⅱ





遺跡遠景(南から)



遺跡遠景(北から)



調査区全景(北西から)



調査区(西から)



SB10・11・12(東から)



SD111・113(西から)



SK01 (南から)



SK01とSB01 (南から)



SD01・02(西から)



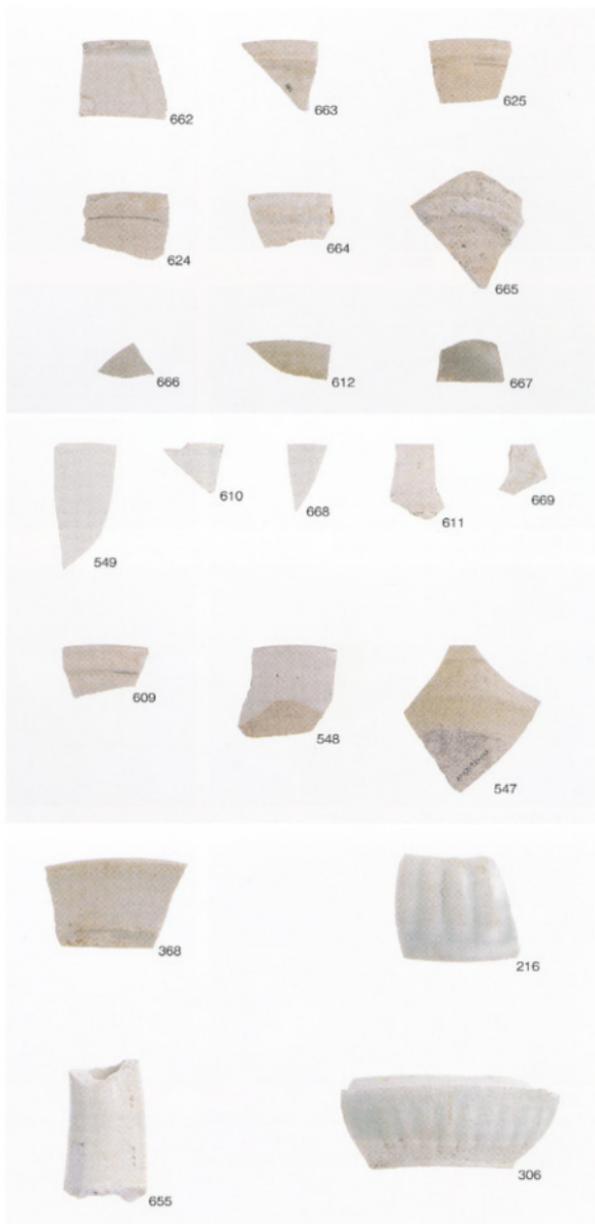
SD01・02土層断面(西から)

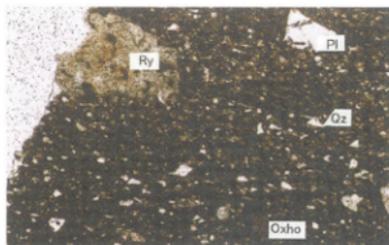


SK01出土(2003061)

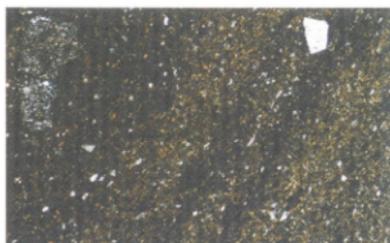


SD01出土(2003172)

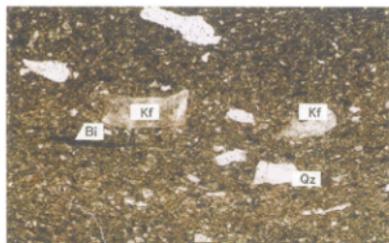




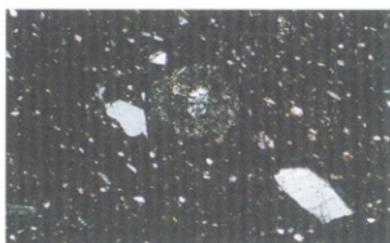
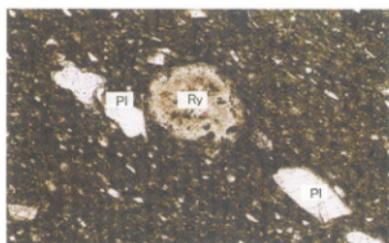
1. 試料番号1(SD01 499 京都系)



2. 試料番号2(SD01 516 京都系)



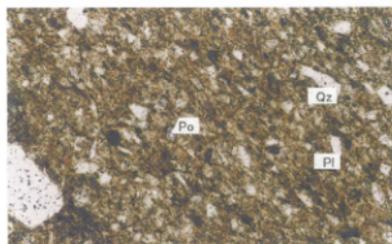
3. 試料番号3(SD01 475 京都系)



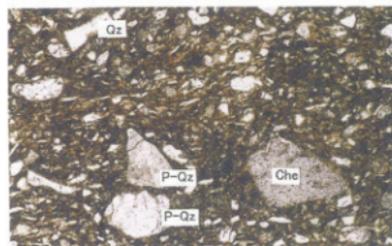
4. 試料番号4(SK01 440 京都系)

Qz: 石英 Pl: 斜長石 Kf: カリ長石 Bi: 黒雲母 Oxho: 酸化角閃石 Ry: 流紋岩  
Sh: 頁岩 Po: 植物珪酸体  
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

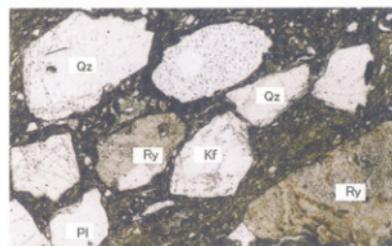
0.5mm



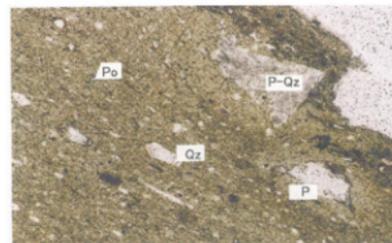
5. 試料番号5(SK01 450 京都系)



6. 試料番号6(SD113 297 播磨系)



7. 試料番号7(調査区南東部 336 播磨系)



8. 試料番号8(調査区南半 347 和泉系)

Qz: 石英 Pl: 斜長石 Kf: カリ長石 Ry: 流紋岩 Che: チャート

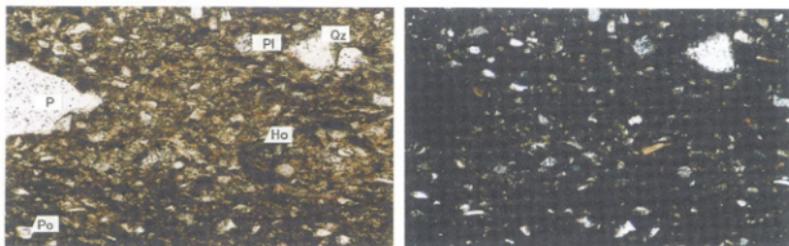
P-Qz: 多結晶石英 Po: 植物珪酸体 P: 孔隙

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

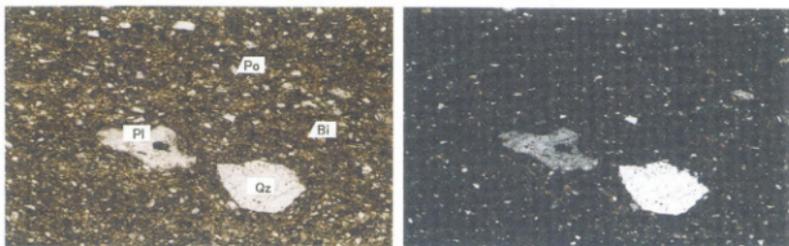


5

6-8



9. 試料番号9(SD01 506 不明)



10. 試料番号10(Pit16 130 不明)

Qz: 石英 Pl: 斜長石 Bi: 黒雲母 Ho: 角閃石 Po: 植物珪酸体 P: 孔隙  
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.2mm 0.5mm  
9 10

## 例言

1. 本書は、兵庫県神戸市中央区楠町及び、兵庫県荒田町に広がる楠・荒田遺跡（くすのき・あらたちょういせき）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本報告に関わる発掘調査は、同遺跡範囲内に含まれる神戸市中央区楠町7丁目に所在する神戸大学医学部附属病院内の建設事業に伴い、神戸大学の依頼を受けて、昭和59年度から平成17年度まで兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。
3. 本報告書作成にかかわる整理作業は国立大学法人 神戸大学の依頼を受けて、平成17～18年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施し、平成19年度には名称変更した兵庫県立考古博物館が引き続き実施し、岡本一秀・藤田 淳・菱田洋子・別府洋二・岡田翠一・岸本一宏が担当した。
4. 楠・荒田遺跡に関しては、別地点の発掘調査の成果が神戸市教育委員会などによりすでに報告されている。また、神戸大学医学部附属病院内の発掘調査に関しても、「楠・荒田遺跡」兵庫県文化財調査報告第162冊として刊行されており、本報告書はその続編である。
5. 掲載した写真については、空中写真については、株式会社ジエクト（平成8年度）、ワールド勘测コンサルタント株式会社（平成9年度）、株式会社サンヨー（平成10年度）に委託して撮影した。その他の遺構写真等は調査担当者によるものである。遺物写真は株式会社タニグチフォトに委託して撮影したものをを使用した。
6. 掲載した図については、地形図については国土地理院発行のもの、神戸市教育委員会提供のもの及び神戸大学提供のものを使用した。図1は近辺伊弉諾書店発行、柏書房編集発行「日本近代都市委縮地図集」1987を利用した。その他の図に関しては調査担当者、調査補助員及び所属職員の手によるものである。
7. 出土した金属器・木製品の保存処理、土層断面剥き取り、遺構の型取りなどは古高千恵子・藤田 淳・中村・岡本が担当して実施した。
8. 出土した土師器については長谷川廣氏（兵庫県芸芸情報）、木製品の樹種同定は榎田雅生氏（レオラボ）、土器の胎土分析は久作健二氏・石岡晋武氏（バノ・サーヴェイ株式会社）、放射性炭素年代測定は（株）加速器分析研究所に依頼し、原稿を戴いた。その他の執筆は調査担当者および整理担当者によるものである。執筆分担は目次に掲載している。また、本書の編集は森本貴子の補助の元、別府がこなした。
9. 発掘調査に際しては、神戸大学、神戸大学医学部附属病院、神戸市教育委員会の方々にはお世話になりました。また、小川広太、小谷五郎、小谷義男、清水洋子、進藤真己子、岸真理子、岡本陽子の諸氏や、発掘調査に従事していただいた皆さんにも、改めて感謝いたします。
10. 発掘調査中、整理作業中には以下の方々に様々な御指導、御教示を受けました。記して感謝の意を表します。（順不同、敬称略）  
多田俊樹、高橋昌明、元木素雄、鎌村俊夫、上横手雅敬、西山良平、佐伯真一、野口 実、吉田賢司、美川 圭、川口宏海、藤本史子、宮本長二郎、村田修三、北垣聡一郎、山田和則、伊藤裕偉、岡藤一郎、奥村 弘、藤田裕嗣、松下正和、工藤博司、橋本久和、森村健一、渡辺伸行、丸山 深、丹治康明、千種 浩、富山直人、須藤 宏、齋木 巖、中村大介  
森岡秀人、藤沢清高、進藤 亮、松田朝由、浅野俊一、古川久雄、長谷川真

# 目 次

## 本文目次

第1章 遺跡の環境	別府洋二	
第1節 遺跡周辺の環境		1
第2節 周辺の遺跡		6
第2章 調査に至る経緯と経過	別府	
第1節 調査に至る経緯		9
第2節 調査の経過		11
第3章 昭和58年度の調査(遺跡調査番号840020)	山田清朝	
第1節 概要		15
第2節 基本層序と遺構の検出		15
第3節 遺構		15
第4節 遺物		17
第5節 小結		20
第4章 平成9年度の調査(遺跡調査番号970420)		
第1節 概要	中川 渉	21
第2節 遺構	中川	21
第3節 遺物	岡田章一	22
第4節 小結	中川	22
第5章 平成10年度の調査(遺跡調査番号980190)		
第1節 概要	別府	23
第2節 遺構	別府	23
第3節 遺物	岡田・別府	29
第4節 小結	別府	44
第6章 平成11年度の調査(遺跡調査番号990132)		
第1節 概要	鐵 英記	47
第2節 遺構	鐵	47
第3節 遺物	岡田	48
第4節 小結	鐵	50

第7章 平成15年度の調査1 (遺跡調査番号2003061)		
第1節	概要	吉識雅仁 51
第2節	第1面の遺構	吉識 51
第3節	第2面の遺構	吉識 52
第4節	遺物	岡田・別府 53
第5節	小結	吉識 55
第8章 平成15年度の調査2 (遺跡調査番号2003172)		
第1節	概要	別府 57
第2節	遺構	別府 58
第3節	遺物	岡田・別府 60
第4節	小結	別府 63
第9章 その他の調査		
第1節	平成16年度の調査 (遺跡調査番号2004133)	中川 65
第2節	平成8年度の調査 (遺跡調査番号960416)	深江英憲 69
第3節	平成7年度の調査 (遺跡調査番号950259)	山本 誠 71
第4節	その他の調査	別府 72
第10章 自然科学的分析		
第1節	放射性炭素年代測定	(株)加速器分析研究所 73
第2節	楠・荒田町遺跡出土土器の胎土分析	矢作健二・石岡智武 (パリノ・サーヴェイ株式会社) 77
第3節	楠・荒田町遺跡出土土器の樹種同定	植田弥生 (パレオ・ラボ) 86
第11章 出土遺物の検討		
第1節	出土土師器について	長谷川 眞 (兵庫陶芸美術館) 91
第2節	出土瓦器について	山田 98
第3節	その他の土器・陶磁器について	岡田 107
第12章 まとめと考察		
第1節	調査および保存協議の経緯	中川 113
第2節	遺構・遺物について	別府 116

## 挿図目次

図1 橋・荒田町遺跡の位置	2	図10 土師器皿分類図	96
図2 橋・荒田町遺跡周辺の遺跡分布	5	図11 土製煮炊具分類図	97
図3 橋・荒田町遺跡と既調査地点	10	図12 和泉型瓦器輪の法量分布	98
図4 暦年補正 Radiocarbon determination	76	図13 和泉型瓦器輪の分類(1)	99
図5 各粒皮層における炭素・岩石出現頻度	81	図14 和泉型瓦器輪の分類(2)	100
図6 粘土中の砂の粒径組成	82	図15 瓦器皿の分類	102
図7 砂粒・基質・孔隙の割合	83	図16 瓦器の変遷(1)	105
図8 橋・荒田町遺跡出土木器の材組織光学顕微鏡写真(1)	89	図17 瓦器の変遷(2)	106
図9 橋・荒田町遺跡出土木器の材組織光学顕微鏡写真(2)	90		

## 表目次

表1 周辺の遺跡	8	表7 薄片観察結果(2)	80
表2 神戸大学医学部附属病院内橋・荒田町遺跡調査一覧	12	表8 橋・荒田町遺跡出土木器の樹種	86
表3 BP年代および炭素の同位体比	75	表9 時期・木器ごとの検出樹種集計表	87
表4 暦年校正用年代	75	表10 土師器皿分類表	95
表5 粘土分析資料一覧および混合分群結果	77	表11 神戸大学医学部附属病院内橋・荒田町遺跡調査の経緯	115
表6 薄片観察結果(1)	79	表12 出土土器・陶磁器観察表	122

## 図版目次

図版1 神戸大学医学部附属病院内調査位置図	図版37 980190 出土遺物14
図版2 本発掘調査位置図	図版38 980190 出土遺物15
図版3 840020 遺構配置図	図版39 980190 出土遺物16
図版4 840020 掘立柱建物	図版40 990132 調査区平面図
図版5 840020 出土遺物 1	図版41 990132 SB01・SD110土層石垣
図版6 840020 出土遺物 2	図版42 990132 SD110
図版7 840020 出土遺物 3	図版43 990132 SD107・SD1①・SD2②・SD4③
図版8 970420 遺構配置図・土層図	図版44 990132 出土遺物
図版9 970420 SD101・SD102・P1土層断面図・出土遺物	図版45 2003061 調査区平面図・土層図
図版10 980190 調査区全区、土層図	図版46 2003061 上面遺構配置図・下面遺構配置図
図版11 980190 遺構配置図	図版47 2003061 SB01
図版12 980190 調査区南西部	図版48 2003061 SB01
図版13 980190 SB01・上面の遺構	図版49 2003061 SK01・P12・P18
図版14 980190 SB10・SB11	図版50 2003061 SH01
図版15 980190 SB12	図版51 2003061 出土遺物 1
図版16 980190 SB13・SB14	図版52 2003061 出土遺物 2
図版17 980190 SD03	図版53 2003061 出土遺物 3
図版18 980190 SE01・SK09	図版54 2003061 出土遺物 4
図版19 980190 SK13	図版55 2003172 遺構配置図
図版20 980190 SD102・103	図版56 2003172 土層図
図版21 980190 SD105・110平面図、SD105立面図	図版57 2003172 SD01・SD02
図版22 980190 SD105・110土層断面図	図版58 2003172 SB01・SD03・SD05・SD06・SK01
図版23 980190 SD111・112・113	図版59 2003172 出土遺物 1
図版24 980190 出土遺物 1	図版60 2003172 出土遺物 2
図版25 980190 出土遺物 2	図版61 2003172 出土遺物 3
図版26 980190 出土遺物 3	図版62 2003172 出土遺物 4
図版27 980190 出土遺物 4	図版63 2004133 1 トレンチ平面図・土層図
図版28 980190 出土遺物 5	図版64 2004133 1 トレンチSX01土層図・石垣立面図、2 トレンチ
図版29 980190 出土遺物 6	図版65 950416 調査区南壁断面図
図版30 980190 出土遺物 7	図版66 950416 遺構配置図、遺構断面図
図版31 980190 出土遺物 8	図版67 950249 調査区全区、土層図
図版32 980190 出土遺物 9	図版68 950259 出土遺物、980112土層図、出土遺物、970318・970349出土遺物
図版33 980190 出土遺物10	図版69 地形の復原
図版34 980190 出土遺物11	
図版35 980190 出土遺物12	
図版36 980190 出土遺物13	

## 巻頭写真図版目次

巻首カラー図版1	遺跡遠景 (南から)、遺跡遠景 (北から)
巻首カラー図版2	980190 調査区全景 (北西から)、調査区 (西から)
巻首カラー図版3	980190 SB10・11・12 (東から)、SD111・113 (西から)
巻首カラー図版4	2003061 SK01 (南から)、SK01とSB01 (南から)
巻首カラー図版5	2003172 SD01・02 (西から)、SD01・02土層断面 (西から)
巻首カラー図版6	2003061 京都系土師器Ⅲ SK01出土、SD01出土
巻首カラー図版7	白磁・青白磁
巻首カラー図版8	胎土薄片 ①
巻首カラー図版9	胎土薄片 ②
巻首カラー図版10	胎土薄片 ③

## 遺構写真図版目次

写真図版1	遠景	SD102 (北から)
	遠景 (東から)	P1 (北から)
	遠景 (南東から)	写真図版13 下層の状況
写真図版2	遠景	調査区北端の地形 (南から)
	遠景 (南から)	調査区東端の地形 (東から)
	遠景 (東から)	調査区東端の地形土層断面 (北から)
写真図版3	遠景	
	遠景 (南から)	980190
	遠景 (西から)	写真図版14 遠景
写真図版4	遺跡の周辺	遠景 (北から)
写真図版5	調査地点全景	遠景 (東から)
	(神戸大学医学部附属病院)	写真図版15 全景
		写真図版16 全景
840020		調査地点からメリケン波止場方面を望む
写真図版6		(北西から)
	西部 (東から)	全景 (北西から)
	東部 (西から)	写真図版17 全景
写真図版7		全景 (西から)
	調査区全景 (東から)	全景 (西から)
		全景 (南西から)
970420		写真図版18
写真図版8	遠景	調査区南半部 (西から)
	遠景 (東から)	調査区南東部 (東から)
	遠景 (南東から)	写真図版19 掘立柱建物
写真図版9	全景	SB01 (東から)
写真図版10	全景	SB01内P24、SB01内P27
	全景	SB01内P3、SB01内P23
	全景 (東から)	写真図版20 掘立柱建物
写真図版11	溝	SB02 (東から)
	SD101・102 (北東から)	SB02とSB03 (西から)
	SD101 (東から)	写真図版21 掘立柱建物
	SD101土層断面 (東から)	SB10・11・12 (東から)
写真図版12	溝	SB10・11・12 (西から)
	SD102 (北から)	SB10・11・12 (北から)

写真図版22 掘立柱建物

SB10 (北から)  
SB10 (南から)

写真図版23 掘立柱建物

SB10 内 P1、SB10 内 P2  
SB10 内 P3、SB10 内 P4  
SB10 内 P5、SB10 内 P7  
SB10 内 P8、SB10 内 P9

写真図版24 掘立柱建物

SB11 (北から)  
SB11 内 P1、SB11 内 P2  
SB11 内 P3、SB11 内 P4

写真図版25 掘立柱建物

SB12 検出状況 (東から)  
SB12 内 P1 検出状況、SB12 内 P2 検出状況  
SB12 内 P4 検出状況、SB12 内 P7 検出状況

写真図版26 掘立柱建物

SB12 (東から)  
SB12 (西から)

写真図版27 掘立柱建物

SB12 内 P4 土層断面、SB12 内 P5 土層断面  
SB12 内 P6 土層断面、SB12 内 P7 土層断面  
SB12 内 P8 土層断面、SB12 内 P9 土層断面  
SB12 内 P11 土層断面、SB12 内 P14 土層断面

写真図版28 掘立柱建物

SB13 (北から)  
SB14 (北から)

写真図版29 柱穴

SB13 内 P130 土層断面、  
SB13 内 P130 石鍋出土状況  
SB14 内 P127 土層断面、  
SB14 内 P127 土師器出土状況  
SB14 内 P127 土師器出土状況  
P129 滑石製品出土状況  
P144 瓦器出土状況、  
P164 緑色片岩出土状況

写真図版30 井戸

SE01 上層土層断面 (南から)  
SE01 下層土層断面 (南から)  
SK09 土層断面 (東から)

写真図版31 井戸

SE03 上面土層断面 (北から)  
SE03 井側検出状況  
SE03 石積み状況

写真図版32 井戸

SE03 井側内釜出土状況  
SE03 半截状況  
SE03 下層種検出状況

写真図版33 井戸

SE04 上面埋土断面 (北から)  
SE04 土層断面 (北から)  
SE04 井側の状況

写真図版34 土坑

SK03 土層断面 (北から)  
SK03 上層埋土除去 (北から)  
SK03 石組検出状況 (北から)

写真図版35 土坑

SK23 土層断面 (西から)、SD116 内  
SK12 (西から)  
SK15 (西から)、SK6、SK11 (南から)  
SK08 (南から)、SK10 (南から)  
SK18 (東から)、SK64~67 (西から)

写真図版36 溝

SD102 (北から)  
SD102 土層断面 (北から)、SD102 (南から)  
SD102 土器出土状況、  
SD102 内 P169 (北から)

写真図版37 溝

SD105 (北東から)  
SD105 (南から)

写真図版38 溝

SD105 (東から)  
SD105 石積み状況 (東から)  
SD105 北断面 (南から)  
SD105 中央断面 (北から)  
SD105 南端壁面の土器

写真図版39 溝

SD105・110 (北から)  
SD105・110 (南東から)

写真図版40 溝

SD105・110 (南から)  
SD105・110 北断面 (南から)  
SD105・110 中央断面 (北から)

写真図版41 溝

SD102 から SD105・110 を見る (北から)  
SD105・110 から SD102 を見る (南から)  
SD110・111 交点の集石、  
SD110 土器出土状況  
集石下の土坑、SD110 土器出土状況

写真図版42 溝

SD104 (東から)  
SD112 (南東から)  
SD112 出土軒平瓦

写真図版43 溝

SD111・113 (西から)  
SD111・113 (西から)

写真図版44 溝

- SD111・113 (東から)  
SD111・113 土層断面 (西から)  
SD113 (西から)  
写真図版45 溝  
SD115 東断面 (西から)  
SD115 西断面 (西から)  
SD115 中央断面 (西から)  
SD116 西断面 (西から)  
SD116 東断面 (西から)  
SD117 土層断面 (西から)  
SD118 土層断面 (西から)  
SD125 土層断面 (北から)
- 990132**  
写真図版46 溝  
SD110 上層 (南から)  
SD110 上層石組 (西から)  
SD110 完掘 (南から)  
写真図版47  
SD110 土器出土状況 (東から)  
SD110 土器出土状況 (東から)  
SB01 (P3) 土器出土状況 (南から)  
調査区全景 (西から)
- 2003061**  
写真図版48 全景  
全景 (北から)  
上層遺構 (東から)  
写真図版49 掘立柱建物  
SB01 (南から)  
SB01 礎盤石検出状況 (南から)  
写真図版50 掘立柱建物と土坑  
SB01 と SK01 (北から)  
SB01 と SK01 (東から)  
写真図版51 掘立柱建物  
SB01 内 P1 柱痕所割り状況 (東から)  
SB01 内 P1 礎盤石検出状況 (東から)  
SB01 内 P1 礎盤石検出状況 (南から)  
写真図版52 掘立柱建物  
SB01 内 P2 柱痕所割り状況 (東から)  
SB01 内 P2 礎盤石検出状況 (東から)  
SB01 内 P2 礎盤石検出状況 (南から)  
写真図版53 掘立柱建物  
SB01 内 P3 柱痕所割り状況 (東から)  
SB01 内 P3 礎盤石検出状況 (西から)  
SB01 内 P3 礎盤石検出状況 (南から)  
写真図版54 掘立柱建物  
SB01 内 P5 礎盤石検出状況 (南から)  
SB01 内 P4 礎盤石検出状況 (東から)
- SB01 内 P4 礎盤石検出状況 (南から)  
写真図版55 土坑  
SK01 土器出土状況 (東から)  
SK01 土器出土状況 (南から)  
写真図版56 下層遺構  
下層遺構面全景 (北から)  
SH01
- 2003172**  
写真図版57 上面の状況  
調査前の状況 (北西から)  
近世面の検出  
SK01 土層断面 (北から)  
写真図版58 中世面の検出  
SD01・02 の検出  
昭和56年度調査トレンチの検出  
同トレンチ内 SD02 土層断面 (西から)  
写真図版59 溝  
SD01・02 (西から)、SD01・02 (東から)  
SD01・02 (西から)、SD01・02 (東から)  
写真図版60 溝  
SD01・02 東端部 (西から)  
SD01・02 中央断面 (西から)  
調査区西壁 (東から)  
写真図版61 溝  
SD01 (西から)  
SD01 西断面 (西から)  
SD01 土器出土状況  
写真図版62 溝  
SD01 土器出土状況  
SD01 土器出土状況  
SD01 炭化材出土状況  
写真図版63 溝  
SD02 (東から)  
SD02 西断面 (西から)  
SD02 東断面 (西から)  
写真図版64  
SB01 (東から)  
SD06 土層断面 (南から)  
下層黒色土土器出土状況  
写真図版65  
荒田八幡方面を望む (東から)  
現地説明会風景  
多摩神戸大学名誉教授現地指導
- 2004133**  
写真図版66  
SX01 検出状況 (東から)  
SX01 全景 (東から)

SX01 北石列 (南から)  
写真図版67  
SX01 北石列 (南から)  
石材の欠欠 (南から)  
2トレンチ南壁断面

960416

写真図版68  
調査地周辺 (真上上空から)  
※平成9年3月撮影  
調査地遠景 (東上空から)  
写真図版69  
調査区全景 (真上上空から)  
全景 (東から)  
写真図版70  
全景 (西から)  
全景 (南東から)

写真図版71  
調査区東側遺構検出状況 (南から)  
調査区東側遺構検出状況 (北から)

950259

写真図版72  
トレンチ 12 断面  
トレンチ 13 断面  
トレンチ 13 遺構検出  
写真図版73  
トレンチ 15 断面  
トレンチ 16 全景  
トレンチ 16 溝・土坑

### 遺物写真図版目次

写真図版74	840020 出土遺物 1 (Pit 内)	写真図版86	980190 出土遺物 13 (包含層中)
写真図版75	840020 出土遺物 2 (Pit 内)	写真図版87	980190 出土遺物 14
写真図版76	840020 出土遺物 3 (Pit 内)	写真図版88	980190 出土遺物 15
写真図版77	840020 出土遺物 4 (包含層中)	写真図版89	980190 出土遺物 16
写真図版78	840020 出土遺物 5	写真図版90	980190 出土遺物 17
写真図版79	840020 出土遺物 6	写真図版91	980190 出土遺物 18
写真図版80	840020 出土遺物 7	写真図版92	980190 出土遺物 19
写真図版81	840020 出土遺物 8	写真図版93	980190 出土遺物 20
写真図版82	970420 出土遺物 9 (SD101・SD102・包含層中)	写真図版94	980190 出土遺物 21
写真図版83	980190 出土遺物 10 (Pit 内・SE01・SE03・SK13・SK15・SD105・SD110)	写真図版95	980190 出土遺物 22
写真図版84	980190 出土遺物 11 (SD110・SD111・SD113)	写真図版96	980190 出土遺物 23
写真図版85	980190 出土遺物 12 (SD113・SD110・SD112・SD115)	写真図版97	980190 出土遺物 24
		写真図版98	980190 出土遺物 25
		写真図版99	980132 出土遺物 26 (P6・SD110)

- 写真図版100  
990132 出土遺物 27
- 写真図版101  
2003061 出土遺物 28 (SK01)
- 写真図版102  
2003061 出土遺物 29 (SK01・Pit内)
- 写真図版103  
2003061 出土遺物 30 (竪穴住居址・SK01・包含層中)
- 写真図版104  
2003172 出土遺物 31 (SD01 最下層)
- 写真図版105  
2003172 出土遺物 32 (SD01 最下層)
- 写真図版106  
2003172 出土遺物 33 (SD01 最下層)
- 写真図版107  
2003172 出土遺物 34 (SD01 中層)
- 写真図版108  
2003172 出土遺物 35 (SD01 中層)
- 写真図版109  
2003172 出土遺物 36 (SD01 中層・SD02・包含層中)
- 写真図版110  
2003172 出土遺物 37
- 写真図版111  
2003172 出土遺物 38
- 写真図版112  
2003172 出土遺物 39
- 写真図版113  
出土遺物 40
- 写真図版114  
960416 出土遺物 41
- 写真図版115  
960416・970318 出土遺物 42
- 写真図版116  
980190 出土遺物 43 (滑石製品)
- 写真図版117  
980190・2003172・950132 出土遺物 44 (石製品)
- 写真図版118  
980190・990132・2003172 出土遺物 45 (石製品)
- 写真図版119  
2003061 出土遺物 46 (磁盤石)
- 写真図版120  
980190・970349・840020 出土遺物 47 (金属器)
- 写真図版121  
2003061・2003172 出土遺物 48 (金属器)
- 写真図版122  
980190 出土遺物 49 (木製品)
- 写真図版123  
980190 出土遺物 50 (木製品)

# 第1章 遺跡の環境

## 第1節 遺跡周辺の環境

兵庫県は現在では近畿地方の西端にあたり、北は日本海から南は太平洋まで日本列島の中央を南北に横断する位置を占める。その範囲内には標準時を決める子午線が通り、経緯度の中心として「日本のへそ」も県内に存在する。

古代においては、当時の中心であった畿内の一部である摂津を含み、畿内から西方へと繋がる全ての道（山陽道・山陰道・南海道）が、範囲内を通過していた。また、日本海・太平洋の航路とともに、瀬戸内海をたどる海上交通は古くからの人々や文物の往来に関わってきている。

神戸市は西摂から東播にまで及び、東南部は瀬戸内海と六甲山系に挟まれた東西に細長く伸びる沖積平野が広がる地形であり、山麓には海岸沿いに中位洪積段丘が発達している。

楠・荒田町遺跡が所在する中央区楠町（元は坂本村）と兵庫区荒田町の一部は、北側に六甲山の山塊、東側は安養寺山（大倉山）から神戸海洋気象台のある宇治野山、西側は会下山から滝山・菊水山と三方を囲まれた地形になり、北東から南西に延びる楕円形状の盆地地形となる。その地形内は南に行くほど低くなるが、六甲山系から派生する石井川・天王川とその合流した湊川が中央を流れ、かつては宇治川も西流していたと思われる谷地形が残される起伏の多い地形である。

楠・荒田町遺跡はその南側の開口部の東半部を占めており、その南端には推定古代山陽道が抜けている。周辺には荒田町の他に、「雪御所町」「上・下三条町」「祇園町」「馬場町」「夢野町」「熊野町」「平野」「湯の口」などの地名が残されている。

また、天王川の谷を北へと遡るルートは、古くは天王谷越と呼ばれ、現在も国道428号「有馬街道」として有馬温泉から丹波へと抜ける交通路として利用されている。

神戸市の中央区と兵庫区は文字通り神戸市や兵庫県の中心として発展してきた。現在ではさらに東側の東灘区が副都心として発展しているが、兵庫県庁や神戸市役所、神戸市立博物館などの官公庁がひしめく中央区はJR三宮駅や元町駅を中心として最も賑わう街となっている。中央区の西端には今回、発掘調査を実施した神戸大学医学部の附属病院や神戸地方裁判所、神戸市立図書館などの施設が集中しており、JR神戸駅や神戸高速鉄道高速神戸駅や市営地下鉄大倉山駅などの交通網が編まれている。一昔前には路面電車が東西南北にその軌道を走らせていた。

ここが現在の賑わいを現したのは、慶応3年(1868)の神戸開港からであるが、その直前の文久3年(1863)には和岡岬の砲台が造られ、元治元年(1864)には神戸海軍操練所が設けられ、勝海舟や坂本龍馬が滞在している。

開港に伴って、東は生田川から西は宇治川までを外国人の雑居地として柵門で限り、波止場や道路の整備が行われた。その東の湊川と宇治川に挟まれた一体は、旧来からの港町である兵庫と、開港後の港町と外国人居留地や雑居地である神戸との中間地として、大きく発展してきた。

慶応四年に設置された兵庫県は、当初、兵庫の切戸町に県庁を置いたが、明治元年には兵庫と神戸との



図1 楠・荒田町遺跡の位置（地図は明治14年当時のもの）

往來の不便さからその中程の坂本村に新築移転した。ここは明治6年には兵庫裁判所となっている。同じく坂本村には同明治元年には監獄が設けられ、宇治川の東には県立病院、同2年には洋学伝習所が移転するなど、多くの官営の施設が設置されている。

明治5年に建てられた湊川神社の周辺には大黒屋や相生座といった劇場が営まれ、同所の水族館がわが国最初(明治34年)の常設映画館といわれている。明治42年には神社の東の橋通りに新市役所が建てられており、神戸の中心として賑わうこととなる。

福原遊郭は明治元年に宇治川尻右岸近くに作られ、福原遷都の故事にちなんで命名された。明治4年には鉄道停車場のため湊川左岸に移転しており、現在の町名の元となった。

旧坂本村の神戸大学医学部附属病院のある場所は、明治6年10月に大阪鎮台兵庫分営として陸軍省に引き渡され、兵舎や操練場が設けられた。同7年には砲兵隊一個大隊が駐屯し、川崎及び和田牌の砲台で射撃訓練を行っている。

鎮台は明治10年には廃止され、その後、この土地は鎮台屋敷跡と呼ばれ、湊東区児童連合運動会などにも利用されている。明治30年には第六回関西府県連合共進会の会場となり、本館・工業館・農産館・工産館などが建てられている。

明治33年には神戸病院と県立商業学校がここへと移転されるが、大正8年には県立商業学校が転出し、敷地は神戸病院に併合されるようである。

その後、昭和5年には地下1階、地上4階建ての神戸病院本館が完成し、別館伝染病室や患者遊園地なども設けられている。

また、神戸大学医学部附属病院の東の安養寺山(現大倉山)南麓には安養寺(貞永年間、尼崎より移される)と、廣敷寺があり、後醍醐天皇勅願寺で別称壩寺と呼ばれた廣敷寺は、寺伝では14世紀前半の創建で、方四町あったといわれ、境内に坂本城があったとも伝える。

それ以前の中心地は兵庫の地である。港神戸の中心は東へと移動したが、現在でも海外航路の大型客船などが発着し、海上交通のひとつの起点となっている。その発展の源となったのが、兵庫港であり、その前身の兵庫津、大輪田泊、務古水門である。務古水門の位置は不明であるが、天然の良港であるこの地に比定する説がある。大輪田泊は弘仁3年(812)には改修の記事があり、万葉集や行基年譜にも見られることから、奈良時代には港として存在していたと見られる。その後、10世紀の中頃以降の記事が途絶えるが、承安年間(1171~74)及び治承3年(1180)には平清盛による大改修がおこなわれ、日宋貿易の拠点となる。その後、俊乗坊乗源の改修を経て、足利義満による日明貿易の遣明船の発着港として発展し、また、文安2年(1445)の「兵庫北関入船納帳」に見られる東大寺領の関銭賦課の記録から開港として重要な地であったこともわかる。応仁の乱の後は衰亡していたが、天正8年(1580)池田恒興によって築城された兵庫城の城下町として再出発し、江戸時代には天領として、兵庫船の発着する瀬戸内航路の重要な港であった。

この時代、荒田村・坂本村の一番は港町の背後の位置を占め、また、最も重要な陸路である山陽道の通過する交通の拠点であった。大輪田泊の修築と相前後して、平清盛はこの地に福原別業を営む。保元元年(1156)播磨守となった清盛は、応保2年(1162)頃摂津国八部郡を私領化し、仁安3年(1168)太政大臣を辞して出家し、その後にはこの地に退いている。辞任の際には播磨印南野に大功田を得ている。

仁安4年(1169)、福原御所に招かれた後白河上皇は清盛主催の千部法華経供養の斎庭に臨んでいる。後白河法皇は、嘉應2年(1170)には福原山荘を訪れ、宋人の来着を見物。承安元年(1171)には建春門院ら

伴って福原別業に宿し、船遊などを楽しんでいる。清盛は承安2年から安元3年(1177)まで、福原または輪田で四度の千僧供養を催し、その度に後白河法皇も臨幸している。承安4年、後白河法皇と建春門院は安芸厳島神社参詣の途中、福原別業に立ち寄っている。治承4年(1180)には、高倉上皇も安芸厳島神社参詣の途中、福原別業に立ち寄り、帰路には池中納言頼盛のあした(荒田)の山荘で笠懸け流鏡馬などを楽しんでいる。

鹿ヶ谷事件後、清盛は治承3年(1179)、福原より兵数千人を率いて上洛、法皇を幽閉し院政を停止する。そして翌治承4年(1180)、以仁王・源頼政の挙兵を鎮圧し、6月2日福原遷都が強行される。とりあえず内裏は頼盛邸、上皇御所は清盛邸、法皇御所は教盛邸、摂政藤原基通には安楽寺別当安能房邸が当てられた。4日には頼盛邸の内裏は清盛邸の上皇御所と取り替えられるが、上皇は病がすすんだため、7月、重御邸へと移っている。

輪田に新都を建設することが検討されたが、用地の手狭なことから小屋野・印南野が新都の候補としてあがった。その計画は挫折し、7月には福原をしばらく皇居となすこととなり、8月上旬には福原は離宮として営むこと、八省大内を造るに及ばないこと、大路・小路は適宜開き、しかるべき廷臣には宅地を割り与えること、大嘗会は延引することが決まった。しかし清盛は私費をもって皇居を新造し、八省をも造る計画であった。安徳天皇は10月になって寝殿ができあがった新内裏へ移っている。「山槐記」を記した藤原(中山)忠親も新造の宿舎が完成している。他の貴族たちも取り壊した京の屋敷を淀川に浮かべて福原へと移築している。

半年後には遷都し、翌年清盛は没する。寿永2年(1183)平宗盛は安徳天皇を奉じて九州へと都落ちし、その途上、福原に火を放つ。翌寿永3年には福原へと戻るが、生田森から福原・輪田・兵庫・須磨にわたる一の谷の合戦により再び福原を去り、西走する。鳥島の合戦を経て、壇ノ浦の合戦。元暦元年(1185)平家一門は滅亡する。

ちなみに清盛異母弟である頼盛は、寿永2年の都落ちの際も京に留まり、一族滅亡後に没官領となった播磨などの自領は復されている。

その後、この地には先の廣巖寺が創建され、足利尊氏や今川了俊が逗留した湊川宿なども設けられたようである。そして、建武3年(1336)湊川の戦いにおける楠木正成の終焉の地ともなった。

湊川には明治元年(1868)新橋架橋が竣工され、兵庫から神戸への往來が便利となった。たびたび氾濫をおこすこの川は、明治7年に堤防工事が行われたが、港に流れ込む土砂の問題もあり、付け替えの案が検討されてきた。明治29年には大水害がおこり、翌年に会下山背後の丘陵を隧道で通過する付け替え工事を起工。同34年に通水が行われた。現在でも人災を含めて水害を引き起こす湊川は、これにより大きく西へと流路を変更した。

このように明治の神戸港の発展に伴って、湊川やそれに先だって生田川、鯉川などが付け替えられている。急峻な山塊から短距離で海に到達する六甲南麓の河川は多くの災害を引き起こす。ここに生活を営む人々はそれに打ち負かされ、あるいは抵抗してきた歴史が見られる。

楠・荒田町遺跡の奥に広がる一帯は、石井川・天王川・湊川を鴨川に見立て小京都の観をもち、それが福原京あるいは平家一門の別業が設けられた一因であるとされている。

新湊川以前の湊川は東川崎町のデルタを形成したが、古くは和田岬のデルタをも形成したといわれ、この海に突出したデルタが港として適していたとされる。



図2 楠・荒田町遺跡周辺の遺跡分布

## 第2節 周辺の遺跡(図1)

近隣では旧石器時代まで遡る遺跡は会下山遺跡(16)などしかなく、きわめて少ない。縄紋時代になると、楠・荒田町遺跡(1)でも縄紋早期以前まで遡る尖頭器が出土しており、中期から晩期にかけての土坑や貯蔵穴も検出されている。宇治川南遺跡(38)では早期から晩期にかけての遺物が出土しており、黒曜石や石棒・土偶なども出土している。山麓の祇園遺跡(7)でも早期・前期の遺物が出土している。低地では大開遺跡(20)や上沢遺跡(17)、五番町遺跡(29)などが挙げられる。

弥生時代になると、遺跡は爆発的に増える。楠・荒田町遺跡では前期から中期初頭の貯蔵穴が検出され、宇治川南遺跡や大開遺跡では前期の住居が検出されている。大開遺跡は前期前半の環濠集落である。中期になると楠・荒田町遺跡でも堅穴住居や掘立柱建物、方形周溝墓などが検出され、宇治川南遺跡では木棺墓群が見つかった。後期には長田神社境内遺跡や長田遺跡(29)に集落が営まれる。また、中期や後期には熊野遺跡(14)・会下山遺跡、河原遺跡(13)、天王谷遺跡(2)、祇園神社裏山遺跡(3)などの丘陵上にも高地性集落が営まれるようになる。

周辺は市街化が著しいため、古墳は消滅や埋没したものが多くあると思われる。夢野丸山古墳・会下山二本松古墳・念仏山古墳(37)・池田古墳群(31)などが知られているにすぎない。荒田八幡神社境内も周囲から高くなっており、墳丘の可能性が考えられているが、確認されていない。集落址は、楠・荒田町遺跡で中期や後期の住居が見つかっており、他に韓式土器が出土した上沢遺跡や、御蔵遺跡(33)、御船遺跡(32)、神楽遺跡(34)、淡川遺跡(21)、三番町遺跡(30)などが知られる。また、下山手北遺跡(41)では7世紀前半の倉庫を含む掘立柱建物群が検出されている。

奈良時代の遺跡には、銅碗が出土した上沢遺跡、8世紀末～9世紀の倉庫を含む掘立柱建物群が検出され、八部郡衙の推定地である御蔵遺跡や、神楽遺跡、御船遺跡などがあり、楠・荒田町遺跡、神戸大学医学部付属病院構内でも920174調査区で多くの土器が出土した土坑が検出されているが、その他の地区では土器が散見されるにすぎない。兵庫津遺跡(24)では大輪田泊の時代にまで遡る遺構は、近年ようやく発見されはじめている。室内遺跡(28)からは土製の仏像の一部や瓦が出土しており、寺院跡の存在が伺われる。

平安時代前半の遺跡には下山手北遺跡があり、貴族クラスの邸宅跡と考えられる園池を伴う掘立柱建物群が検出された。宇治川南遺跡では10世紀末から13世紀前半の遺物が出土している。神楽遺跡では平安時代中期の緑釉陶器・灰釉陶器などの遺物が出土している。

平安時代後半から鎌倉時代初頭の遺構・遺物の出土は増加する。楠・荒田町遺跡の南部地域では、地下鉄工事に伴う1978年度の調査(図3、1)で10～12世紀頃の遺物が出土する柱穴群が検出されたが、大規模な建物を構成するものではない。周辺ではマンション建設などに伴った調査が行われているが、同時期の遺構・遺物は一般的な集落遺跡のものである。但し、楠小学校跡地で検出された幅4m以上、深さ1.4m以上の大溝は、推定古代山陽道に沿った位置で検出されており、12世紀後半から13世紀前半頃の遺物が出土している。(図3、6) また、神戸大学医学部の南側で実施された神戸地方検察庁楠町宿舎建設に伴う確認調査(920283)(図3、10)では推定古代山陽道に直交する方向の幅約3mの溝が検出されており、南端部では山陽道によって規定された地割りに大型の溝が設けられていることがわかる。

楠・荒田町遺跡の西端部地域では、1992年度に荒田公園内で行われた調査(図3、11)で、溝によって

区画された掘立柱建物群が検出され、11世紀後半から13世紀代の土器が出土している。また、石帯や瓦も出土している。権列や建物の主軸はN29~38°Wの角度をもつ。

雪御所遺跡(8)は古く明治時代に礎石と考えられている花崗岩の巨石や瓦が出土しており、1987年度におこなわれた調査では、該当時期の遺構は検出されなかったものの、多量の土師器や須恵器・瓦器・瓦が出土している。

祇園遺跡は天王越えである有馬街道が山に分け入る山麓に広がる遺跡で、これまでの数回の調査で、園池遺構などが検出され、当時の貴族の邸宅の一部が現れた。多量の土師器、京都産を含む瓦、玳瑁天目茶碗を含む中国製磁器や石鍋などの滑石製品が出土しており、平重盛やその子維盛、資盛など平家一門の有力者の邸宅が想定されている。

この他、湊川遺跡・上沢遺跡・室内遺跡・御船遺跡でも同時期の遺物が見つまっている。

室町時代の遺構は楠・荒田町遺跡でも少ないが、平成11年度の調査(遺跡調査番号990226)(図3、15)では同時代の井戸や溝が検出され、湊川宿との関連が考えられている<sup>2)</sup>。

#### 【註】

(1) 明治28年に荒田町となったが、もとは神戸市の大字で、現在の荒田町1~4丁目と楠町1~7丁目の範囲を含んでいた。

荒田の地名は応神天皇紀に見える荒田別の居住地、仁徳天皇の姉荒田郎女の御名代、福原京期の開発、湊川の洪水による荒地などの説があったが、平成3年度に調査された須磨区大田町遺跡出土の円面硯にヘラ描きされた「荒田郡中富里荒田直口」の文字から、8世紀の前半に荒田郡が存在したものと考えられている。

(2) 文章中の(番号)は図版2の番号に対応している。

#### 【参考文献】

- 楠町史蹟保存会 1936「楠町の今昔」  
米花登他 1972「神戸開発百年史 港勢編」神戸市  
前田章賀 1999「平野郷土史」  
山田邦和 2005『福原京』の都市構造『古代文化』第54巻第4号 財団法人古代学協会  
須藤 宏 2005「本皇居・新内裏の位置と祇園遺跡」『平家と福原京の時代』歴史資料ネットワーク編  
高橋昌明 2005「福原の平家邸宅について」『平家と福原京の時代』歴史資料ネットワーク編  
高橋昌明 2006「福原運都をめぐる政治—治承2年(1178)から同4年8月末まで—」『歴史学研究』816 歴史学研究会編  
元木泰雄 2001「福原運都の周辺」『兵庫のしおり』第4号 兵庫県  
神戸市教育委員会 1989「昭和61年度 神戸市埋蔵文化財年報」  
神戸市教育委員会 1995「平成4年度 神戸市埋蔵文化財年報」  
神戸市教育委員会 1996「平成5年度 神戸市埋蔵文化財年報」  
神戸市教育委員会 1997「平成6年度 神戸市埋蔵文化財年報」  
神戸市教育委員会 1998「平成7年度 神戸市埋蔵文化財年報」  
神戸市教育委員会 2000「祇園遺跡」  
真野 絳 1993「楠・荒田町遺跡発掘調査概報—第5次—」神戸市教育委員会

神戸市教育委員会 2005「下山手北遺跡第2次調査現地公開のしおり」

富山直人 2002「福原と和田新京一行宮から離宮へへ」『歴史と地理』第562号 山川出版社

岡田章一他 1997「橘・荒田町遺跡—神戸大学付属病院構内遺跡—」兵庫県文化財調査報告書第162冊 兵庫県教育委員会

岡田章一他 2004「兵庫津遺跡Ⅱ」兵庫県文化財調査報告書第270冊 兵庫県教育委員会

神戸市 1988「新修神戸市史 歴史編Ⅰ 自然考古」

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2000「橘・荒田町遺跡」『平成11年度 年報』

森内秀造 1993「『荒田郡』銘硯と大田町遺跡について」『大田町遺跡』兵庫県文化財調査報告第128冊 兵庫県教育委員会

森岡秀人 2001「摂津・八十塚古墳群と瓦原郡葦屋郷・賀美郷周辺の古代史」『八十塚古墳群の研究』芦屋市文化財調査報告

第33集 関西大学文学部考古学研究第7号 関西大学文学部考古学研究室

竹内理三編 1988「角川日本地名辞典」28兵庫県 (株)角川書店

表1 周辺の遺跡

1	橘・荒田町遺跡	25	兵庫城跡
2	天王谷遺跡	26	真光寺五輪塔
3	祇園神社裏山遺跡	27	清盛塚十三重塔
4	兵庫区No.4遺跡	28	室内遺跡
5	兵庫区No.5遺跡	29	五番町遺跡・長田遺跡
6	兵庫区No.6遺跡	30	三番町遺跡
7	祇園遺跡	31	池田古墳群
8	雪御所遺跡	32	御船遺跡
9	兵庫区No.15遺跡	33	御藏遺跡
10	東山遺跡	34	神楽遺跡
11	兵庫区No.17遺跡	35	苅藁遺跡
12	菊水町遺跡	36	長田町No.20遺跡
13	河原遺跡	37	念仏山古墳
14	熊野遺跡	38	宇治川南遺跡
15	兵庫区No.18遺跡	39	東川崎町遺跡
16	会下山遺跡	40	元町遺跡
17	上沢遺跡	41	下山手北遺跡
18	水木遺跡	42	下山手遺跡
19	塚本遺跡	43	北長狭遺跡
20	大開遺跡	44	中宮古墳・中宮黄金塚古墳
21	湊川遺跡	45	中山手遺跡
22	福原遺跡	46	花隈城跡
23	福巖寺	47	中央区No.7遺跡
24	兵庫津遺跡		

## 第2章 調査に至る経緯と経過

### 第1節 調査に至る経緯

兵庫県神戸市の中央区から兵庫区にかけてのこの地域周辺には、文献に見られる平安時代末の福原遷都に関わる内裏、法王・上皇の御所があったらしいことは古くから言われてきており、1922年には喜田貞吉によりこの平安時代末の平家一門の邸宅地が、淡川沿いの平野から荒田町一帯の高台に比定されている。

楠・荒田町遺跡が確認されたのは、1975年前後に神戸大学医学部附属病院内の下水工事中に太形始刃石斧が採集されたことによる。この時点では縄紋時代から弥生時代の遺跡として「神戸大学附属病院内遺跡」と名付けられている。

その後、神戸市営高速鉄道（地下鉄）の工事に伴う昭和53年度の発掘調査（図3、1）で、旧生田区（現中央区）楠町6丁目から兵庫区荒田町1丁目にまたがる広い範囲で、弥生時代前期末から中期初頭の貯蔵穴群や中期中葉の堅穴住居址、中期後葉の木棺墓、古墳時代後期の堅穴住居址、平安時代の柱穴などが検出され、「楠・荒田町遺跡」と命名された。

さらに、周辺ではホテル建設やマンション建設等に伴い逐次、調査がおこなわれている。昭和60年度の調査（図3、2）でも弥生時代前期や中期の貯蔵穴群が検出されている。

昭和61年度の調査（図3、3）では、弥生時代中期の方形周溝墓や縄紋時代後期の土坑なども検出されている。

平成元年、2年の調査（図3、4・5）では弥生時代中期や古墳時代中期の住居址や中世の堀状遺構が検出されている。また、市立橋小学校跡地の調査（図3、6）では、推定古代山陽道に沿った方向の12世紀後半～13世紀前半の幅4.5～5m以上、深さ1～1.4m以上の大溝が検出されている。

平成4年度には確認調査（遺跡調査番号920283、図3、10）ではあるが、平安時代末頃の幅約3mの溝が南北方向に走っていることが確認された。また、荒田公園の地下駐車場建設に伴った調査（図3、11）では縄紋時代中期から晩期の貯蔵穴、弥生時代中期の掘立柱建物や溝、平安時代から鎌倉時代の柵列で方形に区画された掘立柱建物群が検出されている。

平成6年度の調査（図3、13）でも弥生時代の方形周溝墓が検出されている。また、平成11年度の調査（遺跡調査番号990226、図3、15）では、弥生時代中期の大溝の他、室町時代の深さ1.2m、幅4～5m以上の堀状の溝や井戸が検出された。

これらの調査によって、縄紋時代から中世にわたる複合遺跡としての広い範囲が「楠・荒田町遺跡」として認識されるようになった。

神戸大学医学部附属病院構内においても、1981・82年度に神戸大学多淵敬敏氏によって調査が行われ、大型の掘立柱建物や二重の濠が検出され、初めて「福原京」に関連する遺構として認識された。

その後、1984年度からは兵庫県教育委員会によって、附属図書館・管理棟、看護宿舎、臨床研究棟、第1病棟、記念会館、立体駐車場などの工事に伴って逐次にわたって調査が実施されている。また、南側に隣接する医学部大学院演習施設においても確認調査が行われている。



図3 楠・荒田町遺跡と既調査地点

## 第2節 調査の経過

### 1 発掘調査

神戸市中央区楠町に所在する神戸大学医学部附属病院構内及び大学院演習施設・基礎学舎内で予定される工事に伴い、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所では逐次調査を実施してきた。三十数次に及ぶ確認調査・本発掘調査等は表2に示すとおりであるが、一帯は市街地であり、また構内には昭和5年頃から鉄筋建ての病院施設が既存していたことから、遺跡の残存状態は非常に悪く、本発掘調査まで及んだのは十数地点にすぎない。

### 2 本発掘調査

本発掘調査は、遺跡調査番号 840020・850055・870031・920174・940257・960416・970420・980112・980190・980351・990132・2003061・2003172 の十三次にわたっておこなわれた。また、遺跡調査番号 950259 は震災復興事業としておこなわれた確認調査で、一部遺構が検出されている。遺跡調査番号 2003172 は前年度に検出された二条の壕の延長部分を探るため、補助金を用いて実施した確認調査である。

これらの本発掘調査の成果のうち、遺跡調査番号 850055・870031・920174・940257 については、すでに平成8年度発行の「楠・荒田町遺跡」兵庫県文化財調査報告第162冊により報告をおこなっている。

本報告書ではその残り、遺跡調査番号 840020・960416・970420・980112・980190・980351・990132・2003061・2003172 の本発掘調査や、遺跡調査番号 950259・2003172 の調査について報告する。

また、平成15年に立体駐車場建設に伴う調査をおこなった遺跡調査番号 2003061・2003172 の地点では、平家の福原京の時代に該当する時期の二重の溝や土坑が検出された。これらの遺構は、一部切り取りや剥ぎ取りをおこなっている。また、神戸大学の努力により、工法を一部変更することによって、遺構は地下に保存されることとなった。その経緯については第12章で触れている。

### 3 出土品整理作業

発掘調査によって出土した遺物のうち一部は発掘調査事務所に洗浄をおこなったが、洗浄・ネーミング・一部の接合補強などの整理作業については、平成17年度より、兵庫県埋蔵文化財調査事務所の魚住分館（明石市魚住町）にて開始し、引き続き、神戸市兵庫区荒田町の埋蔵文化財調査事務所において接合・補強、実測・拓本、復元、写真撮影、写真整理、図面補正、トレース作業を実施した。また、金属器の保存処理、分析鑑定もおこなった。

平成17・18年度の整理作業の担当は以下のとおりである。

所長	平岡憲昭
整理保存班 主任調査専門員	池田正男
主査	岡田章一
主査	別府洋二

表2 神戸大学医学部附属病院構内補、荒田町遺失免提調査一覧

調査番号	調査種別	調査主体	調査担当	調査期間	調査場所	所在区	事業名	備考
84020	全面調査	神戸大学	多田知樹	1981/12/15	神戸中央区 榎町7丁目5-2	神戸大学医学部附属病院改築		
	全面調査	神戸大学	多田知樹	1982/7/12	1982.8.31	神戸中央区 榎町7丁目5-2	神戸大学医学部附属病院改築	
	部分調査	神戸大学	山田善博	1984/8/15	1984.8.31	神戸中央区 榎町7丁目5-2	神戸大学医学部附属病院改築	
	全面調査	神戸大学	酒口利彦	1984/9/13	1984.9.30	神戸中央区 榎町7丁目5-2	神戸大学医学部附属病院改築	
	全面調査	神戸大学	酒口利彦	1984/9/13	1984.10.30	神戸中央区 榎町7丁目5-2	神戸大学医学部附属病院改築	
87016	全面調査	神戸大学	藤原正雄	1985/5/70	1985.7.4	160 神戸中央区 榎町7丁目5-2	神戸大学医学部附属病院改築	
87016	全面調査	神戸大学	藤原正雄	1987/7/16	1987.7.13	160 神戸中央区 榎町7丁目5-2	神戸大学医学部附属病院改築	
87016	全面調査	神戸大学	藤原正雄	1987/7/22	1987.8.30	875 神戸中央区 榎町7丁目5-2	神戸大学医学部附属病院改築	
87001	全面調査	神戸大学	藤原正雄	1987/10/11	1987/10/18	323 神戸中央区 榎町7丁目5-2	神戸大学医学部附属病院改築	
87001	全面調査	神戸大学	藤原正雄	1987/11/11	1987/11/11	9 神戸中央区 榎町7丁目5-1	神戸大学医学部附属病院改築	
87014	全面調査	神戸大学	藤原正雄	1982/7/7	1982.10.20	129 神戸中央区 榎町7丁目	神戸大学医学部附属病院改築	
840170	分室調査	神戸大学	藤原正雄	1984/8/24	1984.8/25	10 神戸中央区 榎町7丁目	神戸大学医学部附属病院改築	
84025	全面調査	神戸大学	岡崎正雄	1984/10/24	1984.12/7	262 神戸中央区 榎町7丁目	神戸大学医学部附属病院改築	
850132	全面調査	神戸大学	岡崎正雄	1984/12/7	1984.12/8	57 神戸中央区 榎町7丁目	神戸大学医学部附属病院改築	
85029	全面調査	神戸大学	岡崎正雄	1985/5/20	1985/5/30	24.5 神戸中央区 榎町7丁目5-2	神戸大学医学部附属病院改築	
860001	全面調査	神戸大学	岡崎正雄	1985/11/6	1986/12/11	151 神戸中央区 榎町7丁目5-2	神戸大学医学部附属病院改築	
860001	全面調査	神戸大学	岡崎正雄	1986/4/15	1986.4/16	12 神戸中央区 榎町7丁目5-2	神戸大学医学部附属病院改築	
860001	全面調査	神戸大学	岡崎正雄	1986/7/29	1986.12/9	4 神戸中央区 榎町7丁目5-2	神戸大学医学部附属病院改築	
860414	全面調査	神戸大学	岡崎正雄	1992/2/4	1992/2/25	106 神戸中央区 榎町7丁目5-2	神戸大学医学部附属病院改築	
870318	全面調査	神戸大学	岡崎正雄	1997/10/20	1997/10/30	7 神戸中央区 榎町7丁目15-10	神戸大学医学部附属病院改築	
870205	全面調査	神戸大学	岡崎正雄	1990/2/9	1990.3/19	523 神戸中央区 榎町7丁目	神戸大学医学部附属病院改築	
870441	全面調査	神戸大学	岡崎正雄	1992/12/17	1993/6/25	12 神戸中央区 榎町7丁目15-1	神戸大学医学部附属病院改築	
880112	全面調査	神戸大学	岡崎正雄	1998/10/10	1999/3/12	21 神戸中央区 榎町7丁目	神戸大学医学部附属病院改築	
890150	全面調査	神戸大学	岡崎正雄	1996/3/20	1996/3/25	364 神戸中央区 榎町7丁目	神戸大学医学部附属病院改築	
890150	全面調査	神戸大学	岡崎正雄	1999/3/20	1999/3/29	19 神戸中央区 榎町7丁目	神戸大学医学部附属病院改築	
890150	全面調査	神戸大学	岡崎正雄	1999/3/20	1999/4/21	350 神戸中央区 榎町7丁目	神戸大学医学部附属病院改築	
890150	全面調査	神戸大学	岡崎正雄	1999/12/21	1999.12/21	11 神戸中央区 榎町7丁目	神戸大学医学部附属病院改築	
890150	全面調査	神戸大学	岡崎正雄	2001/3/3	2001.3/3	6 神戸中央区 榎町7丁目	神戸大学医学部附属病院改築	
890150	全面調査	神戸大学	岡崎正雄	2001/6/4	2002.6/4	14 神戸中央区 榎町7丁目5-2	神戸大学医学部附属病院改築	
890221	全面調査	神戸大学	岡崎正雄	2000/1/28	2002/1/29	4 神戸中央区 榎町7丁目5-2	神戸大学医学部附属病院改築	
890061	全面調査	神戸大学	岡崎正雄	2000/8/4	2001/9/20	244 神戸中央区 榎町7丁目5-2	神戸大学医学部附属病院改築	
890137	全面調査	神戸大学	岡崎正雄	2001/10/10	2003.12/11	320 神戸中央区 榎町7丁目5-2	神戸大学医学部附属病院改築	
890132	全面調査	神戸大学	岡崎正雄	2004/3/13	2004.11/22	20 神戸中央区 榎町7丁目5-2	神戸大学医学部附属病院改築	
890130	全面調査	神戸大学	岡崎正雄	2003/7/11	2003.7/11	45 神戸中央区 榎町7丁目5-1	神戸大学医学部附属病院改築	

	主査	菱田淳子
	主査	中村 弘
	主任	岡本一秀
非常勤嘱託職員	【魚住分館】	長谷川洋子・伊東ミネ子・衣笠雅美・江口初美・早川亜紀子
	【保存処理】	栗山美奈・大前篤子・藤井光代・清水幸子
	【接合～復原】	眞子ふさ恵・島村順子・木村淑子・中田明美・小野潤子・三好綾子
		奥野政子・又江立子・荒木由美子・藤池かづさ
	【実測～トレース】	森本貴子・岸野奈津子・長川加奈子・三島重美

平成 19 年度にはトレース・レイアウト作業、原稿執筆及び木製品の保存処理をおこなった。平成 18 年 10 月 13 日に加古郡播磨町に開館した兵庫県立考古博物館に組織が移行し、新組織のもと、編集作業を経て報告書を刊行した。

整理作業の担当は以下のとおりである。

	館長	石野博信
	副館長	松下真一
調査部調査第 1 班	担当課長補佐	吉職雅仁
	主査	別府洋二
	主査	山田清朝
同 調査第 2 班	主査	織 英記
同 企画調整班	主査	山本 誠
	主査	深江英憲
事業部学芸課	主査	中川 渉
調査部整理保存班	調査専門員	西口和彦
	担当課長補佐	岡田章一
	主査	岸本一宏
	主査	岡本一秀

非常勤嘱託員 【トレース～レイアウト】 森本貴子・高瀬敬子・三島重美

【保存処理】 今村直子・小林優子・渡辺三代・村上令子

奇しくも、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所がその本拠地であった神戸市兵庫区荒田町を後にして、西方の加古郡播磨町の兵庫県立考古博物館に移転した年に、本報告書「楠・荒田町遺跡Ⅱ」が刊行されることとなった。また、神戸大学が国立大学法人となったこともあって、今後は神戸大学医学部附属病院構内の埋蔵文化財の調査は神戸市教育委員会が行うこととなった。

#### 【参考文献】

喜田貞吉 1922 「福原京」神戸市史別録 1

神戸市教育委員会 1980 「楠・荒田町遺跡発掘調査報告書」

- 神戸市教育委員会 1990 「楠・荒田町遺跡発掘調査概報—第5次—」
- 神戸市教育委員会 1990 「楠・荒田町遺跡Ⅲ」
- 神戸市教育委員会 1985 「楠・荒田町遺跡現地説明会資料」
- 神戸市教育委員会 1988 「楠・荒田町遺跡」『昭和60年度 神戸市埋蔵文化財年報』
- 神戸市教育委員会 1989 「楠・荒田町遺跡」『昭和61年度 神戸市埋蔵文化財年報』
- 神戸市教育委員会 1992 「楠・荒田町遺跡」『平成元年度 神戸市埋蔵文化財年報』
- 神戸市教育委員会 1995 「楠・荒田町遺跡 第11次調査」『平成4年度 神戸市埋蔵文化財年報』
- 神戸市教育委員会 1997 「楠・荒田町遺跡 第13次調査」『平成6年度 神戸市埋蔵文化財年報』
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2000 「楠・荒田町遺跡」『平成11年度 年報』
- 多淵敏樹 1984 「医学部附属病院遺跡を調査して—福原京の発掘—」『神戸大学学報』№340

## 第3章 昭和58年度の調査（遺跡調査番号840020）

### 第1節 概要

昭和58年度に、神戸大学医学部附属病院改築に伴い、確認調査を実施した。確認調査では、11箇所トレンチを設定し、埋蔵文化財包蔵の有無の確認をおこなった。この結果、近接する2箇所のトレンチにおいて、遺構・遺物を確認した。そこで、これら2箇所のトレンチを中心とした地区に埋蔵文化財が包蔵されているものと判断され、この地区を本発掘調査することとなったものである。

本発掘調査は、上記確認調査に引き続き、昭和59年9月17日から10月30日にかけて実施した。確認調査の結果、調査地が崩壊しやすい砂を中心とした土砂からなるため、調査地の安全を確保するため、周囲に鋼矢板を打ち込んで実施した。このため、調査の際、調査区周囲の土層観察をすることはできなかった。

調査は、後世の擾乱・整地層を中心として、遺物包含層の上層までは重機により掘削し、以下は人力により進めていった。調査成果の測量は、調査員および調査補助員によりオフセット方式により実施した。

### 第2節 基本層序と遺構の検出

当調査区の基本層序は、上から①整理層、②淡青灰色細砂～粗砂、③暗黄灰色細砂～粗砂、④シルト混じり黒褐色細砂～粗砂、⑤小礫混じり黄褐色細砂～粗砂からなる。

②層と③層については、洪水に起因する堆積層である。細砂～粗砂は、花崗岩を母岩とするいわゆる真砂と考えられる。当層中からも土器が若干出土している。④層が顕著に土壌化した層で、いわゆる包含層に相当する層である。本来、この下の⑤層と同一の層で、この上層が土壌化した層と考えられる。当層からは、多くの土器が出土している。⑥層は、当遺跡の基盤をなす層である。そして、遺構は、全て⑥層上面で検出されている。

### 第3節 遺構（図版3・4、写真図版6・7）

掘立柱建物・柱穴・溝を検出した。

#### 1. 掘立柱建物

##### SB01

調査区中央部やや西側で検出した。建物全体を検出することはできなく、大半は調査区の北側へ広がっている。総柱建物と考えられ、建物南側が3間、東側が1間+αの規模からなる。ただし、南側が桁行・梁行どちらに相当するのかについては、明らかできない。南側の規模は、全長5.50mを測り、その柱間は、西側から1.75m・1.85m・1.90mである。東側は3.30m検出し、南側の柱間は1.75mである。

柱穴は、掘り方の平面形が円形をなす。その規模は、22cm～35cmを測り、検出面からの深さは9cm～20cmを測る。1穴を除いては、柱底を確認することができ、その径は10cm～13cmを測る。

柱穴内から出土した遺物はわずかで、いずれも小片であった。このため、本建物に伴う遺物で図化できたものはない。

#### SB02

調査区中央部やや東側で検出した。後述する SB03 とは、平面的に重複しているが、調査では明確な前後関係を把握することはできなかった。SB01 同様、建物全体を検出することはできなく、大半は調査区の北側へ広がっている。桁行 4 間、梁行 1 間 +  $\alpha$  からなる総柱建物である。南桁行の規模は、全長 7.60m を測り、柱穴間の規模は、西側から 1.75m・1.95m・1.95m・1.95m である。東梁行は全長 2.50m 検出し、南側の柱穴間の規模は 1.90m である。

柱穴掘り方の平面形はいずれも円形をなす。また、各柱穴の検出面からの深さは、12cm～17cm を測る。なお、当建物を構成する柱穴において、いずれも柱底を確認することはできなかった。

柱穴内から出土した遺物はわずかで、いずれも小片であった。このため、本建物に伴う遺物で図化できたものはない。

#### SB03

調査区の東側で検出した。先述した SB02 とは、平面的に重複しているが、調査では明確な前後関係を把握することはできなかった。他の建物同様、建物全体を検出することはできなく、大半は調査区の北側へ広がっている。桁行 1 間 +  $\alpha$ 、梁行 2 間からなる側柱建物と考えられる。全体が復元できる南梁行の規模は、全長 7.35m を測る。柱穴間の規模は、西側から 3.60m・3.85m である。西桁行は、2.90m 検出し、柱穴間の距離は 2.70m である。

柱穴掘り方の平面形は、隅丸方形と方形を指向している。ただし、柱穴掘り方の主軸方向と建物の棟軸方向が、一致する柱穴と一致しない柱穴とが認められる。なお、掘り方の規模は、一辺が 67cm～1.14m と大型である。また、検出面からの深さは 24cm～42cm を測る。

遺物は、P19 から 1 と 2 が、P46 から 3～7 が、P72 から 8～14 が出土している。

## 2. 柱穴

上記の建物を構成する柱穴以外に、多くの柱穴を検出している。これらの柱穴からは、調査区の限界もあり、建物を復元することはできなかった。掘り方の規模も、平面円形を呈する小形のものから、平面方形を指向する大型のものまで、多様である。柱穴相互に切り合い関係も認められることから、時期的な差が認められる。

なお、これらの柱穴のいくつかからは、良好な資料が得られている。これについては、後項で報告する。

## 3. 溝

7条検出した。いずれも直線的な溝で、その方向性もほぼ同じである。また、規模もほぼ同じである。なお、溝相互の切り合い関係は認められない。いずれの溝からも土器の出土はわずかで、図化できるような遺物は認められなかった。いずれの溝も柱穴と切り合い関係にあり、柱穴に切られている。したがって、柱穴より若干古く位置付けられる。

#### SD01

SD01は、調査区東半部に位置する。2.5m検出し、北端は調査区内で収束し、南端は調査区外へ伸びている。検出面における巾は50cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは14cmである。埋土は、暗灰色中細砂1層からなる。

#### SD02

SD02は、調査区東半部に位置する。2.5m検出し、南端は調査区外へ伸び、北端は後世の攪乱を受け途切れている。検出面における巾は44cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは5cmである。埋土は、暗灰色中細砂1層からなる。

#### SD03

SD03は、調査区東半部に位置する。4.3m検出し、両端とも調査区外へ伸びている。一部、SB02を構成する柱穴に切られている。検出面における巾は62～124cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは10cmである。埋土は、暗灰色中細砂1層からなる。

#### SD04

SD04は、調査区中央部に位置する。1.7m検出し、北端は調査区内で収束し、南端はSB03を構成する柱穴に切られている。検出面における巾は50cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは12cmである。埋土は、暗灰色中細砂1層からなる。

#### SD05

SD05は、調査区西半部に位置する。4.1m検出し、両端とも調査区外へ伸びている。SD06同様、SB01を構成する柱穴に切られている。検出面における巾は30～46cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは8cmである。埋土は、暗灰色中細砂1層からなる。

#### SD06

SD06は、調査区西半部に位置する。4.1m検出し、両端とも調査区外へ伸びている。一部、SB01を構成する柱穴に切られている。検出面における巾は50cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは5cmである。埋土は、暗灰色中細砂1層からなる。

#### SD07

SD07は、調査区西半部に位置する。4.1m検出し、両端とも調査区外へ伸びている。検出面における巾は72cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは10cmである。埋土は、暗灰色中細砂1層からなる。

## 第4節 遺物（図版5～7、写真図版74～81）

### 1. 掘立柱建物出土の土器

#### SB03

土師器・瓦器・須恵器が出土している。

土師器は皿が9点（1～4・8～12）出土している。これらのなかで、3は、口縁部がての字形口縁をなし、他の皿と特徴を異にする。また、4についても、胎土・色調等の特徴が他と異なる。他の小皿については、いずれも、押圧整形後、口縁部を中心にヨコナゲ調整により仕上げられている。

瓦器は、甕が2点（5・13）出土している。5は、内外面ともにヘラミガキは認められない。一方

13は底部を中心に残存し、内面見込みには、平行するヘラミガキが認められる。

須恵器は、椀(6・7)とこね鉢(14)が出土している。椀の7は、底部を中心に残存するものがあるが、見込みが明確に落ち込み、平高台をなす。

## 2. 柱穴出土の土器

### P4

瓦器椀が1点(15)出土している。底部を中心に残存し、見込み部には平行するヘラミガキが認められる。

### P11

須恵器の椀の口縁部片(16)が出土している。小片のため、径の復元は困難である。

### P20

土師器・須恵器・施釉陶器が出土している。土師器は、法量的に小型(17~19)と大型(20・21)に分類できるが、いずれも押圧整形により仕上げられている。

須恵器は、こね鉢が1点(22)出土している。体部から口縁部にかけて残存し、外面は粗く仕上げられている。

施釉陶器は、高台付皿が1点(23)出土している。

### P43

土師器と須恵器が出土している。土師器は、皿(24~26)と杯(27)が出土している。皿は、3個体とも、同様の整形・調整手法により仕上げられている。

須恵器は、椀(28~34)が出土している。いずれも、同タイプに分類できるものであるが、31と32の底部には、わずかに平高台の痕跡が認められる。

### P47

須恵器の椀が1個体(35)出土している。

### P48

土師器の皿(36)と須恵器の椀(37~51)が出土している。須恵器の椀は、全て同タイプに分類できるものである。ただし、体部形態的特徴において、平高台の痕跡が明瞭なもの(48・50)と明瞭ではないもの(49・51)が認められる。

### P65

須恵器のこね鉢の底部片(52)が出土している。

### P96

土師器の皿(53)と瓦器の椀(54)が出土している。小皿は、押圧成形により仕上げられているが、全体的に歪みが顕著である。

瓦器椀は、ほぼ完存する。底部には、高台が貼り付けられているが、椀の中心よりややずれた位置に貼り付けられている。ヘラミガキは内面のみに施され、外面には施されていない。

### P103

瓦器椀が1個体(55)出土している。口縁部がわずかに残存する。内面にはヘラミガキがやや密に施されているが、外面には認められない。

### P117

土師器の皿が1個体(56)出土している。押圧成形により仕上げられている。

**P158**

土師器の皿が1個体(57)出土している。口縁部は2段のヨコナデ調整により仕上げられている。

**P159**

瓦器碗の底部片(58)が出土している。高台はヨコナデにより貼付けられ、断面は三角形をなす箇所と逆台形をなす箇所がある。見込み部には平行ミガキと圏線状ミガキの一部が認められる。

**P161**

瓦器の皿(59)と碗(60)が出土している。皿は、押圧調整により仕上げられているが、内外面ともヘラミガキは認められない。

碗は、完形に復元できるもので、全体を押圧により整形され、口縁部がヨコナデ調整により仕上げられている。また、底部には断面三角形をなす高台が貼り付けられているが、高台高0.15cmと小規模なものである。ヘラミガキは、外面には認められない。全体的に炭素の吸着が不十分で、特に外面にはほとんど吸着が認められない。

**P170**

瓦器碗が1個体(61)出土している。完存する碗である。底部には断面三角形をなす高台が貼付けられているが、高台高0.25cmと小規模なものである。内面見込みには平行する、体部から口縁部にかけては連続圏線状をなすヘラミガキが認められる。外面にはヘラミガキは認められない。

**P175**

土師器の皿が1個体(62)出土している。

**P178**

土師器・瓦器・須恵器の各器種が出土している。81の瓦器皿と82の瓦器碗が柱痕内から出土している以外は、埋土内から出土している。

土師器は、11個体出土しているが、法量から小型とそれより大型の2タイプが認められる。前者は、63~71の9個体が出土している。全体を手づくねにより整形する63~65・67・69・70と、底部をヘラ起こしにより切り離す66・68の2タイプに分類できる。71に関しても、残存状況が良好でないため明確にすることは出来ないが、後者の可能性が高い。なお、これらのなかで、63については、他の小皿と胎土等の特徴を若干異にしている。後者は、72と73の2個体である。

瓦器は、皿と碗が出土している。皿は、74~81の8個体である。いずれも押圧成形により仕上げられている。いずれの個体においても、内外面ともヘラミガキは認められない。また、全体的に炭素の吸着が不十分で、歪みも顕著である。

碗は、82~92の11個体である。いずれも、押圧整形により整形されている。また、外面にヘラミガキが施されたものは認められず、炭素の吸着も全体的に不十分である。

須恵器は、碗が2個体(93・94)出土している。いずれも東播磨系の須恵器に分類されるものである。

**P197**

須恵器の碗が1個体(95)出土している。

**P210**

土師器の皿が1個体(96)出土している。他の土師器皿と比較して、口径に対して器高が高い特徴を指摘することができる。

### 3. 包含層出土の遺物

土師器・瓦器・須恵器・青磁の各器種が出土している。他に、鉄釘が出土している。

土師器は、皿・杯・甕・鍋・羽釜が出土している。皿は、整形方法から2タイプが認められる。ひとつは、回転台を利用し、底部を回転糸切りにより切り離すものである。97と98の2個体が該当する。もうひとつは、全体を手づくねにより整形するものである。99～103の5個体が該当する。

杯は、104の1個体が出土している。回転台を利用して整形されたものであるが、底部はわずしか残存しないため、回転糸切りの痕跡を確認することはできない。

甕は105の1個体である。

羽釜は5点(107・109～112)出土している。銚の位置から、107とそれ以外の2タイプに細分できる。107は、銚が口縁端部に貼付けられるもので、ヨコナダ調整により断面三角形を呈する。銚の巾2.2cmを測る。一方、109～112は、口縁部下2cmの位置に銚がヨコナダにより貼付けられている。なお、銚は、端部を薄く仕上げたもの(111)と端面を有するもの(109・110・112)とが認められる。

鍋は106と108の2個体である。106は、105より大型で、全体的に器壁が薄く仕上げられている。体部外面をナダ調整、内面をハケ調整により整形後、口縁部内外面をヨコナダ調整により仕上げられている。108は、口縁部が受口状を呈することから、鍋と判断したものである。

瓦器は、皿と椀が出土している。皿は、113～116の4点が出土している。いずれも外面を押圧成形により、内面をナダ調整により仕上げられている。いずれも、内外面ともヘラミガキによる暗文は認められない。

椀は、117と118の2個体である。117は、体部から口縁部にかけて残存し、押圧技法による整形後口縁部がヨコナダ調整により仕上げられている。他の瓦器椀と異なり、口縁部が外反傾向にあり、口径に対して器高が高い点が特徴的である。

須恵器は、119の椀1個体が出土している。ほぼ完存する個体である。

白磁は、120の碗1個体である。高台は粗い回転ナダ調整により仕上げられ、体部外面はヘラ削りにより整形されている。

鉄釘(M1)(写真図版120)は、断面方形をなす和釘で、頭部は頭巻状をなす。先端付近で屈曲し、先端を欠く。全長5.9cmを測り、断面の規模は5mm×4.5mmである。

## 第5節 小結

調査の結果、掘立柱建物跡・柱穴・溝の各遺構が明らかとなった。遺構相互に切り合い関係があるため、数時期に及ぶものである。しかし、出土土器から判断すると、大きな時期差は認められない。このため、限られた時期の遺構と考えられる。

また、調査範囲が限られているため、これらの遺構および遺構群の性格について、検討を加えることは差し控えたい。ただし、SB03は、その一部を検出したのみであるが、柱穴・建物ともに、この時期としてはかなり大型の建物である。当遺跡の性格を検討する上で、重要な遺構と考えられる。

上記の遺構の時期については、出土遺物から判断して、12世紀から13世紀にかけてのものと考えられる。

## 第4章 平成9年度の調査（遺跡調査番号 970420）

### 第1節 概要

大学敷地の東端にある駐車場跡地に計画された、神戸大学医学部附属病院第一病棟新営工事に伴う調査で、事業の工程上、平成9年度には525㎡の範囲を調査した。

現地表面から70～80cmの盛土を除去した所で乱されていない土層を検出し、遺構の精査を行った。ただし旧地表面はすでに削平されている部分が多く、調査区東端から約8m分は旧ガンセンター、北半分は旧手術棟の建物による攪乱で、遺構面の大半が失われていた。さらに建物基礎・埋設管による攪乱も数多く、遺構の残存状況は芳しくなかった。

それでも調査区の西半部は、花崗岩由来の細砂～細礫が水平堆積を重ね、しまりのよい安定した地層となっており、遺構面が残っている箇所では、中世の遺構を検出した。

一方、東半部は、深さ2.5m以上の谷状の落ち込みとなっており、ラミナの発達した細砂～中礫が埋積している。埋土のしまりは弱く、上面でも遺構は見つからなかった。この地点は大倉山の西側ふもとと近くに当たる段丘上で、山堰の流路となっていた段階があったとみられ、開析と埋没を何度も繰り返している。西半部の水平堆積に比べて、形成時期ははるかに新しいものと考えられるが、埋土に遺物が含まれておらず、遺構との前後関係は不明である。

### 第2節 遺構（図版8・9、写真図版8～13）

検出した遺構には、平安時代の溝・柱穴がある。

#### 1. 溝

SD101・102（図版8、写真図版11・12）

東西方向の溝SD101と、南北方向の溝SD102はいずれも、現状の幅2.5m、深さ50～60cmの逆台形に掘り込まれている。ただし遺構の大半は攪乱によって失われており、検出できた範囲は断続的に、SD101が約6.5m、SD102が約2.5m分のみである。

埋土からは土師器皿・羽釜、瓦器碗、須恵器小皿・碗・壺、白磁碗、瓦片などが出土した。

#### 2. 柱穴

P1（図版9、写真図版12）

SD102の東肩付近で柱穴1箇所を検出した。掘り方の直径0.45m、現状の深さ0.95mを測り、かなり規模の大きい掘立柱である。しかし周辺は攪乱が多く、東側に広がる砂層上面でも、他に柱穴などは認められておらず、遺構の性格は不明である。

遺物は出土していない。

### 第3節 遺物（図版9、写真図版82）

#### 1. 土器

##### SD101 出土土器

121は瓦器柄である。断面台形状の比較的低い高台をもつ。体部外面は指おさえの後、ナデ調整、体部内面はナデ調整の後、ミガキ調整を施す。

##### SD102 出土土器

SD102からは土師器鍋（122）・羽釜（123・124）が出土している。

**土師器 鍋（122）**は口縁部は僅かに内彎する。口縁部内面下位に横方向のハケ目調整を施す。

**羽釜（123）**は断面長方形の比較的確の広い鏝を貼り付け、内面は横方向のハケ目調整を施す。**羽釜（124）**は口縁部が若干内傾し、外面に比較的確の広い鏝を貼り付ける。外面はヨコナデ調整、内面は横方向のハケ目調整を施す。羽釜形I類に分類され、12世紀後葉～13世紀前半に比定される。

##### 包含層出土土器

包含層中からは、土師器皿（125）・羽釜（126）が出土している。

**土師器 皿（125）**はロクロ成形で、体部は短く、直線的に斜め上方に延びる。底部外面は不調整で糸切痕が残る。糖轆土師器IA類に分類され、11世紀末～12世紀前葉に比定される。

**羽釜（126）**は体部がほぼ直立し、口縁部外面に断面台形状の比較的確の狭い鏝を貼り付ける。体部外面に縦方向のハケ目調整を施すが、ナデによりほとんど消滅する。内面はヘラ削りを施す。

### 第4節 小結

2本の溝SD101とSD102はほぼ同形同大で、直角方向に掘られている。肝心のコーナー部分が攪乱で失われているものの、両者は一連の遺構になる可能性が高く、平成10年度の溝SD102・103につながって、屋敷地を方形に区画していたものであろう。

## 第5章 平成10年度の調査（遺跡調査番号980190）

### 第1節 概要

980190の調査区は神戸大学医学部附属病院内の調査の中で、3000㎡を超える最も広い面積の調査となった。第1病棟建て替えにともない、確認調査940285などの成果により、一部に遺物包含層や遺構面が残存していると判断されたため、前年度の970420の調査区に南接した範囲を設定した。970420調査区からは幅約2mの堀状の溝が続くことが想定された。

他の調査区と同様、近代以降の擾乱が著しく、擾乱の隙間で遺構を探し出すような調査となった。掘乱坑からは、371～373のタイルやG1～4のガラス瓶、W18の白色塗料の残る建築部材などの近代から県立病院創設頃のものと思われる遺物が出土している。

北端部は前年度の調査と同様、埋設管が縦横に走り、遺構の残存状態は良くなかったが、前年度検出されたSD102がさらに南へと続くことを確認できた（SD102）。但し、その一部は近世に改修あるいは再掘削されていることもわかった。

調査区の中央部は擾乱が著しく、特に西半部は病院旧手術棟の基礎工事により検出できた遺構面下約2mまで完全に破壊されていることがわかった。東半部も幾度かの掘乱により、旧地表面はほとんど残されていないが、辛うじて残された柱穴から掘立柱建物を復元することができた。

調査区の南半部では部分的な掘乱はあるものの、比較的残存状態は良く、東西端部をのぞくと多くの遺構を検出することができた。また、一部には細砂質の遺物包含層も残されていた。前年度調査区から続くSD110は一部に近世の石垣を伴う溝（SD103）が再構築されているが、調査区を南北に貫き、さらに南側の990132調査区へとつながることが判明している。さらに調査区の南端ではこの溝に直交して東へ延びる溝（SD112・113）が検出された。この調査区南半部では掘立柱建物や井戸などが検出されたが、井戸や一部の建物は近世以降のものである。

一部掘乱坑を深く掘削することにより、下層の状況を確認したが、ラミネーションの発達した細砂から中礫層であり、土壌化した面や遺物包含層は見られなかった。

### 第2節 遺構（図版10～23、写真図版14～45）

#### 1. 掘立柱建物

調査区の南半部では数棟の掘立柱建物が復元できたが、そのうちSB01・02は近世以降のものである。SB10～12は隅丸方形の柱穴掘り方を有する建物。SB13・14は小型のもので、主に円形の柱掘り方を有するものであるが、出土遺物からは明瞭な時期が判別できない。

## SB01

調査区の南西部で検出され、一部に近世の溝 SD103 の埋土上から切り込んでいることから、近世以降のものである。4×12.5mの細長い長方形の平面形をもち、柱間は整わない。柱穴は直径・深さとも50cmを超える円形のものや、長円形のものがあり、比較的大型のもので構成される。9ヶ所の柱穴には木製の礎盤(W1~9)が敷かれていた。この礎盤には貫を作り出したものもあり、柱材や梁材などの建築部材を切断し、更に半載あるいは三分割している。礎盤相互が接合できた。P24からは釘片(M9)も出土している。P7・23からは127・137の土器が出土しているが、建物の時期を示すものではない。

明治十年の地図に見られる砲兵営の「BARRACK」や明治三十年の第六回関西府県連合共進会の仮設建物などが想定される。

## SB02

同じく調査区南半部のSD110とSD111に囲まれた位置に、中世の包含層の上面で検出された。12間分の柱穴が東西方向に22mにわたって一列に並んでおり、南側にも5間分柱間を揃えて並んでいる。このため掘立柱建物としているが、全容を復元できないことから柵列などかもしれない。いずれの柱穴からも中世前半頃の土器細片は出土するものの時期を決定できる資料は見られない。近代頃の土坑に切れ、近世の溝であるSD111と平行して走ることから近世に属する時期を想定している。

## SB10

調査区南東部で検出された南北棟の掘立柱建物で、北側を攪乱し、南側をSD112に切られており、2間×6間以上の側柱建物が想定される。柱間は1.8~2.3mを測る。一辺が60cm程度の隅丸方形の柱穴掘り方をもつが、深さは最高でも30cmしか残されていない。SD112に切られているP1埋土には炭化材が残り、須恵器鉢口縁部細片(140)が出土した。SD115の埋土除去後に検出できた。

## SB11

SB10の東側で検出された南北棟掘立柱建物で、SB10と方位は一致するが、近接するため同時併存は難しい。柱間は1.8~2.0mとやや狭く、柱位置もSB10とずれる。南北を攪乱により失うが、北側は建物端が残り、南側へと続く2間×3間以上の側柱建物が想定できる。SD115に切られている。

## SB12

調査区中央東端の攪乱の中で検出された掘立柱建物で、2間×5間以上の東西棟建物である。東側と南側には半間分の庇が付き、北側と西側は攪乱で失われているが、北側には庇は付かないものと判断される。一辺70~100cmの他の掘立柱建物より大型の隅丸方形の柱穴掘り方をもつ。柱間は2.1~2.4mを測る。P15からは141の土師器が出土した。

この掘立柱建物の柱穴は他のものとは異なり、黒褐色の埋土をもつ。同様の黒褐色の埋土をもつ遺構には2003061調査区古墳時代後期の竪穴住居があり、2003172の調査でも同様の土層から7世紀頃の土器が出土している。また、920172の調査ではそれに続く律令期の土器が出土しており、近辺には7~8世紀頃の集落や官衙などの遺跡が存在することが想定できるため、このSB10~12の掘立柱建物群をその時期に属するものとも考えることも可能である。但し、黒褐色の土層は全調査区でも一部にしか分布せず、時期

を想定する根拠にはならないかもしれない。柱穴からわずかに出土した土器や、建物より後に掘られたSD115の時期から、平安時代末～鎌倉時代初頭の時期のものとするのが妥当と思われる。

### SB13

SB10と重複して検出された掘立柱建物で、当初2間×3間以上の南北棟を復元したが、その後、更に西側へ1間分広がることがわかった。直径が50cm以下の円形の柱穴掘り方をもち、柱間は南北1.8m、東西2.3mを測る。構成するP130からは142の軒丸瓦やS9の石鏡が出土した。軒丸瓦は1150年代を初見とする金剛心院のものと同紋である。

### SB14

南半部中央で検出された。東西の柱間が約2.4m、南北は2mの2間×2間の東西棟を復元したが、更に西側に1間分広がる可能性が高い。一部は一辺40cmほどの隅丸方形の掘り方をもつが、南辺・西辺は小型の円形柱穴で構成される。P127からは144～146の土師器と147の瓦器が、P128からは148の土師器と149の須恵器が出土した。また、近辺のP129からはS12の石鏡加工品が出土している。

## 2. 井戸・土坑

検出された井戸は近世以降のものである。竪掘りのもの(SE01・02、SK09)、桶上に石組みをもつもの(SE03)、方形の立て板をもつもの(SE04)がある。SE02は比較的小型で浅く、水溜状のものである。遺物は出土しなかった。

土坑には様々な時期のものが存在し、SK09のように竪掘りの井戸と思われるものも含まれる。その他の土坑の性格は不明であるが、意図的に土器などを埋設したものは見られない。

### SE01

調査区の北西部で検出された。腐材により一部埋没していたが、深さ80cmほどの皿状の土坑を掘削し、その中央に直径約1mの円形に、深さ2m掘削している。埋土には燻瓦片や炭などが含まれる。163～172の19世紀前半までの近世の遺物が出土した。

### SE03

調査区南西部で検出された。直径約4.5mの円形の土坑を約1.2m皿状に掘り下げ、そこから更に直径2m程の円形に約3m掘り下げて、小礫混じりの細砂から粘土の湧水層まで掘り抜いている。底から直径約1m、高さ約1mの、3段のタガで締めた桶を据え、その上部に内径約80cmの円形に石を積んで井側としている。石組みは概ね15段積み上げ、約1.5mの高さまで残る。石の大きさも大小があり、積み方も比較的粗雑である。遺物(173～188・S18・19)はほとんどが上層からの出土で、皿状の土坑内で礎とともに出土した。18世紀前半までの遺物である。また、石組みの井側内埋土からは写真図版123の釜が出土している。

### SE04

調査区の南西端で一部を攪乱に切られて検出された。1.55×1.2mの隅丸方形の土坑を深さ約0.5m掘

り下げ、四隅と各辺中央に板材を打ち込んで囲むものである。半分以上が攪乱土で埋没しており、湧水もないことから、近代の水溜状のものと考えられる。W17の加工木材が出土した。

#### SK01～06

SK01～06は調査区南西部で検出された東西方向の長円形の土坑群で、これらの土坑はともに近接する近代に属するSB01を構成する柱穴に類似した形態・埋上を有する。このことからいずれも近世以降に構築されたものと判断される。SK01からは189、SK03からは190の陶器が出土した。SK06からは191の須恵器が出土している。

#### SK09

調査区南半部中央で検出した。当初土坑としていたが、完掘すると、平面形が円形で、直径約1.5m、深さ約2mまで直立して掘削されており、湧水も見られることから、井戸の可能性が高い。出土した遺物は192～196の瓦器・須恵器で中世初頭まで遡る。

#### SK08・10

調査区南半部中央で中世の包含層上面で検出された。SD106を切り込んで、並んで構築されている。SK10は約1.1×1.0mの隅丸方形、深さ約0.7mの土坑である。W12の木器が出土しているが、SK08からも穿孔した板材（W11）が出土しており、電柱の支柱などを埋設したものかもしれない。近世以降のものである。

#### SK12

南半部のSD105・110に隣接して検出された約0.9×1.3mの楕円形の土坑で、深さ約0.3mを測り、一部柱穴と重複している。197～199の土器が出土した。

#### SK13

調査区の南東部で検出された。溝SD113を切って構築されており、北半部は攪乱により失われていた。一辺が4m弱の隅丸方形の土坑を深さ1mまで穿ち、内部に方形の石組みを積み上げている。200・201の土器やW14～16の桶部材などの木器が出土した。近世後半の水溜めであろう。

#### SK15

南半部中央で検出され、細い溝であるSD117を切り込んでいる。約1.7×1.1mの不整隅丸方形の平面形をもつ深さ約25cmの土坑で、202～206の土器が出土した。

#### SK23

調査区中央部の攪乱内で検出された。直径約0.6m、深さ約0.2mの皿状を呈した土坑で、207の轆羽口片が出土したが、攪乱に伴うものかもしれない。

#### SK24

調査区北半部 SD102 の東肩部に埋土上から切り込んでいる。一辺 1 m 強の方形の土坑で、W13 の木材が据えられていた。SB01 や SK10 に類似した時期のものであろう。

### 3. 溝

#### SD102

前年度の 970420 の調査区で検出された SD102 の続きであることから、同じ遺構番号を付した。北端で直径約 0.2m の丸太材を埋土の途中から掘り方を掘削して掘り込んでおり、橋脚となるものと考えられた。しかしながら埋土の上層から近世の土器片が出土したことから埋土上層を SD103 とした。SD103 は南側で検出された石垣を伴う SD105 に接続するものとする。このためこの橋脚状の柱材は同じく近世のものであろう。

下層の SD102 は更に南側の SD110 に続くものと考えられる。SD102 とその上層の SD103 からは 208~215 の土器や瓦が出土しており、212・214・215 が上層の SD103 のものである。

#### SD104

調査区南西部で検出された。他の溝とはやや方位を異にする。幅 1 m 以下、深さ 20 cm 程の規模を持ち、南向きに深くなる。SB01 に切られている。216 の青白磁合子が出土したが、溝の時期は更に新しいものと思われる。

#### SD105

970420 の調査区で検出された SD102 から続く SD102・103 の延長方向に南流する溝で、SD110 の西岸を切って掘削されている。調査区南端部ではやや東に方向を振り、SD110 と重複する。幅 1.3~1.7m、深さ約 60 cm で、西岸には二段程度の石積みの護岸をもつ。東肩部には SD110 を切り込み、SD105 に切り込まれる埋土が見られ、3 時期の溝が重複していることが窺われるが、第 2 の時期の溝としては調査できなかった。埋土はやや異なるが、北側の SD103 の可能性がある。217~232 の土器が出土しており、18 世紀前半代頃の時期が想定される。

#### SD106

調査区南半部を東西に横切る幅 30 cm 弱、深さ 10 cm 弱の小溝である。中世の包含層上面で検出され、近世の SE03 や近代の SK10 に切られている。SB02 の柱列に沿って直線的に伸びる。233 の土器が出土したが、近世に属するものであろう。

#### SD110

前述のように、SD105 に西肩部を切られており、東肩部は崩壊して不明瞭である。推定幅約 4m、深さ約 0.6m の南北方向の溝で、約 20m にわたって検出された。北側の SD102 から続く溝と考えられ、その延長距離は約 48m となる。溝内埋土から 235~263 の土器が出土した。南端部で SD111・113 が直交して東向きに派生している。また 264~269 の土器や S3 の基石は SD111 との交点の集石付近からの出土であり、石積みを伴う SD105 の影響が大きいものとする。SD113 との交点からは SD113 側から続くようにやや深

くなる。その地点からは276～284の土器が出土している。

#### SD111

SD111・112・113は調査区の南端を東西に走る溝である。SD112はSD111とSD113の間で検出され、両溝を切って構築されている。西半には一段の石列が見られるが、溝の中央部に並ぶ。幅約0.8m、深さ約0.4mの溝である。時期が決定できる遺物は出土していないが、石列を伴うことから石積み護岸をもつSD105と同じ時期のものと推測する。

#### SD112

SD112は重複する3本の溝のうち、最も北側を走るもので、約30mにわたって検出できた。幅約2m、深さ約0.4mで、溝底は西側がわずかに深くなる。この溝のためSB10が南端を失う。埋土からは270～275の土器が出土した。

#### SD113

調査区の南端を東西に走り、西側では南北方向のSD110に突き当たって終わる溝で、約45mにわたって検出できた。SD110とは概略91°の角度で交わる。上幅約2m、深さ0.6～0.8mの規模で、断面は逆台形を呈し、埋土は緩やかなレンズ状堆積を示す。溝底は西側に向かって緩やかに下る。SD110との合流部では、溝底はSD113側が深く、SD110に沿って屈曲して南流する。溝内埋土からは285～306の土器が出土している。276～284の土器やS11の滑石製品、S14の砥石はSD110との交点付近から出土している。

#### SD114～SD118

調査区南半のSD110とSD111・113に囲まれた範囲には一部に細砂質の包含層が堆積しており、それを除去すると、SD111・113に並行する溝SD114～118が検出された。いずれも浅いもので、SD110以西には及ばず、東側でも自然消滅するものが多い。

SD115は約36mにわたって検出できた。西端では幅0.5m程度であるが、東側では約1.5mまで幅を広げ、二本の溝に分岐する。深さはいずれも10～15cm程度であるが、底は西に向かって緩やかに低くなる。このSD115から南に向かって数本の小溝が走るがいずれも浅く、途中でとぎれる。畑などの耕作に伴うものかもしれない。307～314の土器が出土した。

また、SD116からは315の土器が、SD117からは316・317の土器が、SD118からは318の土器が出土している。

#### SD121

SD121はSD115から北向きに派生するもので、幅の広い落ち込み状の遺構である。319・320の土器やS16の砥石、釘M21が出土した。

#### SD125

SD125は調査区の南東部、SK13から南へ延びる溝で、幅約1.5m、深さ約35cmの規模をもつ。SK13以北では攪乱が多く、状況は不明であるが、SD112或いはSD113以北へは延びていない可能性が高い。南側

では 990132 調査区で検出された SD④に続くものであろう。並行して走る SD110 との距離は溝の心々間で約 32m を測る。321～323 の土器が出土した。

### 第3節 遺物

#### 1. 土器（図版 24～32、写真図版 83～98）

##### ピット内出土土器・瓦

ピット内からは、土師器皿（130・143・144・145・148・155・159）・鍋（128・146）・甕（141）、瓦器皿（154）・椀（129・132・133・136・138・156・157・158・160）・片口鉢（147）、須恵器皿（134）・椀（135・137・149・153）・鉢（127・140・150）・壺（151）・杯蓋（152）、無釉陶器皿（139）・鉢（162）、白磁碗（131）、青磁碗（161）、瓦（142）などが出土している。

**土師器** 皿はいずれも非ロクロ成形である。これらの皿は VB3b 類（130・143）、IVA1b 類（144・148）、VB4 類（145）、VA2 類（155）、IVA2 類（159）に分類される。所属時期は、IVA1b 類、IVA2 類が 12 世紀中葉～後葉に、VB4 類が 12 世紀後葉～13 世紀初頭に、VB3b 類、IVA2 類が 12 世紀後葉～13 世紀前半にそれぞれ比定される。

鍋（128）は口縁部が「く」の字状に屈曲して外方に大きくひらく。鉄鍋形 1 類に分類され、13 世紀前半代に比定される。鍋（146）は体部が直立し、口縁部が外方にひらく。甕形 1 類に分類され、11 世紀末～12 世紀前半代に比定される。

甕（141）は体部がほぼ直立し、口縁部上面に端面をもつタイプで、外面には縦方向、内面は横方向の粗いハケ目調整を施す。口縁部に穿孔が 1 箇所見られる。

**瓦器** 皿（154）は体部が緩やかに斜め上方に伸び、内面の調整はナデ調整の後、ヘラミガキ調整を加える。色調は灰白色を呈する。

椀には高台部の残存するもの（157・158）と高台部を欠失するもの（129・132・133・136・138・156・160）とがある。157・158 は形骸化した断面三角形状の高台を貼り付ける。和泉型瓦器椀で、14 世紀中葉に位置づけられる。高台部を欠失するものは、外面のナデ調整により、口縁部が僅かに外反するもの（136・138）と外反しないもの（129・132・133・156・160）とに分類される。

片口鉢（147）は「ハ」の字状に外方にひらく高台をもち、体部は内彎して上方に延びる。体部内面には斜め方向のハケ目調整を施す。底部内面にはミガキ調整を施し、暗文が残る。12～13 世紀前半代に位置づけられる。

**須恵器** 皿（134）は体部が直線的に外上方に伸び、内外面とも回転ナデ調整を施す。

椀には底部が残存するもの（135・149）と残存しないもの（137・153）とがある。135・149 はいずれも平高台で、高台外面は不調整である。いずれも東播系須恵器と考えられ、12 世紀後半～13 世紀前半代に比定される。

鉢（127・140）はいずれも口縁端部を上方に引き出す。東播系須恵器で 12 世紀後半～13 世紀前半代の製品であろう。鉢（150）は底部の破片で底部外面に糸切痕が残る。

151 は口縁部端部を上方に引き出すもので、壺の口縁部と考えられる。

杯蓋(152)は口縁端部を僅かに下方に引き出すもので、8世紀代の所産と考えられる。

**無釉陶器** 139は口縁部が外方にひろく皿状製品である。体部外面に指頭圧痕が残る。近世の所産と考えられる。

鉢(162)は平底で体部が直立する。火入れとして使用された可能性が高い。近世後半の備前焼と考えられる。

**白磁** 碗(131)は、高台が低く、細い。器面は著しく摩滅する。

**青磁** 碗(161)は、外面に柳描きで蓮弁文を施文する。龍泉窯系青磁と考えられる。

**瓦** 瓦(142)は複弁六葉蓮華文軒丸瓦である。弁は凸線で表現される。須恵質に焼成され、瓦当裏面に2方向のナデ調整を施す。神戸市神出窯跡群の南支群、垣内小支群(神戸市遺跡地図 第19支群)や釜ノ口小支群(同第2支群)、明石市林崎三本松窯、魚橋窯で、生産されたものや、京都尊勝寺、鳥羽離宮金剛心院(1155年建立)から出土したものと同紋である。(写真図版113)

### SE01 出土土器・土製品

SE01からは無釉陶器播鉢(163)、施釉陶器鍋(164)・盤(165)・ミニチュア皿(169)、白磁仏具碗(168)、染付磁器碗(166・167)、面子(170)、ミニチュア土製品(171・172)が出土している。

**無釉陶器** 163は、口縁部が上下に拡張して縁帯を形成する。内外面とも強い回転ナデ調整を施し、体部内面に柳描きで7条1単位の播目を施文する。堺・明石産播鉢で18世紀後半代に比定される。

**施釉陶器** 164は口縁部が玉縁状に肥厚し、内外面とも灰釉を施釉する。京焼系の土鍋で19世紀前半代に比定される。

盤(165)は、内面から体部外面に透明釉を施釉の後、一部に緑釉を流しがけする。体部外面から底部外面は露胎である。産地は特定できないが、胎土から瀬戸・美濃系陶器の可能性が考えられる。

ミニチュア皿(169)は、手づくね成形で平面形状は梅花をかたどる。緑釉を3箇所タンパン状に施釉した後、内面には透明釉を施釉する。外面は露胎である。

**白磁** 仏具碗(168)は、平底で底部外面を浅く削る。内外面とも透明釉を施釉し、灰白色に発色する。底部外面は露胎である。肥前系白磁で18世紀代に比定される。

**染付磁器** 碗(166)は内面をコンニャク印判で施文し、外面には唐草文などを描く。肥前系波佐見産のくらわんか手碗で、18世紀代の所産である。167も碗で、内外面とも草花文を描く。肥前系で18世紀代に比定される。

**土製品** 面子(170)は、無釉陶器播鉢を円形に打ち欠いて作っている。原体は堺・明石産播鉢と考えられる。釣鐘形(171)は両型作りで体部外面に凸帯が2条巡る。彩色は全て剥落している。172は手づくね成形で、上面の円内に青海波文をへら描きで施文する。泥面子の元型と考えられる。

### SE03 出土土器・土製品

SE03からは土師器皿(173・174)・杯(175)・鍋(176・177)、須恵器壺(178)・鉢(179)、無釉陶器鉢(180)、施釉陶器椀(181)・皿(182)、白磁皿(184)、青磁碗(183)、染付磁器壺(185)・碗(186)・皿(187)、面子(188)などが出土している。

**土師器** 皿(173・174)いずれも非ロクロ成形、平底で体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。いずれも、VB2a類に分類され、12世紀中葉～後半代に比定される。

杯(175)は非ロクロ成形で体部は緩やかに斜め上方に延びる。体部外面は指おさえの後、ナデ調整を施す。

鍋(176)は口縁部外面に鐙の痕跡の段が認められる。体部外面には横方向の叩き目が残し、色調は浅黄色を呈する。播磨型Ⅱ類に分類される。

鍋(177)は口縁部を、ほぼ水平に外方に折り曲げる。体部外面には縦方向のハケ目調整が、体部内面には横方向のハケ目調整がそれぞれ施される。甕形Ⅰ類に分類される。176は16世紀中葉～後半に、177は12世紀後半代にそれぞれ比定される。

須恵器 壺(178)は体部が内彎し、口縁部は「く」の字状に屈曲して外方にひらく。体部外面には平行叩き目が残る。東播系須恵器で、12世紀後半～13世紀前半代に比定される。

鉢(179)は口縁端部を斜め方向に切り、内外面とも回転ナデ調整を施す。東播系須恵器で13世紀前半代に比定される。

無釉陶器 鉢(180)は、口縁部上面に水平に端面をもつ。体部から底部外面にかけて赤土部を塗布する。備前焼あるいは堺・明石焼で、火入れとして使用された可能性が高い。

施釉陶器 碗(181)は内外面とも透明釉を施し、淡黄橙色に発色する。肥前系京焼風陶器碗で、17世紀後半～18世紀前半代に比定される。

皿(182)は内外面とも灰釉を施し、灰オリブ色に発色する。底部内面は蛇の目状に軸ハギする。高台脇以下は露胎である。肥前系唐津皿で、17世紀後半から18世紀前半の所産である。

白磁 皿(184)は底部の器壁が非常に厚く、高台は断面形状に浅く削りだす。底部内面は蛇の目状軸ハギし、高台脇以下は露胎である。肥前系波佐見産の粗製の白磁で、18世紀前半代に比定される。

青磁 碗(183)は、底部の器壁が非常に厚く、高台は幅が広く低い。龍泉窯系青磁碗で13世紀代の所産である。

染付磁器 壺(185)は外面に界線を2条施し、内面は露胎である。肥前系の油壺で18世紀代の所産と考えられる。

碗(186)は、体部外面にコンニャク印判で菊花に菱形文を施文する。肥前系波佐見産のくらわんか手碗で、18世紀前半代の製品である。

皿(187)は底部の器壁が厚く、高台は低く、浅く削りだす。肥前系初期伊万里で17世紀前半の所産と考えられる。

土製品 188は泥面子である。型作り成形で、上面に型押しで「桐」文を施文する。色調はにぶい橙色を呈する。

### SK01 出土土器

189は無釉陶器の壺である。頸部は直立し、口縁部は玉縁状に肥厚する。色調は橙色を呈する。16世紀代の備前焼と考えられる。

### SK03 出土土器

190は無釉陶器鉢である。口縁部は断面三角形を呈し、僅かに捻って片口を作り出す。色調はにぶい褐色を呈する。丹波焼の可能性が考えられる。

### SK06 出土土器

191は東播系須恵器碗である。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸みをもつ。口縁部に僅かに片口の痕跡が見られる。

### SK09 出土土器

SK09からは瓦器碗(192・193・194)、須恵器碗(195・196)が出土している。

**瓦器** 碗(192)は、断面三角形の退化した高台を貼り付ける。外面はナデ調整、内面はヨコナデ調整の後、ミガキ調整を加え、暗文が残る。

碗(193)は、断面三角形の細く低い高台を貼り付ける。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延び、口縁部は僅かに外反する。体部内面にミガキ調整を施す。和泉型瓦器碗と考えられる。碗(194)は、体部外面に擬凹線が1条巡る。指押さえの後、ナデ調整を施し、指頭圧痕が残る。

**須恵器** 碗(196)は、断面逆台形のしっかりとした高台を貼り付け、体部は直線的に斜め上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施し、底部外面はヘラ切りの後、ナデ調整を加える。

### SK12 出土土器

SK12からは、土師器鍋(197)、須恵器碗(198)、白磁碗(199)が出土している。

**土師器** 鍋(197)は、口縁部が「く」の字状に屈曲して、大きく外方にひらく。口縁部から体部内面は細かい横方向のハケ目調整を施す。鉄鏡形Ⅰ類に分類され、13世紀前半代に位置づけられる。

**須恵器** 碗(198)は体部が僅かに内彎気味に斜め上方に延び、口縁端部は丸みをもつ。東播系須恵器で12世紀後半代に比定される。

**白磁** 碗(199)は底部の器壁が非常に厚く、内面の体部と底部の界に低い段をもつ。内面全面と外面の高台脇まで透明釉を施軸し、以下は露胎である。横田・森田分類 白磁碗Ⅷ類相当で、12世紀後半代に比定される。

### SK13 出土土器

SK13からは土師器焙烙(200)、須恵器鉢(201)が出土している。

**土師器** 焙烙(200)は型作り成形で体部は内傾し、口縁部は上面に端面をもつ。底部外面には煤が附着する。近世後半の所産であろう。

**須恵器** 鉢(201)は、口縁端部を斜め方向に切る。口縁部内外面には強い回転ナデ調整を施し、内面に若干凹部をもつ。東播系須恵器で12世紀後半代に比定される。

### SK15 出土土器

SK15からは土師器皿(202~204)、瓦器碗(205・206)が出土している。

**土師器** 皿には小型(202)と中型(203・204)がある。いずれも非クロコ成形で202はやや器高が高い。202・203はVB2a類に、204はIVA1b類に分類され、いずれも12世紀中葉~後葉の時期が考えられる。

**瓦器** 碗(205)は平底で体部は内彎気味に斜め上方に延びる。体部内面にはミガキ調整を施し、色調は灰白色を呈する。碗(206)は体部が内彎気味に斜め上方に延び、口縁端部は尖り気味に取める。体部

内面には横方向および重画線ミガキを施す。色調は灰白色を呈する。

#### SK23 出土土製品

207 は輪の羽口である。外面はナデ調整を施す。器面は全体に摩滅する。

#### SD102 出土土器

SD102 からは土師器皿 (208・209)・羽釜 (210)、瓦器椀 (211)、須恵器椀 (213) などが出土している。

**土師器 皿** (208・209) は、208 が IVA2 類に、209 は VB1c 類に分類され、いずれも 12 世紀後葉～13 世紀前半代に比定される。

**羽釜** (210) は体部は若干内傾し、口縁部外面には比較的幅の広い鈔を貼り付ける。体部内面には横方向のハケ目調整を施す。外面には煤が附着し、色調はにぶい黄褐色を呈する。

**瓦器** 211 は瓦器椀である。器壁は全体に薄く、体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。体部内面にはナデ調整の後、横方向のミガキ調整を施す。

**須恵器 椀** (213) は、低い平高台を持ち、体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。底部内面に凹部をもつ。東播系須恵器椀で 12 世紀前半代に比定される。

#### SD103 出土土器

SD103 からは、瓦質土器火鉢 (212)、白磁碗 (214) 丸瓦 (215) が出土している。

**瓦質土器** 212 は火鉢である。型作り成形で外面にはミガキ調整、内面は粗いハケ目調整の後、ナデ調整を施す。近世の製品と考えられる。

**白磁** 214 は、幅が広く低い高台を浅く削りだし、底部内面に沈線が 1 条巡る。内面は透明釉を施し、外面は露胎である。横田・森田分類の白磁碗Ⅷ類に相当し、12 世紀後半～13 世紀前半代に比定される。

**瓦** 215 は丸瓦片である。外面には横方向のナデ調整が、内面は布目圧痕とコビキ痕が見られる。色調は灰白色を呈する。

#### SD104 出土土器

216 は青白磁合子である。体部は僅かに内彎気味にほぼ直上に延びる。口縁端部上面は水平に端面をもつ。体部外面にはヘラ描きの花卉文を施文し、内外面とも透明釉を施粘する。景徳鎮窯系青白磁で、13 世紀代に比定される。

#### SD105 出土土器・瓦

SD105 からは土師器皿 (217～219)、須恵器鉢 (220)、施釉陶器皿 (221)・碗 (222)・壺 (223)、白磁碗 (224)、青磁皿 (225)・碗 (226)、染付磁器碗 (227)・杯 (228)、増埴 (229)、瓦 (230～232) などが出土している。

**土師器 皿**には小型のもの (217・218) と大型のもの (219) とがある。217・218 はいずれも非ロクロ成形で、217 は VA2 類に、218 は VB1c 類に分類される。219 は口縁部外面に面取りを施す。VB3b 類に分類される。いずれも 12 世紀中葉～後葉に比定される。

**須恵器 鉢** (220) は、体部が僅かに内彎気味に斜め上方に延び、口縁端部はほぼ水平に端面をもつ。東播系須恵器で、12世紀前半代に比定される。

**施釉陶器 皿** (221) は、内外面とも灰釉を施釉するが、高台畳付き以下は露胎である。内面に砂目跡が2箇所認められる。肥前系唐津皿で17世紀前半代に比定される。

**碗** (222) は、内外面とも鉄釉施釉の後、白濁釉で施文するが、焼成不良のため、全体では灰白色に発色する。肥前系の現川焼で17世紀後半～18世紀前半代に比定される。

**壺** (223) は平底で底部の器壁は厚い。内面に灰釉を施釉し、外面は露胎である。底部外面には糸切痕が残る。近世の所産と考えられるが、産地などは不明である。

**白磁 碗** (224) は底部の器壁が非常に厚い。内外面とも透明釉を施釉し、明緑灰色に発色する。外面の体部下半以下は露胎である。肥前系の粗製の白磁碗で18世紀前半代に比定される。

**青磁 皿** (225) は、内外面とも青磁釉を施釉し、明緑灰色に発色する。底部内面の釉は蛇の目状に釉ハギし、鉄釉を施釉する。肥前系青磁皿で18世紀前半代に比定される。

**碗** (226) は体部が僅かに内彎し、口縁部は玉縁状に肥厚する。内外面とも青磁釉を施釉し、明オリーブ灰色に発色する。龍泉窯系青磁碗で13世紀代の所産であろう。

**染付磁器 碗** (227) は底部の器壁が厚く、高台は比較的細く低い。外面はコンニャク印判で崩れた草花文を描く。肥前系波佐見産のくらわんか手碗で、18世紀前半代の所産であろう。

**杯** (228) は高台の幅が広く比較的高い。高台裏は巾状に削り残す。口縁部は外方にひらく。外面には草花文を施文し、高台畳付から高台裏にかけては露胎である。肥前系のいわゆる初期伊万里で17世紀前半代に比定される。

**埴埴** 229 は形状が半球形で、器壁は非常に厚い。外面には格子状の粗い叩き目が残る、色調は外面が橙色、内面は黒色を呈する。埴埴と考えられる。

**瓦** 230 は瓦当面は剥落するが、軒平瓦である。内外面ともナデ調整を施し、灰白色を呈する。平瓦との接合は包み込み技法による。231・232は平瓦である。いずれも内外面ともナデ調整を施す。231には外面に格子状の叩き目が残る。色調は灰白色を呈する。

## SD106 出土土器

233は須恵器壺である。高台は「ハ」の字状に外方にひらき、底部の器壁は比較的厚い。体部は内彎して斜め上方に延びる。外面にはヘラケズリ調整が見られる。色調は灰白色を呈し、焼成は堅緻である。

## SD108 出土土製品

234は土錘である。平面形状は紡錘形を呈し、棒状のものに粘土を巻きつけて成形する。外面にナデ調整を施し、色調はにぶい黄橙色を呈する。

## SD110 出土土器

SD110からは土師器皿(235～243)・甕(244)・羽釜(245)・瓦器碗(246～248)・皿(249・250)、須恵器皿(251)・鉢(252・253)、無釉陶器摺鉢(254・255)、施釉陶器鉢(256)・碗(257)、白磁碗(258)、瓦(259～263)などがある。

**土師器 皿** (235～243) はいずれも非ロクロ成形で、II B2類(235)、V B2a類(236)、V B3b類(237)、

VB1b 類 (238)、VB3b 類 (237・239)、VA2 類 (240)、VB1c 類 (241)、VA1 類 (242)、VB4 類 (243) に分類される。

所属時期は II B2 類、VB2a 類、VB3b 類、VB1c 類が 12 世紀後葉～13 世紀前半に、VB1b 類、VA2 類が 12 世紀中葉～後葉に、VA1 類が 12 世紀前半代に、VB4 類が 12 世紀後葉～13 世紀初頭にそれぞれ比定される。

甕 (244) は体部が大きく内彎する。頸部は直立し、口縁部は外方にひらく。頸部外面には斜め方向の、体部外面には横方向の叩き目がそれぞれ残る。色調は褐灰色を呈する。須恵器甕の生焼けの可能性も考えられる。

羽釜 (245) は体部外面に断面台形状の厚く、比較的幅の狭い罫を貼り付ける。口縁部外面には凹線が 1 条巡る。口縁部から体部内面にかけて横方向のハケ目調整を施す。

瓦器 246～248 は碗である。246 は体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。体部内面には横方向のヘラミガキ調整を加え、色調は暗灰色を呈する。247 は断面三角形状の低い高台をもち、体部は内彎気味に斜め上方に延びる。内面にはヘラミガキ調整を施す。色調は灰色を呈する。248 は断面半円形の退化した低い高台を貼り付ける。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。体部内面には多方向のミガキ調整を加え、色調は暗灰色を呈する。

249・250 は皿である。249 は丸底気味の平底で、体部と底部の界は不明瞭で、体部は緩やかに斜め上方に延びる。体部内面にはミガキ調整が見られる。色調は灰色を呈する。250 は平底で底部の器壁は厚く、体部は非常に短い。底部内面にはヘラミガキが見られる。色調は灰色を呈する。

須恵器 皿 (251) は内外面とも回転ナデ調整を施し、底部外面には糸切痕が残る。色調は灰色を呈する。

鉢 (252) は口縁部の上面に水平に端面をもち、口縁部を捻って片口を作り出す。内外面とも回転ナデ調整を施す。口縁部外面には灰被りが見られ、重ね焼痕が認められる。東播系須恵器で 12 世紀後半代の所産である。同じく鉢 (253) は低い平高台をもち、体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施し、高台側面と底部外面は不調整で糸切痕が残る。色調は灰白色を呈する。東播系須恵器で、12 世紀代の所産であろう。

無釉陶器 播鉢 (254) は、口縁部を斜め方向に切り、下端部は僅かにつまみ出す。体部内面に櫛描きで 7 条 1 単位の播り目を施文する。鉢 (255) は、口縁部の上面に端面をもち、斜め方向に切る。内外面とも回転ナデ調整を施し、内面に播り目は見られない。254・255 とも備前焼 III 期相当で、14 世紀代に比定される。

施釉陶器 鉢 (256) は、平底で体部は直線的に斜め上方に延びる。体部内面にヘラ描きで施文し、内外面とも緑釉を施釉する。内面の釉はほとんど剥落している。華南産の緑釉陶器の可能性が考えられる。

碗 (257) は高台の幅が広く比較的高い。高台裏をト巾状に削り残す。内外面とも灰釉を施釉し、高台畳付の釉はかきとる。肥前系唐津碗の可能性が高い。

白磁 碗 (258) は、口縁部が玉縁状に肥厚する。内外面とも透明釉を施釉し、灰白色に発色する。横田・森田分類白磁碗 IV 類相当で、12 世紀後半代に比定される。

瓦 瓦には唐草文軒平瓦 (259)、平瓦 (260・261)、丸瓦 (262・263) がある。261 には穿孔が 1 箇所見られ、261 は外面に格子目叩き、内面に布目尻痕が残る。また、262 は内外面とも自然釉が掛かる。263 は外面に削り及びナデ調整を、内面には布目尻痕が残る。

### SD110・111 交点集石出土土器

SD110・111 交点集石からは瓦器碗(264・265)、須恵器壺(266)、無釉陶器播鉢(267)、白磁碗(268・269)が出土している。

**瓦器 碗(264)**は断面三角形の形骸化した高台を貼り付ける。体部内面にはヘラミガキ調整を加え、色調は灰色を呈する。碗(265)は断面がひしゃげた半円形を呈する高台を貼り付ける。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部内外面には強いヨコナデ調整を加える。色調は灰白色を呈する。

**須恵器 壺(266)**は平底で体部は直線的に斜め上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施し、底部外面は不調整で糸切痕が残る。東播系須恵器である。

**無釉陶器 播鉢(267)**は、口縁部が上下に拡張して縁帯を形成する。体部内面には柳描きで7条1單位の櫛目を施文する。色調は暗赤褐色を呈する。備前焼IV期相当で、15世紀代に比定される。

**白磁 碗(268)**は、口縁部が玉縁状に肥厚する。内外面とも透明釉を施釉し、灰白色に発色し、外面の体部下半以下は露胎である。碗(269)は幅の広い低い高台を浅く削りだす。外面はヘラ削り後、ナデ調整を加え、高台脇にヘラ削りの際の圧痕が残る。内面は透明釉を施釉し、灰白色に発色する。268・269とも横田・森田分類白磁碗IV類相当で、12世紀後半～13世紀前半代に比定される。

### SD111 出土土器

SD111 からは土師器皿(270)、須恵器鉢(271・272)、無釉陶器甕(273)、瓦(274・275)が出土している。

**土師器 皿(270)**は非ロクロ成形で、やや上げ底気味の平底である。体部は短く、僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。内外面ともヨコナデ調整を加える。

**須恵器 鉢(271)**は体部は直線的に斜め上方に延び、口縁端部は上方につまみ上げる。体部内面にヘラ描きで櫛目状の施文が見られる。鉢(272)は平底で、体部は直線的に斜め上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施し、底部外面は不調整で糸切痕が残る。いずれも東播系須恵器と考えられる。

**無釉陶器 甕(273)**は口縁部は大きく外方にひらく。体部外面はヘラ削りの後、ナデ調整を施す。口縁部内面には胡麻状に灰被りが見られ、体部外面には自然釉がビードロ状に附着する。丹波焼で13世紀前半代の製品の可能性が考えられる。

**瓦 274・275**は唐草文軒平瓦である。

### SD110・113 交点出土土器

SD110・113の交点からは土師器皿(276～282)、須恵器鉢(283)、瓦器碗(284)が出土している。

**土師器 皿**はいずれも非ロクロ成形である。小型のもの(276～278)と大型のもの(279～282)とがある。これらはVB1c類(276・278)、VB2a類(277)、VB3a類(280)、VB3b類(279・281・282)に分類される。VB1c類・VB3b類は12世紀後半～13世紀前半に、VB2a類、VB3a類は12世紀中葉～後半にそれぞれ比定される。

**須恵器 鉢(283)**は平底で体部は直線的に斜め上方に延び、口縁端部は上方につまみ上げる。底部外面は回転ヘラ切りの後、ナデ調整を施す。色調は灰色を呈する。東播系須恵器鉢と考えられる。

**瓦器 碗(284)**は、断面逆台形の退化した高台を貼り付け、体部は内彎気味に斜め上方に延びる。体部から底部にかけてはミガキ調整を施し、それぞれ重圏線暗文と平行暗文が残る。

## SD113 出土土器

SD113 からは土師器皿 (285・294)・鍋 (295・297)、瓦器椀 (298・300)、須恵器鉢 (301)、無釉陶器甕 (302・303)、施釉陶器皿 (304)、白磁壺 (305)、青白磁合子 (306) などが出土している。

**土師器 皿** (285・294) いずれも非ロクロ成形である。それらはVA2類 (285)、VB1b類 (287)、VB1c類 (288)、VB3b類 (286・289・290)、VIB類 (291)、IVA2類 (292)、IVB1類 (293)、VB3b類 (294) に分類される。また、それぞれの所属時期はVA2類、VB1b類、IVB1類が12世紀中葉～後葉に、VB1c類、VB3b類、VIB類、IVA2類は12世紀後葉～13世紀前半にそれぞれ比定される。

**鍋** (295) は、口縁部が大きく「く」の字状に屈曲して外方にひらく。鉄鍋型I類に分類され、13世紀前半代の所産であろう。**鍋** (296) は同様に、口縁部は「く」の字状に屈曲し、外方にひらく。甕形II類に分類され、12世紀後半代に比定される。**鍋** (297) は口縁部外面に断面三角形の退化した鏝を貼り付けるもので、播磨型I類に分類され、15世紀後半～16世紀初頭に位置づけられる。

**瓦器 椀** (298) は断面台形状の比較的しっかりとした高台を貼り付ける。体部内面には連続線状暗文が残る。**椀** (299) は断面三角形の退化した高台を貼り付ける。高台の平面形状は楕円形を呈する。体部内面には横方向の、底部内面には縦方向のヘラミガキ調整をそれぞれ施す。**椀** (300) は高台がほとんど消滅して、僅かに形骸化した高台状の粘土紐を貼り付ける。体部内面にはミガキ調整を加え、色調は黒色を呈する。

**須恵器 鉢** (301) は、体部は直線的に斜め上方に延び、口縁端部は斜め方向に切る。東播系須恵器で12世紀前半代に比定される。

**無釉陶器 甕** (302) は、体部が内彎し、外面はスタンプで施文し、自然釉がかかる。常滑焼で13世紀代に比定される。303も302同様、常滑焼甕の胴部片である。

**施釉陶器 皿** (304) は、口縁部を輪花状に成形し、体部内面にヘラで菊花文を施文する。体部外面には線描きで花文を施文し、内外面とも灰釉を施釉する。瀬戸・美濃系灰釉陶器皿で、16世紀代に比定される。

**白磁** 305は白磁壺の底部である。底部の器壁は非常に厚く、高台は幅が広く比較的高い。華南産白磁四耳壺の底部と考えられ、13世紀代に比定される。

**青白磁** 306は青白磁合子である。平底で体部は内彎してほぼ直上に延びる。口縁部のかえりは短く直立する。体部外面に型押しで花弁文を施文する。内外面とも透明釉を施釉し、口縁部内面及び外面の体部下以下は露胎である。華南産の青白磁合子で13世紀代の所産と考えられる。

## SD115 出土土器

SD115からは土師器皿 (307・308)、瓦器椀 (309・310)、須恵器皿 (311)・椀 (312)・鉢 (313・314) が出土している。

**土師器 皿** (307) は非ロクロ成形で体部は短く内傾するいわゆるコースター形土師器である。II B1類に分類され、12世紀後葉～13世紀初頭に位置づけられる。皿 (308) はロクロ成形で、内外面とも回転ナゲ調整を施し、底部外面は不調整で糸切痕が残る。II類に分類され、12世紀後半～13世紀前半代に比定される。

**瓦器 椀** (309) は断面台形状の低い高台を貼り付け、口縁部は僅かに外反する。体部内面にはヘラミガキ調整を加える。和泉型瓦器椀である。椀 (310) は断面台形状の低い高台を貼り付ける。底部内面は

ナデ調整の後、ミガキ調整を加える。

**須恵器 皿 (311)** は、平底で体部は直線的に斜め上方に延びる。底部外面には糸切痕が残る。東播系須恵器で、12世紀後半代の所産である。

**椀 (312)** は体部が直線的に斜め上方に延び、内外面とも回転ナデ調整を施す。

**鉢 (313)** は体部が直線的に斜め上方に延び、口縁部は斜め方向に切る。東播系須恵器鉢で12世紀後半代に比定される。**鉢 (314)** は内面に粘土紐の継ぎ目痕が明瞭に観察される。色調は灰色を呈し、口縁部外面に重ね焼痕が見られる。東播系須恵器で12世紀後半～13世紀前半代に比定される。

#### SD116 出土土器

315は土師器皿である。非ロクロ成形、平底で体部と底部の界は不明瞭である。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。VB2a類に分類され、12世紀中葉～後葉に比定される。

#### SD117 出土土器

SD117からは土師器皿(316)、瓦器椀(317)が出土している。

**土師器 皿 (316)** は非ロクロ成形、平底で、体部は直線的にほぼ直上に延びる。IVA2類に分類され、12世紀後葉～13世紀前半代に比定される。

**瓦器 椀 (317)** は高台がほとんど形骸化し、僅かに高台状の粘土紐を貼り付ける。体部内面にはヘラミガキ調整を施す。和泉型瓦器椀と考えられる。

#### SD118 出土土器

318は土師器羽釜である。口縁部は内傾し、端部は丸みをもつ。羽釜形Ⅱ類に分類され、13世紀後半代に比定される。

#### SD121 出土土器

SD121からは土師器皿(319)と須恵器椀(320)が出土している。

**土師器 皿 (319)** は非ロクロ成形で、器壁は全体に厚い。IVA2類に分類され、12世紀後半～13世紀前半代に比定される。

**須恵器 椀 (320)** は体部が直線的に斜め上方に延びる。口縁部は僅かに外方にひらく。内外面とも回転ナデ調整を施し、色調は灰白色を呈する。

#### SD125 出土土器

SD125からは土師器皿(321)、瓦器椀(322)、須恵器鉢(323)が出土している。

**土師器 皿 (321)** は非ロクロ成形、平底で、体部は短く、僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。VB1c類に分類され、12世紀後葉～13世紀前半代に比定される。

**瓦器 椀 (322)** は高台が欠失するが、貼り付け痕が認められる。体部内面にはヘラミガキ調整を施す。炭素はほとんど吸着せず、色調は灰白色を呈する。

**須恵器 鉢 (323)** は体部が直線的に斜め上方に延び、口縁端部を上方につまみ上げる。内外面とも回転ナデ調整を施し、底部外面は不調整で、ヘラ切り痕が残る。口縁部外面に重ね焼痕が残る。東播系須恵

器で、12世紀後半～13世紀前半代に比定される。

#### 包含層中出土土器・土製品・瓦他

包含層中からは、土師器皿(324～332)・椀(333)・鍋(334～338)、瓦器皿(339～342)・椀(343～351)、瓦質土器羽釜(352)・火鉢(353)、須恵器皿(354)・杯(355)・椀(356～358)・鉢(359・360)・壺(361)、白磁碗(362～363・365～367)・皿(364)、青磁皿(368・369)などの土器・陶磁器類の他、土鍾(370)、タイル(371～373)、瓦(374・375)、ガラス瓶(G1～G4)などが出土している。

**土師器** 皿には小型のもの(324～328)と大型のもの(329～332)とがある。これらの皿はVB1c類(324・325・326・332)、IVB2類(327)、VB3b類(328・330)、VB2a類(329)、VA2類(331)に分類される。VB1c類・VB3b類は12世紀後葉～13世紀前半代に、IVB2類は12世紀後葉～13世紀初頭に、VB2a類・VA2類は12世紀中葉～後葉にそれぞれ比定される。

椀(333)は断面三角形の退化した高台を貼り付け、体部は内彎気味に斜め上方に延びる。器面の摩滅が著しく、調整の詳細は不明であるが、内外面ともナデ調整を施す。色調は明褐色を呈する。あるいは瓦器椀の焼け損じの可能性も考えられる。

鍋(334～338)はその形態から、体部がほぼ直立し、内外面にハケ目調整を施すもの(334・335)、口縁部が「く」の字状に屈曲して大きく外方にひろくもの(336・337)、口縁部外面に断面三角形の退化した鐙を貼り付けるもの(338)に大きく分けられる。336は鉄鍋形I類に、337は壺形II類に、338は播磨型I類にそれぞれ分類される。所屬時期は336が13世紀前半に、337が12世紀後半に、338は15世紀後半～16世紀初頭にそれぞれ比定される。

**瓦器** 皿(339～342)は、体部が短く直線的に斜め上方に延びるもの(339・341・342)と体部が僅かに内彎気味に斜め上方に延びるもの(340)とに分けられる。内面の調整は、いずれも、2方向もしくは不定方向のナデ調整の後、ヘラミガキ調整を施す。

椀(343～351)には高台部から口縁部までが残存するもの(343～345)と高台部を欠失するもの(346～351)とがある。高台部が残存するものは、断面半円形状の比較的低い高台を貼り付けるもの(343)、断面台形状の低い高台を貼り付けるもの(344)、断面三角形の退化の著しい高台を貼り付けるもの(345)に分類される。これらはいずれも和泉型瓦器椀と考えられ、343は13世紀中葉に、344は12世紀中頃～後半代に、345は14世紀代にそれぞれ比定される。高台部を欠失するものは、口縁部の特徴から、口縁部の内面に沈線を1条巡らせるもの(348)と巡らせないもの(346～347・349～351)とに大きく分けられる。348は椀型瓦器椀で12世紀中頃に比定される。

**瓦質土器** 羽釜(352)は体部が内彎気味にほぼ直上に延び、口縁部外面に断面台形状の鐙を貼り付ける。指おさえの後、ナデ調整を施し、体部外面には指頭圧痕が残る。

353は火鉢の遊環部分である。型作り成形で獣面を象っている。2箇所に見られる。色調は暗灰色を呈し、近世の所産と考えられる。

**須恵器** 皿(354)は平底で体部が短く、直線的に斜め上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施し、底部外面は不調整で、糸切痕が残る。東播系須恵器皿で13世紀前半代に比定される。

杯(355)は、僅かに外方にひろく高台を貼り付ける。内外面とも回転ナデ調整を施す。底部外面は不調整で糸切痕が残る。色調は暗オリーブ灰色を呈する。8世紀代の所産であろう。

椀(356・357・358)は平底で体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整

を施し、底部外面は不調整で糸切痕が残る。色調は灰白色を呈する。東播系須恵器で13世紀代に比定される。

鉢(359)は体部は僅かに内彎し、口縁端部を若干外方に引き出す。内外面とも回転ナデ調整を施し、底部外面は不調整で糸切痕が残る。鉢(360)は体部が直線的に斜め上方に延び、口縁端部は上面にほぼ水平に端面をもつ。内外面とも回転ナデ調整を施す。いずれも東播系須恵器で12世紀前半代に比定される。

壺(361)は体部外面に凸帯2条と縦耳を貼り付ける。内外面とも回転ナデ調整を施す。双耳壺で11世紀代の所産と考えられる。

白磁 碗(362)は底部の器壁は非常に厚い。高台は浅く削りだす。体部は内彎気味に斜め上方に延び、口縁部は細長い楕円形状に肥厚する。底部内面に沈線が1条廻る。横田・森田分類白磁碗Ⅳ類で、12世紀後半代に比定される。363・365も同様にⅣ類の白磁碗と考えられる。碗(366)は、口縁端部を水平に外方に引き出す。横田・森田分類白磁碗Ⅴ類で、12世紀後半～13世紀前半代に比定される。

碗(367)は口縁部を小さい玉縁状に肥厚する。内外面とも透明釉を施し、淡黄色に発色する。横田・森田分類白磁碗Ⅱ類で12世紀前半代に比定される。

青磁 皿(368)は体部が僅かに外反する。龍泉窯系青磁と考えられる。(369)は平底で、体部は下位で屈曲して緩やかに斜め上方に延びる。底部内面に櫛描きで施文する。同安窯系青磁皿で、12世紀後半～13世紀前半代に比定される。

土製品 上鉢(370)は、一方の端部が欠失し、外面はヨコナデ調整を施す。色調はにがい橙色を呈する。

タイル 371～373は型作り成形の乾式タイルである。上面には酸化コバルトで、象・唐草文・蓮弁文などをプリントする。漆喰で固定されており、大正期以降の製品と考えられる。

瓦 瓦には平瓦(374)と軒丸瓦(375)とがある。いずれも畑片である。

ガラス製品 瓶(G1)は、底部の平面形状が円形で、頸部に蓋用のネジ溝を刻む。型作り成形で、2分割して作成したものを中央部で貼り合わせる。体部正面に「兵庫縣立神戸病院」の銘が見られる。色調はやや濃い緑色を呈し、薬瓶と考えられる。瓶(G2)も瓶(G1)と同様の形態であるが、色調は暗褐色を呈する。瓶(G3)は底部の平面形状が楕円形で、体部は直立、頸部は短く直立する。型作り成形で、2分割して作成したものを中央部で貼り合わせる。左側面に目盛りがある。色調は透明である。水菓の容器と考えられる。瓶(G4)は底部の平面形状が円形で、体部はほぼ直立し、体部上半から口縁部に向かっては内傾する。口縁端部は玉縁状に肥厚する。外面全体に格子目状に凸帯が廻る。正面に「サクラヤ 滋養珈琲」の銘が見られる。

## 2. 石器・石製品(図版32・33、写真図版116～118)

S1はSD110上層から出土した。サマカイト製両面加工石器である。板状剥離の剥片の周辺部のみに調整剥離を加えたもの。上端に新欠が多く、本来の形状は不明だが、槍先状となる可能性は低い。用いられたサマカイトは、肉眼観察からは讃岐産と判断される。長さ62.8mm、幅46.6mm、厚さ10.8mm、重量37.6g。

S2もSD110上層から出土した。サマカイト製の扁平な礫の離れた2ヶ所から各1枚の自然面付き剥片

を剥離するのみで、石器原石として搬入されたものの、有効な利用はされていない。淡路産のサヌカイトであろう。長さ73.0mm、幅86.8mm、厚さ37.5mm、重量276g。

S3～6は基石である。

S3はSD110とSD111の交点底の土坑から出土した。白色の石英質の円礫を用いている。直径1.7～2.0cm、厚さ1.32cm、重量5.9g。

S4はSD110上面から出土した。白色のやや歪な石英質の円礫を用いている。直径2.12～2.35cm、厚さ1.12cm、重量7.8gを測る。

S5はSD105から出土した。暗灰色の石英質の円礫を用いている。重量2.5gと小さい。

S6は重機掘削時に採集されたもので、厚さ1.0cm、直径2.0～2.6cmの黒色を呈した扁平な円礫で、表面には擦痕が残る。

この他、写真図版118のS34はおそらく貝製の白石である。近代以降のものである。

S7～13は滑石製品である。石鍋および石鍋を再加工したものである。

S7はSD105の南端部で、石垣の下部を検出中に出土した。灰黄褐色の石質の滑石製石鍋で、口縁部の一部が残る。直線的に広がる口縁部の端部下端を拡張して、外面に1条の凹線を巡らせて罅状に作る。罅部の上下の外面には、幅0.3cmの細い鑿痕が縦に走り、凹線と沈線状の切り込みによって削り出された罅の表面にも縦方向の鑿痕が残される。内面は研磨によるものが平滑である。全体の1/9の破片であるが、口径21.1cmを復元した。表側には煤が付着する。木戸分類Ⅲ-c類。

S8は同じくSD105の南端部の底から出土した。灰色の石質をもつ石鍋の口縁部で、1/9の破片で口径22.0cmを復元した。厚めの口縁部直下に幅広い断面台形の罅をもつ。体部は口縁部より薄い。外面の罅の下は、縦方向に幅1cm弱の鑿の痕跡が残り、口縁部内面は横方向に削っている。外面には煤が付着する。木戸分類Ⅲ-b類。

S9はSB13を構成するP130から出土した。灰色の石質をもつ石鍋の口縁部で、1/4の破片で口径22.7cmを復元した。口縁部直下に断面台形で尖り気味の罅をもつ。口縁部は直立気味である。外面の罅の上下には、縦方向に幅0.5cm程の鑿の痕跡が残り、罅の下側にはその後横方向の削りを施す。内面は平滑である。外面には煤が付着する。木戸分類Ⅲ-a類。

S10は近世の井戸SE03埋土から出土した。灰色の石質をもつ石鍋の底部小片である。外面には、縦方向に幅0.3cm以上の鑿の痕跡が3段に残り、立ち上がり内面は横方向に削っている。底部内面は削った後、研磨している。

S11はSD110と113の交点から276～283の土器とともに出土した。灰白色の石質をもつ石鍋の破片で、成形痕や煤の状況から縦方向の大きな罅をもつものと判断した。厚めの体部から内湾して立ち上がり、内側にやや拡張する口縁部をもつ。外面には縦方向の幅0.5cm程の鑿の痕跡が5段にわたって残る。口縁部から縦方向に作り出される罅は大きく欠損するが、高さ1.5cm、幅は2cmに及ぶ。罅の側面は縦方向、上面は横方向の鑿痕が残る。破片の周囲は刀子様の工具で大小に抉られており、別製品に加工しようとしている。内面は平滑である。外面には煤が付着する。木戸分類Ⅱ-a-1類。

S12はP129から157の瓦器柄とともに出土した。灰色の石質をもつ石鍋の口縁部を加工している。復元すると口径20.0cmほどの石鍋になる。石鍋の口縁部から13.0×6.7cm程の長方形の湾曲した板を切り

出し、口縁部直下の鏝を刀子様の工具で粗く削り落とす。外面の鏝のあった下部には、石鏝製作時の縦方向の鏝の痕跡が4段ほど残る。内面は内側へ向かって幅1cm以上の幅の広い鑿状工具で緩やかにくぼみを作っており、くぼみ部分はやや黒くなっている。いったん硯として再加工したものかもしれない。更に短辺に沿った位置に直径0.8cmの円孔を穿って温石としている。

S13は調査区南半中央部の人力掘削時に出土した。滑石を板状に加工したもので、石鏝を再加工したものはわからない。3辺が残っており、幅7.58cm、厚さ1.2cmを測る。表面には細かい擦痕と縦横斜めの細い直線上の刻みが交錯している。裏面には縦方向の細く長い工具痕の後、横方向の擦痕が施される。短辺から内側に入った部分がわずかにくぼみ、黒くなっている。硯として用いたものであろうか。

この他、SD115から石鏝の破片が出土している。(写真図版116、S31)

S14～19は砥石である。

S14はSD110と113の交点から出土した。砂岩質の扁平な自然石を用いている。表裏面ともよく摩耗しており、器表面の突出した部分の摩耗が著しいことから、台石ではなく砥石とした。

S15はSD111から出土した。粒子の粗い砂岩を用いており、表裏面、一側面を使用している。

S16はSD121から出土した小型の砥石である。凝灰岩質砂岩であろうか。一短辺を失うが、他の表裏面、側辺の4面は使用しており、使用面は緩やかに湾曲している。木口面には切断した痕跡が残る。中砥であろう。

S17は近世の井戸SE01から出土した。一短辺を失い、木口面には挽いたような切断の痕跡が残る。大きく挟れこんだ表面の一部と、側面の一部に擦痕が残されている。下面は粗面である。粘板岩系の石材を使っており、仕上砥である。

S18・19は近世の井戸SE03上層のくぼみから多くの礫に混じって出土した。ともに大理石のような緻密な石材を用いた仕上砥であり、両短辺を欠く。表裏2面のみ使用しており、側面は割面のままである。S19の一側面の端部分のみ若干使用された痕跡が見られ、その横には斜め方向の成形痕が見られる。

S20はSD105から出土した。青っぽい緑色片岩の棒状を呈したもので、周辺に縄紋時代の遺跡があることから石棒の可能性を考えて掲載した。一側面に挟れが見られる。遺跡からはこのほかにも緑色片岩が出土しているが、(写真図版118)様々な色調のものが見られ、近代の建築資材も含まれている。

### 3. 金属製品 (図版34、写真図版120)

M2は北宋の皇宋通寶(真書か、初鑄年1038年)で、裏面は無紋である。

M3は寛永通寶の無背銭(初鑄年1636年)で、新寛永である。表面には緑青とともに鉄錆が現れている。

M4は、桶の底板W10や釘M6が出土したP65から出土した。直径2.5mmの銅線を内径約1.5cmの環状に曲げている。当初、耳環と考えたが、近世の以降からの出土であることから、別の用途をもつ銅環である。

M5は上面遺構のP21から出土した。6.0×5.5mmの断面方形の鉄棒の一端を叩きのぼして環状にする。多端は横方向に曲がって失われている。

M6はP65から出土した長さ約3.7cmの小型の角釘である。頭部は叩き伸ばして折り曲げている。

M7・8はP64出土の角釘である。ともに小型のものであるが、M8は折れ曲がるが、長さ3.5cmで、太さも2mmと小さい。

M9はSB01を構成するP24から出土した角釘である。

M10はSK18から出土した角釘で、大きく折れ曲がる。

M11～13はSD110・111の交点から出土した角釘である。M12は集石、他はその下の土坑からの出土で、12世紀～16世紀までの遺物が出土している。M13は長さ6.45cmの中型のものである。

M14はSD110の上層から20cm下で出土した。上端を欠くが、大型のものである。

M15・16はSD102上面から出土した。M15は南端部の掘削中に出土したM18と同様板状を呈したもので、頭部を屈曲させている。楔であろうか。

M17はSD104から出土した。

M19は南半中央の中世包含層から須恵器鉢片に付着して出土したもので、数少ない中世にまで遡る可能性があるものである。長さ5.3cm。

M20は南端の溝検出中に出土した。一端を失うが、一端は細く直角に曲がり、先端は尖る。鏝であろうか。

M21は南半中央のSD121から319・320の土器と出土した。複元長約7.2cmの角釘と思われるが、先端部・頭部とも平らに打ち伸ばし、頭部の屈曲も緩い。

#### 4. 木製品 (図版 35～39、写真図版 122・123)

出土した木製品はすべて近世以降のもので、W14～16・19が18世紀頃である以外は近代のものと思われる。

W1～9はSB01を構成する柱穴底に据えられて出土した礎盤である。

W1はP25から、W2はP26から出土した。厚さ3cm弱の方形の板材で、芯材を用いている。表面は節を丁寧に落とし、斜め方向の鉋様の工具で平滑に仕上げ、一部の角には面取りを施している。年輪界の粗いスギなどの針葉樹である。

W3はP4から、W4はP27から出土した。斜めの枿を作り出した角材の下部を切り落とし、縦に三分割して板材としている。枿の作りだしや下面の切り落とし部には鋸の痕跡が認められる。一方の側面には1cm弱の深さの釘穴が見られる。W3では柱材の表面が残り、斜め方向の鉋様の工具で平滑に仕上げ、角は面取りを施している。W4は三分割の中心部分で芯持ち材である。側面には直線的な手斧様の工具の痕跡が斜めに残される。両者は接合でき、割れ面は調整していない。年輪界は比較的密で、ヒノキのような芳香が残る針葉樹である。

W5はP3から、W6はP7から出土した。対面する四方向の表面を手斧あるいは斜めの鉋様の工具で面取りするが、全周には及ばず角材とはならない柱材で、斜めの枿を作り出す。下部を鋸で切り落とし、節の部分は更に削っている。枿に沿って縦に半裁している。枿は鋸で切り出し、節はやや湾曲した小さな刃物で削っている。W5の表面には直交方向に直線的な傷跡が見られ、その断面がM字形を呈すことから鋸の痕跡と考えられる。割れ面には直交方向の刃物の当たりが見られ、作業台として使われた可能性がある。両者は接合できる。年輪界の粗い針葉樹である。

W7はP24から、W8はP23から出土した。前述のW5・6と同様の樹種と形状、表面加工をもつ柱材

であるが、柄は斜めではなく水平に作られ、一端は外周の約2cm内側まで切り落としている。柄は両側面から鋸で切れ込みを入れ、上から割って作り出している。角には一部面取りを施す。柄に直交して縦に半裁しており、割れ面には直交方向の刃物の当たりが見られる。

W9はP68から出土した。W5～8と同様の形状、加工が施され、縦に半裁されているが、鋸で切り落とした反対側木口を大きく斜めに手斧様工具で落としている。

W10はP65から出土した桶の武板である。直径38cm強の半円形を呈した板材で、直線部分の側面に2ヶ所、直径4mmと4×25mmの目釘孔をもつ。針葉樹の芯に近い部分の板目材を用いている。

W11はSK08から出土した。幅約15.9cm、厚さ約6.5cmの板目材で、一端を欠く。一端から約13.5cmの位置に直径約2.1cmの円孔がおそらく回転により穿たれている。

W12はSK10から出土した。長さ約92.8cm、幅約12.2cm、厚さ約8.8cmの板目材で、一端から約9.5cmの位置に3.5×3.0cmの方形の柄孔と、32.5cmの位置に3.1×4.0cmの切り欠きを作る。

W13はSK24から出土した。長さ約85.9cm、幅約21.65cm、厚さ約14.55cmの板目材で、表面ほぼ中央に約17.5×7.5cm、深さ約4.6cmの柄孔をもつ。木口一端は鋸様の工具で切られているが、表面の風化が著しく詳細は不明。

W14～16は江戸時代の水溜土坑SK13から出土した。W14・15は緩やかな湾曲面をもつ針葉樹の板目材で、ともに下端から3cmの位置に両側面からの直径3～4mmの穿孔があり、目釘で綴る桶のくれ板であろう。但し、W14が長さ13.55cm、W15が15.45cmと異なることから、別の製品であろう。W14は上下端とも摩耗している。

W16は長さ17.6cm、幅2.45cm、厚さ1.8cmの針葉樹の角材で、表面は手斧様の工具で整形し、一端をやや薄く作る。

W17はSE04から出土した。鉋様の工具で仕上げた角材の一端を刃こぼれした手斧様の工具で斜めに尖らせている。杭などに転用したものか。

W18は機械掘削時に攪乱土から出土した。過半を失うが、年輪界の密な針葉樹を用いた建築部材である。正面・側面の器表面の一部に白色の塗料が残存する。角材の上半部に凹凸を巡らせた彫刻を施している。凹部の中央には鋸の痕跡が残されることから、大きく鋸で成形し、刻むラインを入れた後、鑿などで成形し、表面を研磨したものであろう。塗料の認められない上面には、幅約6.5cmの方形の柄孔が約6.3cmの深さで刻まれる。柄孔内面には幅1cm程の鑿の痕跡が残る。下面の痛みが著しいことから洋風建築の柱座であろう。

W19は井戸SE03の底付近から出土した釜である。細い竹を棕櫚縄で円錐形状に綴っている。棕櫚縄を編んだ口部分から縄でつながった口径の小さい別の円錐形のもの挿入して、魚を進入させるものである。

## 第4節 小結

980190の調査区は3,047㎡と最も広い面積の調査であったが、その半分以上の範囲が県立病院建設など近代以降の掘削により破壊されていた。検出された遺構には、掘立柱建物址を含む柱穴・井戸・土坑・溝などがある。

出土遺物には土器類、石器・石製品、木製品、金属製品、タイル、ガラス瓶などがあり、サヌカイト製

の石器は弥生時代のものであろう。タイル・ガラス瓶及び木製品の一部は近代以降のもので、県立神戸病院に伴うものであろう。

このように弥生時代から近代までの遺物を掲載したが、遺物から見た主たる時期は、A期；12世紀中葉から13世紀前半のもの、B期；17世紀後半から18世紀前半のもの、の2時期に集中する。その他には8世紀や11世紀の遺物がわずかに出土し、14世紀前半にはいくつかの柱穴や溝の埋土上層から出土しており、溝などの埋没時期を示している。15世紀から17世紀前半の土器は溝の埋土などに更に新しい時期の遺物とともに出土している。18世紀後半以降19世紀のものは一部の井戸などから出土する。

A期では、平安時代末の平家一門の福原別業が設けられ、福原遷都によりそれらが内裏や院御所となり、さらに皇居を新造営し、貴族の邸宅が京都から移されたり、新築されたりしている。そして遷都後、安德天皇と平家一門が都落ちする際に福原は焼かれ、その翌年、一の谷を主として生田の森から須磨にかけての一連の戦いによってこの地は放棄される時期を含んでいる。但し、焼け野原となって無住の地になったのではなく、現在の土器編年ではその直後の時期に京都系の土師器を用いる人々が生活している。このA期の遺物の特徴には京都系の土師器、瓦器、石鍋が挙げられ、石鍋を除くと供膳具が圧倒的に多い傾向が見える。この時期の瓦が一定量出土しており、図化できたものでは軒丸瓦2点、軒平瓦4点、丸瓦2点、平瓦6点であり、軒瓦の比率が高いことがわかる。瓦は須志質に焼成されていることから、すべて東播系の諸窯で生産されたものであろう。1150年代初見の金剛心院と同紋の軒丸瓦が含まれる。

B期は江戸時代中頃で、前代の溝の一部を利用した石積みをもつ溝SD105・112や井戸SE03などの水利施設が構築されたのはこの時期であろう。日常雑記類で占められ、おそらく農家の一部であろう。

掘立柱建物SB10・11・12の3棟は方形の掘り方をもつ建物で、埋土に他の遺構と異なった黒色シルトが含まれることから、似通った埋土の古墳時代の遺構に近い時期のもの可能性を考えていた。前回の報告書で掲載された920174調査区で検出されたSK02からは奈良時代前半の土器が出土しており、また、この980190の調査区でもわずかに奈良時代の遺物が見られることから、奈良時代の遺構の可能性も考えられた。

これらの建物は溝SD110・111・113などと方位軸を同じくしており、SB10はSD111・112に切られている。3面ないしは4面に庇をもち、2間×4間以上の身屋を有するSB12は東西棟である。その南西に直交方向に配されたSB10はおそらく2間×6間以上の南北に長い建物で庇等は見られない。SB11はSB10の東に接するように建てられた2間×3間以上の南北棟で、柱間は他のものより狭い。SB10とSB11は柱間が異なること、軒が接することから時期が異なるものと思われる。これが奈良時代のものであるなら正殿と脇殿となり「コ」字形配列をもった官衙的施設とすることができ、たとえば荒田郡衙の候補ともなる。

出土遺物が非常に乏しいが、SB10のP1から出土した140やSB12のP15から出土した141は奈良時代の土器ではない。柱穴埋土の黒色シルトは神戸大学医学部附属病院内の範囲では偏った地点にのみ堆積しており、大倉山に沿った南北方向に帯状に堆積していることが確認調査などのデータで判明した。(図版69)埋土の状況では遺構の時期を決定することは困難である。

## 溝

SD102・110は埋没後、SD103・105が同じ位置の西寄りに再構築される。特に南端部では重なり合っている。このため一部遺物が混じることになるが、SD102・110は概ね12世紀前半から13世紀前半の時期

つまりA期に属し、14世紀代には埋没するようである。SD103・105はB期のものである。

SD102・110に直交するSD111・112・113では石列を伴うSD112がSD111・113の埋土を切って構築されている。B期のものであろう。SD113からは12世紀中葉から13世紀前半にかけての遺物が最も多くこのA期に掘削されたものとする。その後、完全に埋没するのは16世紀代であろう。SD111はSD113よりやや遅れて掘削されたものか、同時期のものと考えられ、A期あるいはその直後のものであろう。

SD114～116・119などの小溝は細砂層除去後に検出された。細砂層からは327・331・340・342・343・346・349・351・359の土器が出土しており、洪水砂によってもたらされた可能性が高い。13世紀前半以前の遺物で占められる。このことからこれらの溝はA期のものかあるいはそれ以前のものであり、溝内出土土器からも肯定される。

#### 井戸

井戸のほとんどがB期に属する。SE01は更に新しく、B期に続く時期のものであろう。但しSK09も近世の井戸に類した掘り方であるが、出土遺物はA期に続く時期のものがほとんどである。また、石積みをもつSK13などもこの時期のものである。

#### 土坑

この地区では2003061調査区のSK01や840020調査区の柱穴のようにA期の土器が一括出土するものは見られない。A期の土器は溝に投棄されたものが最も多い。

#### 【参考文献】

- 小森俊寛、上村憲孝 1996「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所
- 百瀬正恒、近江俊秀 1995「各地の土器様相 近畿」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真福社
- 岡田章一、長谷川眞 2003「兵庫津遺跡出土の土製煮炊具」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』第3号 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 森田 勉 1995「中世須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』中近世土器研究会編 真福社
- 横田賀次郎・森田 勉 1978「大宰府出土の輸入陶磁器について—型式分類と編年を中心に—」九州歴史資料館研究論集 4
- 永井久美男 2002「新版中世出土土器の分類図版」高志書院
- 木戸雅寿 1993「石鍋の生産と流通について」『中近世土器の基礎研究』IX 日本中近世土器研究会
- 木戸雅寿 1995「石鍋」『概説 中世の土器・陶磁器』日本中近世土器研究会編 真福社
- 甲斐昭光 2001「兵庫県出土の中世滑石製品」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』創刊号 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 所

## 第6章 平成11年度の調査（遺跡調査番号 990132）

### 第1節 概要

平成10年度調査区（遺跡調査番号980190）に南接する南北5.3×東西63mの短冊形の調査区である。南半分は既に攪乱され、遺構面の遺存状況はあまり良くない。検出された遺構は掘立柱建物1棟、溝、柱穴である。

### 第2節 遺構

#### 掘立柱建物

##### SB01（図版41、写真図版47）

調査区北西隅で1×1間分を検出した。SD107と位置的に重複する。円形を呈する柱穴3基（P1～3）からなり、柱穴の規模は直径30～40cm、検出面からの深さは20～30cmを測る。梁行は心間距離が約2.9m、桁行は約2.1mである。P1から瓦器碗（376）、P2から土師器皿（377）、P3から土師器皿（378）が出土している。

#### 柱穴（図版40）

建物跡以外にも散在的に3基のピットを検出した。P4は直径約60cm、深さ17cmである。P5・P6は直径約30cmで、検出面からの深さはそれぞれ10cmと25cmである。P04から土師器皿（379・380）、P06からも瓦器皿（381）が出土している。

#### 溝状遺構

##### SD107（図版43、写真図版47）

調査区西端で検出した南北方向に流れる溝である。攪乱によって大きく損壊し、SB01と位置的に重複する。幅は0.7～0.9m、断面は西側が二段落ちとなり、検出面からの深さは30cmである。土師皿（408）が出土している。

##### SD110（図版42、写真図版46）

調査区西半で検出した南北方向に流れる溝である。中世前期に掘削された溝が、近世に改修されている。掘削当初は幅約2m、検出面からの深さ0.7m程度の断面が逆台形を呈する素掘り溝であったと考えられる。近世では攪乱されているが両岸に石垣を積んで補強した幅0.5mの溝になっていた。土師器皿（382～389）、碗（390）、鍋（391・392）、瓦器碗（393～396）、須恵器碗（397）、甕（398）、こね鉢（399）、備前焼播鉢（400～403）、白磁碗（404）、青磁碗（405・406）、染付碗（407）が出土している。

#### SD① (図版 43)

SD107 と SD110 の中間に位置する南北方向の溝である。幅 20～40cm、検出面からの深さは 30cm を測る。

#### SD② (図版 43)

調査区のほぼ中央に位置する南北方向の溝である。幅 40cm、断面は浅い皿状で検出面からの深さは 10cm である。

#### SD④ (図版 43)

調査区東半に位置する南北方向の溝である。P4 に切られ、南半を撓乱によって削平されている。幅 0.7～1.5m、断面は皿状を呈し検出面からの深さは 20cm である。

## 第3節 遺物

### 1. 土器 (図版 44、写真図版 99・100)

#### P1 出土土器

376 は瓦器椀である。口縁部内外面には強いヨコナデ調整を施す。体部外面は指おさえの後、ナデ調整を施し、指頭圧痕が残る。色調は灰白色を呈する。

#### P2 出土土器

377 は土師器皿である。非ロクロ成形で、平底、体部は緩やかに斜め上方に延びる。体部内外面にはナデ調整が施される。色調はにぶい黄橙色を呈する。

#### P3 出土土器

378 は土師器皿である。非ロクロ成形で、器形は全体に大きく歪む。平底で、体部～底部外面にかけて、指おさえの後、ナデ調整を加え、指頭圧痕が残る。内面に煤が附着する。

#### P4 出土土器

379・380 は土師器皿である。379 は非ロクロ成形で、内外面ともヨコナデ調整を施し、色調はにぶい黄橙色を呈する。380 も非ロクロ成形で、体部内外面は指おさえの後、ナデ調整を施し、指頭圧痕が残る。色調はにぶい黄橙色を呈する。

#### P6 出土土器

381 は瓦器皿である。体部～底部外面は指おさえの後、ナデ調整を施し、指頭圧痕が残る。体部内面はナデ調整の後、ミガキ調整を加える。色調は暗灰色を呈する。

## SD107 出土土器

SD107 からは、VB1e 類に分類される非ロクロ成形の土師器皿 (408) が出土している。

## SD110 出土土器

SD110 からは、土師器皿 (382~389)・椀 (390)・鍋脚部 (391・392)、瓦器椀 (393~396)、須恵器椀 (397)・甕 (398)・こね鉢 (399)、無釉陶器播鉢 (400~403)、白磁碗 (404)、青磁碗 (405・406)、染付磁器碗 (407) などが出土している。

**土師器 皿** (382~389) はいずれも非ロクロ成形で、VB3b 類 (382・387)、VB4 類 (383)、VB1c 類 (384・389)、IVB2 類 (385)、IVB3 類 (386)、VB2a 類 (388)、に分類される。所属時期は、VB2a 類が 12 世紀中葉~後葉に、VB4 類、IVB2 類が 12 世紀後葉~13 世紀初頭に、VB3b 類、VB1c 類、IVB3 類が 12 世紀後葉~13 世紀前半代にそれぞれ比定される。

椀 (390) は非ロクロ成形で体部が僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。体部外面は指おさえの後、ヨコナデ調整を施し、指頭圧痕が残る。

391・392 はいわゆる足鍋の脚部である。いずれも平面形状は切頭円錐状を呈し、外面は指おさえの後、ナデ調整を施す。

**瓦器 椀** (393) は断面「U」字形の退化した低い高台を貼り付ける。口縁部内面は僅かに窪む。体部外面は指おさえの後、ナデ調整、内面はナデ調整の後、ミガキ調整を施す。色調は暗灰色を呈する。

椀 (394~396) はいずれも断面台形状の低い高台を貼り付ける。体部内面にはナデ調整の後、ミガキ調整を施す。炭素はいずれもほとんど吸着せず、灰色から灰白色を呈する。

**須恵器 椀** (397) は口縁部内外面には強い回転ナデ調整、体部内外面には回転ナデ調整を施す。色調は灰色を呈する。東播系須恵器で 13 世紀代の所産である。

甕 (398) は口縁部が「く」の字状に屈曲して、外方にひらく。粘土組巻上げ成形で、口縁部外面には平行叩き目が残る。東播系須恵器で 13 世紀前半代に比定される。

こね鉢 (399) は口縁端部を上方につまみ上げる。口縁部外面に重ね焼痕がみられる。東播系須恵器で 13 世紀代に比定される。

**無釉陶器** 400~403 はいずれも備前焼播鉢である。口縁部の形態から、400・401 は備前焼Ⅲ期相当で 14 世紀代に、402・403 は備前焼Ⅳ期相当で 15 世紀代の製品と考えられる。

**白磁 碗** (404) は高台が比較的幅が広く、低い。底部内面の軸は蛇の目状に軸ハギする。横田・森田分類の白磁碗Ⅶ類相当で、12 世紀後半代に比定される。

**青磁 碗** (405) は高台竪まで、青磁軸を施軸し、高台畳付以下は露胎である。碗 (406) は体部外面にややあまい鏡連弁文を施文する。いずれも龍泉窯系青磁で、13 世紀代に比定される。

**染付磁器 碗** (407) は口縁部が外方にひらく端反碗で、外面には菊花文を描く。19 世紀前半代の肥前系染付の可能性が考えられる。

## 2. 石器・石製品 (図版 44、写真図版 118)

S21 は、SD110 下層から出土した。サヌカイト製楔形石器。素材剥離の末端はヒンジーフラクチャー。用いられたサヌカイトは、肉眼観察からは二上山産と判断される。長さ 26.1mm、幅 43.9mm、厚さ 8.2mm、重

量 8.9 g。

S22・23 は包含層から出土した基石である。S22 は白い石英質の円礫で、直径が 2.15～2.40 cm、厚さ 1.18 cm、重さ 8.6 g を測る。S23 はやや灰色がかった石質で、直径 1.85～2.2 cm、重さ 4.0 g を測る。片面が扁平である。

#### 第 4 節 小結

幅の狭い調査区で更に南半分が攪乱で侵されており、遺構の残存状況は良くなかった。北側の 980190 調査区から続く溝や、一部であるが掘立柱建物が検出された。

## 第7章 平成15年度の調査1（遺跡調査番号2003061）

### 第1節 概要

調査区は神戸大学付属病院の北西隅にあたり、病院の増改築工事の一貫として立体駐車場の整備が予定されている。昭和56年度に実施された神戸大学の調査で二重の壕と掘立柱建物跡が検出された地区の東に隣接し、平成14年度の確認調査で遺構が検出された地区の北に隣接することから、本発掘調査を実施した。調査面積は約244㎡、調査期間は平成15年8月4日～9月30日である。

調査区は元コバルト治療室と駐車場にあたり、比較的遺構面が遺存していることが予想されたが、残念ながら、改築前の病棟の建設により大きく損なわれていた。遺構面が確認できたのは調査区の南端付近の約70㎡であり、その他は基盤の暗灰黄色極細砂～中砂層以下まで攪乱が及んでいた。

遺構は2面で検出された。第1面は盛土及び攪乱直下の黄灰色極細砂～粗砂層（図版45第2層）上であり、掘立柱建物跡と土坑・柱穴が検出された。遺構面は攪乱により凹凸が激しいが、最も遺存状態の良い部分での標高は約26.2mを測る。西壁断面では第1面上に黄灰色細砂～中砂層の堆積が確認でき、第1面は本来この層上にあった可能性もあるが、この層が極めて部分的に遺存するのみであることから、判断は難しい。第1面の時期はSK01・P12は12世紀後半であり、掘立柱建物はSK01を切って建築されていることから、遺構全体は12世紀後半以降と判断される。

第2面は黒色極細砂～中砂層（図版45第4層）上であり、古墳時代の竪穴住居跡と柱穴が検出された。ただ、遺構検出面と西壁第3層との差異はほとんど無く、調査途上で3層中の住居跡にあたる付近からは古墳時代の土器や炭化物が多く確認されたため、第2面は本来第3層上にあったものと判断している。ただし、この層はかなり土壌化が進行しているため、正確な遺構の検出は困難であった。第2面の遺構はSH01の示すTK209段階と判断している。

### 第2節 第1面の遺構（図版45～49、写真図版48～55）

#### 1. 掘立柱建物

##### SB01

東西2間（3.6m）、南北1間（2.7m）の掘立柱建物で、柱間は東西約180cm、南北約270cmを測る。建物の方位はN19°W（N＝座標北）であり、平成10年度の調査で検出された建物跡や溝等の方位とほぼ合致している。柱穴掘形は一辺約1mの方形で、深さは最も遺存状態の良いP4の西壁で約70cmであり、柱穴の底のレベルは25.25～25.55mとなっていた。埋土は黒色極細砂から中砂と暗黄灰色細砂～中砂の混層であり、柱穴内には約30cmの柱痕跡が認められた。柱穴の底には礎盤石が据えられており、礎盤石上面レベルは25.38～25.60mとなっていた。P1・2・4の礎盤石は火山礫凝灰岩が使用され、いずれの礎盤石も表裏面に鑿による調整痕がみられる。表裏以外ではP4の礎盤石には両側面と片方の木口面に、P1の礎盤石には両側面に、P4の礎盤石には片側の側面に鑿によ

る表面加工痕が残る。これ以外の側面・木口面は割れの状態であることから、石製品を割って礎盤石に再利用したことが考えられる。また、P1・2・4の礎盤石は2～3片に割れており、割れ方からみて建造物の重量により発生した割れと思われるが、石材が軟らかいことにも起因するものと思われる。P3・5の礎盤石は瀬戸内系の花崗岩が使用され、P3では側面を加工して円形とし、P5で表裏と両側面、片方の木口面を加工している。残る木口面は割ったままの状態であり、この礎盤石も再利用されたものと思われる。P2の掘り方内からは土師器・須恵器壺(458)が、P5の掘り方内からは鉄製品の釘(M22・23)が出土している。

## 2. 土坑

### SK01

SB01のP2に切られた状態で検出された、長軸1.56m・短軸1.08mの楕円形を呈する土坑である。深さは約10cmと浅く、埋土は黒褐色極細砂～細砂の一層であった。内部には土師器皿類・瓦器小皿・須恵器壺・青白磁皿等の多量の土器と焼けた石が廃棄されていた。土師器皿類の多くは北から南に傾斜した状態であることから、土坑の北側から一括して土坑内に廃棄されたものと思われる。

また、土師器皿類は大多数が完形に近い状態であり、須恵器壺と青白磁皿は一部の破片となっている。これは土師器皿類は同時使用され、その他の土器類は廃棄が同時になったとみるべきであろう。出土遺物には他に鉄製品の飾金具(M26・27)・釘(M25)が含まれていた。

## 3. その他の遺構

### P12

SK01の北側で検出され、一部は後世の攪乱で破壊されていた。径60cm・深さ約30cmのビットで、埋土は褐色と黒褐色を呈する極細砂であった。内部からは土師器小皿3点(461～463)が出土しており、461と463は口縁部を合わせる形で出土している。

その他、埋土が黒褐色極細砂である小規模な柱穴と思われるビットが検出されているが、調査区の関係や攪乱により建物として復元はできなかった。

## 第3節 第2面の遺構(図版50、写真図版56)

### 1. 竪穴住居

#### SH01

西壁際で、北東隅から東壁にかけての一部が検出されおり、北壁は攪乱により消失していた。東壁は高さ約30cmまで遺存し、直線的であることから、この住居跡の平面形は方形と判断される。壁は中央が攪乱されているが、約5.4mの長さまで検出できた。壁下には幅16～40cmの壁溝が設けられていた。北東隅の床面上には径約40cmの柱穴が存在し、柱穴の内部には径約15cmの柱痕跡が確認できた。この柱穴の位置から見て、主柱穴は4本と思われる。また床面上には炭化物が多く認められたが、材状に検出できたものはない。壁溝上から須恵器杯身(465)が出土している。

## 2. その他の遺構

遺構面の中央から東半で径 30~70 cm の柱穴と思われるピット群が検出されている。ピットの埋土は黒色極細砂であり、建物として復元できるものは無いが、須恵器の横瓶(460)等が出土している。

## 第4節 遺物

### 1. 土器 (図版 51・52、写真図版 101~103)

#### SK01 出土土器

SK01 からは、土師器皿(409~455)の他、瓦器皿(456)、須恵器甕(457)、青白磁碗などが出土している。

**土師器 皿** (409~455) はいずれも非ロクロ成形で、II B1 類(409)、IV A1b 類(421・431・444・452・453)、IV B1 類(416・425・430・435・450)、IV B3 類(455)、V A2 類(411・432・433・438・454)、V B1b 類(428・434・439・440)、V B2a 類(415・419・420・422・423・424・426・427・443・445・451)、V B3a 類(412・414・417・418・429・437・441・447・448・449)、V B3b 類(413・436・442)、VIA 類(410)に分類される。

**瓦器 皿** (456) は体部が直線的に外上方に延びるもので、底部内面には細かい暗文が残る。

**須恵器 甕** (457) は、口縁部が大きく外方にひらき、端部は上方につまみ上げる。外面の頸部へ体部にかけて、平行叩き目が残る。東播系須恵器で、12世紀後半代に比定される。

**青白磁 細片**のため、図化していないが、器壁が非常に薄く、外面にヘラ描きで草花文を施文する青白磁碗(写真図版 103)が出土している。12世紀後半代の景德鎮窯産の製品と考えられる。

#### ピット内出土土器

**P2** P2からは須恵器甕(458)が出土している。458は口縁部が外方にひらく。体部外面には自然釉が掛かる。

**P11** P11からは須恵器甕(459)・横瓶(460)が出土している。

甕(459)は口縁部が緩やかに外方にひらき、端部は上下につまみ出す。体部外面の一部に叩きの痕跡が残る。

横瓶(460)は器形は俵形を呈し、頸部から上は欠失する。体部の側面を底にして、粘土紐巻上げで成形する。体部外面には左斜め方向の叩き目が残る。

**P12** P12からは土師器皿(461~463)が出土している。いずれも非ロクロ成形で、V A2 類(461)、V B4 類(462)、V B3a 類(463)に分類される。461・463は12世紀中葉~後葉に、462は12世紀後葉~13世紀初頭に、それぞれ比定される。

**P29** 土師器皿(464)は非ロクロ成形で、体部は緩やかに斜め上方に延びる。V B3a 類に分類され、12世紀中葉~後葉に位置づけられる。

#### 竅穴住居SH01 周溝内出土土器

465は須恵器杯である。丸底で体部は内彎して斜め上方に延び、かえりは内傾する。体部外面から

底部外面にかけては回転ヘラ削りの後、ナデ調整を施す。

### 包含層中出土土器

包含層中からは、土師器皿(467・468)・鍋(466)、須恵器杯身(469)・杯蓋(470・471)・壺(472)・高杯(473)が出土している。

**土師器** 皿(467・468)はいずれも非ロクロ成形で、VA2類(467)、VB1c類(468)に分類される。467は12世紀中葉～後葉、468は12世紀後葉～13世紀前半にそれぞれ比定される。

鍋(466)は口縁部が大きく外方にひらき、外面はハケ目調整、内面はヘラ削り調整を施す。壺形I類に分類され、11世紀末～12世紀前半代に比定される。

**須恵器** 杯身(469)は丸底で、体部は内彎して斜め上方に延び、かえりは短く内傾する。内外面とも回転ナデ調整を施す。

蓋(470)は器高は比較的高い。体部から底部外面にかけて、ヘラ削りの後、ナデ調整を施す。蓋(471)は体部が内彎する。体部外面はヘラ削りの後、ナデ調整を施す。

壺(472)は口縁部が外方にひらき、頸部外面には平行叩き目が残る。

高杯(473)は一部、透かしが見られる。内外面とも回転ナデ調整を施す。

## 2. 金属器(図版52、写真図版121)

M22・23はともに礎盤石をもつ建物を構成する柱穴P5の掘り方から出土した。頭部はあまり叩き伸ばさずに直角に折り曲げている。M22は長さ9.25cm、M23は残存長8.9cmと大型のものである。

M24はP16の柱痕埋土から出土した角釘で、先端をわずかに欠くが残存長5.7cmを測る中型のものである。頭部は平たく叩き伸ばして折り曲げている。

M25～27はSK01から多量の土器とともに出土した。M25は非常に小型の角釘で、残存長は2.1cm。現状ではM27の両脇の方形小孔には入らない。

M26・27は板状を呈した鉄製の飾り金具である。M26は一辺1.7cmの正方形の板の中央に、直径0.5cmの円孔を穿ち、4辺の中央に幅の広い切り込みを入れている。厚さは0.2cm程である。

M27も2.5×2.6cmの方形の板の中央に各辺に沿った0.95×1.12cmの方孔を穿つもので、4辺の中央に切り込みを入れている。対角する2方の隅に小さな方孔をもつ。釘孔であろうか。

## 3. 石製品(図版53・54、写真図版119)

S24～28はひとつの建物SB01を構成する柱穴の掘り方底に据えられていた礎盤石である。S25・26は花崗岩製、その他は火山礫凝灰岩である。花崗岩は瀬戸内系花崗岩に近く、御影石などの六甲山系とは異なるセン緑岩質花崗岩であろう。また、火山礫凝灰岩にはハリ質安山岩が多く含まれ、石英がわずかに含まれており、火山灰を含んでいる。(遠藤亮氏ご教示による。)

S24はP4から出土した。長さ36.8cm、幅34.0cm、厚さ9.53cmを測り、ほぼ中央で二つに割れて出土した。表面の中央は割れ面を挟んでくぼんでいる。表裏面・両木口面には鑿による成形痕が残されており、両側面は割れた自然面である。表面には幅1cm程の鑿痕が約2.5cm間隔で、矢羽根状に入れられて整形されている。裏面に残る鑿痕はやや細く、側面のものに近い。岩質に含まれる礫の粒子が大きく、また多い部分の整形痕は不鮮明である。側面は、上面側が斜め方向に幅0.4cm程の鑿

痕が約 1.2 cm 間隔で、下面側が直交方向に更に細い鑿痕が残されている。石材には 20 mm 以下の緑褐色の石粒、10 mm 以下の黒色の石粒、3 mm 以下の白色の石粒が含まれる。

S25 は P 5 から出土した。長さ 52.65 cm、幅 38.65 cm、厚さ 9.05 cm の板石で、表裏面や全周の側面・木口面に加工の痕跡が認められる。裏面の両木口中央には約 9×4 cm の方形の矢孔の痕跡と見られる抉れが残る。表面の中央には直径 1.3 cm 程の赤褐色の小円が付着する。

S26 は P 3 から出土した。長さ 34.5 cm、幅 34.3 cm、厚さ 7.2~15.5 cm の円盤で、周囲には割れが残る。表面の中央部は柱当たりによるものか、平滑に摩耗する。

S27 は P 1 から出土した。長さ 33.1 cm、幅 31.2 cm、厚さ 9.3 cm を測り、三つに割れて出土した。表裏面・両側面の全面に鑿による成形痕が残されている。両木口面は割れ面である。表面には幅 0.5~0.8 cm 程の鑿痕が 1~1.5 cm 間隔で、矢羽根状に入れられて整形されている。鑿は外から内へと打たれている。両側面に沿って直交方向の鑿痕も残る。裏面に残る鑿痕はやや細く、斜め方向に打たれており、逆斜め方向のものが一部に残る。やはり両側面に沿った位置には直交方向に鑿痕が残る。側面の鑿痕には、下面側が斜め方向に、上面側が直交方向に鑿痕が残されている。

S28 は P 2 から出土した。長さ 47.2 cm、幅 29.8 cm、厚さ 7.7 cm を測り、ほぼ中央で二つに割れて出土した長方形の板材である。表裏面・両木口面及び一側面には鑿による成形痕が残されており、片側面は割れた自然面である。表面には幅 1.8 cm 程の鑿痕が約 1.0~2.3 cm 間隔で、長辺に沿って中央に向かうように矢羽根状に入れられている。両側面に沿って直交方向の鑿痕も残る。裏面に残る鑿痕はやや細く、放射状に入れられている。木口面は、幅 0.5 cm 程の鑿痕が約 1.2 cm 間隔で残されている。

## 第5節 小結

この調査区では病棟建設に伴う攪乱が激しく、遺構面は調査区の南端に高状に残されていた。その部分でも遺構面は攪乱され、遺構は攪乱直下あるいは攪乱坑の底で検出されるような状況であった。

遺構面は上下 2 面あり、第 1 面では掘立柱建物跡 1 棟・土坑 1 基・ピット群が検出された。これら第 1 面の時期については SK01 出土の土器類が手がかりになる。SK01 からは土師器皿類・瓦器小皿・須恵器壺・青白磁皿が廃棄された状態で出土しており、一括性の高い良好な資料と捉えている。土師器皿類は非ロクロ整形で、II B 1 類・IV A 1 b 類・IV B 1 類・IV B 3 類・VA 2 類・VB 1 b 類・VB 2 a 類・VB 3 a 類・VB 3 b 類・VIA 類で構成され、IV A 1 b 類・IV B 1 類・VA 2 類・VB 1 b 類・VB 2 a 類・VB 3 a 類・VIA 類は 12 世紀中頃から後半に、II B 1 類・IV B 3 類・VB 3 b 類は 12 世紀後半から 13 世紀前半の年代が与えられるものであるが、一括性という点から考えて、これらの土器群が混在する時期があり、その段階に使用・廃棄されたものと考えられる。また、土師器は京都系とされるものであることから、京都系土師器類を分類した小森・上村分類に従えば、土坑群の土師器皿類は皿 A c・皿 N 小・皿 N 大で構成されていることになる。皿 A c はやや小型化し、底部周囲のナデによる窪みはみられない。また皿 N 大は口縁部が三角形状となるものが多く、口縁部下半の丸みが失われて直線的なものがみられる。さらに口縁部のナデは 1 段となっており、小森・上村編年の V 期新とみられる。V 期新は明確な推定年代は示されていないものの、1 段階古い V 期中が 1130~1148 年の 12

世紀中頃と考えられ、V期とVI期の境は1170～1180年頃とされている。このことからすれば、V期新はこの間の12世紀後半に位置づけられ、本編年で示された時期と矛盾はない。

この他、土坑内から土師器類とともに出土した土器は、須恵器の甕が東播磨系の製品であり、編年では12世紀後半に、また青白磁碗は景德鎮窯産で12世紀後半に位置づけられるものである。土師器類が示す年代とも符合している。

このように須恵器甕・青白磁とも土師器血類の示す年代と矛盾はなく、SK01は12世紀後半に土器廃棄用に掘削され、その内部に土器群が一括して廃棄されたものと断定してよいものである。

次にSB01の建築時期であるが、掘立柱建物で、柱穴は一辺1mの方形プランであり、柱間が1間1.8mを基本としている等、極めて律令的な様相の建物である。しかし明らかにSK01を切って建築されていることから、12世紀後半以降の建物である。またSK01の内部の土器にそれほど乱れがみられないことから、SK01が完全に埋まって以降の建築であるといえる。SB01のP2からはSK01と同様の須恵器甕や土師器血類が出土しているが、SK01を切っている以上、当然のことであり、時期の決め手にはならない。礎盤石については安山岩礫を多く含んだ火山礫凝灰岩が使用されており、丸亀市郷土資料館の遠藤氏から香川県高松市屋島の長崎ノ鼻産の石材と性質が類似するという指摘を頂いている。同氏によればこの地の石材は近世を中心に採掘されているということであり、礎盤石に使用されている火山礫凝灰岩が屋島産で間違いなければSB01は近世以後の建物ということになる。今回の調査区の南西側では16年度の調査で近世以後の石垣が検出されており、SB01がこの石垣と関連している可能性は充分に考えられる。

第2面では古墳時代の堅穴住居跡や柱穴が検出され、出土遺物はTK209型式の範疇で捉えられるものであり、これらの遺構にはほぼ7世紀前半までの年代が与えられよう。柱穴の中には直径が60～70cmの大形のものがみられたものの、調査区が狭小なことから、建物として復元できなかったが、調査区周辺には、中世の遺構埋土とは明らかに異なって、黒色砂を埋土とする古墳時代の遺構が存在することが明らかとなった。これまでの調査成果の精査や今後の調査に貴重な資料となりうるであろう。

## 第8章 平成15年度の調査2（遺跡調査番号2003172）

### 第1節 概要

病院の旧本館の北西部にあたり、第7章で記述した同じ平成15年度の遺跡調査番号2003061の調査と同じく立体駐車場建設に先立って調査を実施した。

この地点は昭和56・57年度に神戸大学工学部多淵敏樹教授によって調査された地点に南接しており、この昭和56・57年度の調査では、多くの柱穴が検出されており、その南端の壁に沿って土器等を含んだ落ち込みが認められたことから、さらに部分的に拡張したところ、北側にV字形をした薬研濠、南側にはU字形の畝濠が二重に掘り込まれていたことがわかった。（多淵1982・1985）

今回の調査予定範囲内で実施した確認調査（遺跡調査番号2002094）によって、南半部は大きく攪乱されていることが判明したが、北西部では遺物包含層及び旧地表面が検出された。

調査区の東及び北側は埋設管が設置されており、また、東・西及び北側が病院の救急車の進入路にあたることから調査対象から除外している。

本発掘調査では、南北約18m、東西約40mの範囲を当初設定したが、南東部分で旧本館地階部分が検出され、その掘り方などによって大きく破壊されていることが判明した。このことにより、南半部のうち西側については、トレンチにより攪乱されていることを確認した後、調査範囲から除外した。

確認調査の結果に基づいて調査を開始し、機械掘削を行ったところ、攪乱坑の土層断面観察により、確認調査（遺跡調査番号2002094）で検出された旧地表面は近世以降のもので、さらに下層に遺物包含層及び遺構面が存在することが判明した。

上層の遺構検出面では土坑（SK01）や畝状の小溝が検出され、19世紀以降の陶磁器片が出土している。近世以降には島などの土地利用が考えられる。

調査区の中央部に長方形の攪乱坑が検出され、掘削すると壁面を鉄管などで土留めし、下層は砂で充填されていた。砂を除去すると22年前に多淵教授が検出した二重の壕が現れ、その残された断面には、水糸用の釘や分層した刻線までが一部残されていた。この22年前のトレンチにより下層の遺構検出面を確定し、下層の調査を継続した。

下層面では、地形的に東から西へ緩やかに下がっており、その比高差は約60cmになる。この面では二条の溝（SD01・02）の他、小規模な掘立柱建物（SB01）が検出された。

また、SD01・02やSB01が検出された黒色極細砂層の下で、同じく黒色の埋土をもつ小溝が検出された。この他、SB01南側の攪乱断面で炭片を含んだ落ち込みを確認した。これらの最下層の遺構からは遺物は出土していない。攪乱除去時の断面から古墳時代の須恵器が出土しているが、遺構としては検出できなかった。攪乱坑断面や溝（壕）の壁面の観察から、この黒色極細砂層下の最下層の遺構面は全域にわたっていないことが判明しており、遺構の保存協議が予定されていたため、一部を除いては最下層面までの調査は行わなかった。

さらに下層の状況は花崗岩・パイラン土の自然堆積層で、遺物包含層や土壌化した面は認められなかった。

## 第2節 遺構（図版 55～58、写真図版 57～65）

### 1. 土坑

#### SK01

上層では島の畝状の小溝と土坑SK01が検出された。

調査区の西半部で検出されたSK01は平面形が不整な円形で、断面形は逆台形を呈する土坑である。直径約2.1m、深さ約0.8mを割り、埋土中には石や陶磁器片が含まれていた。近世以降の畝に伴う水溜りであろう。

### 2. 溝

下層面では黒色極細砂層上面で遺構を検出した。調査区の北半部で、東西に走る溝が二条はほぼ平行して検出された。北側の溝をSD01、南側の溝をSD02とした。二条の溝は西側では約50cmの間隔で並んでいるが、東端部では約20cmの間隔となる。両者の切り合いは認められず、土層断面の観察でもSD01がSD02より後まで窪みとして残っていたことがわかる程度で、両者の先後関係は現地では把握できなかった。溝の検出面は、上面が削平されている可能性も考えられたが、土層断面の状況や、あまり時期差が認められない掘立柱建物址が残っていることから、大きな削平は受けていないものと思われる。

両者とも極細砂質の地山を掘削しており、その底は粗砂層に達している。部分的に水の流れた痕跡は認められたが、水を保持する能力が低く、用水路としての機能は認めがたい。

#### SD01

SD01は北東部分では調査区外になり、南側の肩のみが検出されている。規模は場所によって多少異なり、最大幅約3.0m、最小幅約2.1m、平均して上幅約2.7m、深さは浅い地点で約1.1mになるが、最大では約1.7mの規模を持ち、断面形がV字形を呈した葉研壕である。

溝の中央部付近では、埋土の中層に直径約40cmの塊石や炭が含まれており、塊石には火を受けたような赤化したものも見られた。この中央部付近では中層以上では埋土中に地山の小ブロックが含まれ、人為的に埋め戻したような状況も見られたが、溝全域の基本的な堆積状況はレンズ状堆積をもち、自然に埋没した状態で、人為的に一時に完全に埋められた状況は認められなかった。この地点の炭化物を資料として放射性炭素年代測定を(株)加速器分析研究所に依頼した。(第10章参照) 出土した炭化物の大きさは20cm以下である。

溝内の埋土からは多くの遺物が出土している。(474～613、M28・29、S30) 中層の下半や下層では、溝の西半部の処々から完形の土師器皿や瓦器がまとめて出土しており、一括して投棄された様子が窺われる。この他、青磁・白磁・青白磁・須恵器・瓦なども出土している。遺物は上層からも出土しているが、集中して出土する傾向は見られない。

セクションを境に東から1・2・3・4区に分けて遺物を取り上げているが、東半部の1・2区では溝の全幅を掘削できていないこともあるが、出土遺物量は極めて少なくなり、完形品がまとめて出土する状況は認められない。

溝の最下層は部分的に布塚状を呈しており、その堆積にはラミネーションが見られ、恒常的ではないが水が流れた痕跡を認めることができる。地形から見て西流したものと思われるが、底場の高さはランダムである。

## SD02

SD02は最大上幅約2.1m、最も狭い位置で1.6m、平均すると約1.8mの幅を持ち、下幅は約1mである。深さは浅い部分で1.2m、深い部分で約1.8m、平均すると約1.6mを測る。断面形がU字形を呈した箱塚である。

SD01に比して直線的に掘削されており、現在の地割から西がわずかに南に振れる方位を示しており、座標北からはN70° Eの東西方向の角度で、約39mの長さで検出された。

埋土は、地山を構成するの黄褐色極細砂の小ブロックを多く含む層で、最下層にわずかにラミネーションが見られるが、部分的な広がりである。概ね北側から流れ込んだ堆積状況を示すが、中央セクション付近では部分的に南肩が崩れた堆積が見られる。実際、調査中の数日の雨により、肩部や壁面が著しく侵食を受けている状況が観察された。この溝の機能を保持するためには、底ざらえ等の改修が必要であろう。土層観察でも部分的には掘り直した改修とも考えられる堆積状況が見られたが、溝全域に及ぶものではないようである。底場の高さは地形に一致して西側が深く、東端と西端では50cm近い比高差がある。

この溝からも土器は出土するが(614~618)、SD01のような完形品は全く見られず、また、まとまって出土する傾向も認められない。遺物量もSD01に比べると非常に少ない。

## SD03-04

SD03・SD04はともに調査区の東端部で検出された溝である。SD01・SD02に並行して走る溝で、黒褐色極細砂の埋土をもつ、幅40cm以下、深さ10cm以下の小溝である。SD03は一部の柱穴に切られて検出された。遺物は出土しなかった。

## SD05-06

SD05・SD06は、下層の黒色極細砂の層を除いた最下層で検出された。方位は他の溝とは異なり、ほぼ座標の南北方向に一致する。ともにSD01・SD02に切られており、SD05はSD03にも切られている。両溝は黒褐色極細砂の埋土をもつ。遺物は出土しなかった。

SD06は幅約50cm、深さ約20cmの溝で、その南西に延長した攪乱土坑断面からは626~628の須恵器杯などが出土している。

## 3. 掘立柱建物

### SB01

掘立柱建物 SB01 は調査区の東端、SD02の南側で検出された。建物の北西の一部を1間×2間検出したに過ぎず、東側は調査区外、南側は攪乱となり全容は不明である。柱間は1.7~2.2m。柱穴は直径20cm程度の小型のものである。柱穴埋土から出土した土器小片からは溝(塚)との時期差は認められない。柱の主軸方向はSD01・02と一致する。

この他にもいくつかの柱穴が検出されたが、建物を復元するまでには至らなかった。

更に、掘立柱建物の南側では焼土や炭の混じった埋土をもつ土坑状の落ち込みを攪乱坑断面で確認し、堅穴住居の竈などを想定したが、明瞭な遺構としては認識できなかった。この落ち込みからは遺物は出土していない。

### 第3節 遺物

#### 1. 土器 (図版59～62、写真図版104～112)

##### SD01出土土器・土製品・瓦

###### (埋土最下層)

SD01埋土最下層からは土師器皿(474～528)・碗(529・530)、瓦器碗(531～534)・皿(535～537)、須恵器碗(538・541)・鉢(539・540・542)・甕(543・544)・杯身(545)・杯蓋(546)、白磁碗(547・548)、青白磁碗(549)、青磁皿(550)、カマドのミニチュア土製品(551)、丸瓦(552)が出土している。

**土師器** 皿はいずれも非ロクロ成形で、IIA類(474)、IIB2類(475)、IVA1b類(486・490・494・495・509・511・519)、IVA2類(489・501・506)、IVB1類(477・479・505・510・517・523・524・526)、IVB2類(493)、IVB3類(500・513・522・527)、VA2類(485・499・514・518・520・525)、VB1b類(481・487)、VB1c類(478・496・521)、VB2a類(476・480・492・515・528)、VB2b類(497・502)、VB3a類(482・483・503・508・516)、VB3b類(484・488・498・504・512)、VB4類(491)、VIB類(507)に分類される。所属時期はIIA類、IVA1b類、IVB1類、VA2類、VB1b類、VB2a類、VB3a類が、12世紀中葉～後葉に、IVB2類、VB4類が12世紀後葉～13世紀初頭に、IIB2類、IVA2類、IVB3類、VB1c類、VB3b類、VIB類が12世紀後葉～13世紀前半代にそれぞれ比定される。

**碗** いずれも底部の破片で、529は貼り付け高台をもつ。530は平底で、底部内面には凹部をもつ。

**瓦器** 碗は高台を欠失するもの(531・532)と高台部まで残存するもの(533・534)とがある。533は高台が断面台形状の比較的低い高台を貼り付け、内面の調整は縦方向の後、横方向のミガキ調整を施し、暗文が残る。534も同様の高台をもち、内面に横方向のミガキ調整を施し、暗文が残る。いずれも和泉型瓦器碗と考えられ、12世紀中葉～後半代に位置づけられる。

**皿**(535～537)はいずれも平底で、底部内面は不定方向(535・537)、一方向(536)のミガキ調整が施され、いずれも暗文が残る。

**須恵器** 碗(538)は平底で、底部外面には糸切痕が残る。東播系須恵器と考えられる。碗(541)は「ハ」の字状に外方にひらく貼り付け高台をもち、底部の切り離し技法はヘラ切りである。

**鉢**(539・540・542)は底部の切り離しが糸切のもの(539・540)とヘラ切りのもの(542)がある。いずれも東播系須恵器と考えられる。

**甕**(543)は口縁部が大きく外方にひらく。体部外面には僅かに叩き目が残る。甕(544)は体部は大きく内彎し、口縁部は「く」の字状に大きく屈曲し、外方にひらく。外面には平行叩き目が残るが内面の叩き目はナゲ消す。いずれも東播系須恵器と考えられる。

**杯身**(545)はかえりが短く内傾する。6世紀後半代の時期が考えられる。

**杯蓋**(546)は口縁部側面に端面をもち、端部は若干下方に引き出す。8世紀代の所産であろう。

**白磁** 碗(547・548)は口縁部をそのまま上方に引き上げる。内外面とも透明釉を施し、灰白色に発色する。横田・森田分類の白磁碗VI類相当で、12世前半～後半代に比定される。

**青白磁** 碗(549)は器壁が非常に薄く、口縁部は尖り気味に収める。体部内面にヘラ状工具で簡易な草花文を施文する。12世紀代の景德鎮窯産の製品と考えられる。

**青磁 皿 (550)** は底部内面にヘラ指きの草花文と櫛描きの雷光文を施文する。内外面とも青磁釉を施釉し、灰オリーブ色に発色する。底部外面の釉はかきとる。同安窯系青磁で12世紀後半～13世紀前半代に比定される。

**土製品 551** はミニチュアのカマド形土製品である。幅の広い脚をもつ羽釜を4つの脚をもつ移動式のカマドに据えた形を呈する。手づくね成形で、内外面とも指おさえの後、ナデ調整を施す。

**瓦 552** は丸瓦片で内面に布目痕が残る。

#### (埋土中層)

SD01埋土中層からは土師器皿(553～595)、瓦器椀(596・597)・皿(598～600)、須恵器椀(601・602)・鉢(603～606)・甕(607・608)、白磁碗(609・611)・皿(610)、青磁皿(612)、瓦(613)が出土している。

**土師器 皿 (553～595)** はいずれも非ロクロ成形で、II B1類(553)、IVA1b類(567・591)、IVA2類(556・569)、IVB1類(557・560・589・590)、IVB2類(565)、IVB3類(554・558・582・585)、VA1類(583)、VA2類(555・580)、VB1c類(569・572)、VB2a類(568・570・571・576・581・584・587・588・592)、VB2b類(595)、VB3a類(562・563・579)、VB3b類(561・573・575・578・586・593・594)、VB4類(564・566・574)、VIB類(577)に分類される。所属時期はVA1類が12世紀前半に、IV A1b類、IVB1類、VA2類、VB2a類、VB3a類が12世紀中葉～後葉に、IVB2類、VB4類が12世紀後葉～13世紀初頭に、IVA2類、IVB3類、VB1c類、VB2b類、VB3b類、VIB類が12世紀後葉～13世紀前半にそれぞれ比定される。

**瓦器 椀 (596・597)** はいずれも断面台形状の幅の広い低い高台を貼り付ける。内面の調整は596が縦方向の後、横方向のミガキ調整を施し、暗文が残る。また597も体部内面にミガキ調整を加え、暗文が残る。いずれも和泉型瓦器椀で、12世紀中葉～後半代に比定される。

皿(598～600)はいずれも平底で底部内面に暗文が見られる。

**須恵器 椀 (601)** は低い平高台をもち、底部外面には糸切痕が残る。椀(602)は平底で底部は601と同様、糸切痕が見られる。いずれも東播系須恵器で、601は12世紀前半代に、602は12世紀後半代にそれぞれ時期が求められる。

**鉢 (603～606)** は口縁端部を斜め方向に切り、端部を上方あるいは内側につまみ出す。いずれも東播系須恵器で12世紀後半代に位置づけられる。

**甕 (607・608)** はいずれも口縁部が外方にひらく。608は体部外面に格子目叩きが残る。亀山焼の可能性が高い。

**白磁 碗 (609)** は口縁部が玉縁状に肥厚する。横田・森田分類白磁碗IV類で12世紀後半代の所産である。

皿(610)は口縁部が僅かに外反し、輪花状に刻みを入れるもので、体部内面は隆線で分割する。横田・森田分類の白磁皿IV-1類相当で、12世紀後半代に位置づけられる。

**青磁 皿 (612)** は破片であるが、釉調、形態から同安窯系青磁皿と考えられる。

**瓦 613** は軒丸瓦で、復弁八葉蓮華紋が復原できる。窪んだ中房に珠紋が残る。全面に自然釉が附着する。神戸市神出窯の南支群、垣内小支群のNM4と同紋であろう。明石市林崎三本松窯でも同紋が生産されている。

## SD02出土土器

SD02 からは、土師器皿 (614)、瓦器椀 (615)、須恵器椀 (616・617)、白磁碗 (618) が出土している。

**土師器 皿 (614)** は非ロクロ成形で、体部は緩やかに斜め上方に延びる。VB4 類に分類され、12 世紀後葉～13 世紀初頭に比定される。

**瓦器 椀 (615)** は断面三角形の低い高台を貼り付ける。内面の調整は縦方向の後、横方向のミガキ調整を施し、暗文が残る。和泉型瓦器椀で 12 世紀中頃～後半の製品である。

**須恵器 椀 (616)** は口縁部内外面に強い回転ナデ調整を施す。椀 (617) は平高台で、底部内面はやや窪む。いずれも東播系須恵器で、617 は 12 世紀前半に比定される。

**白磁 碗 (618)** は器壁が全体に薄く、口縁部は小さい玉縁状に肥厚する。横田・森田分類 白磁碗Ⅱ類相当で、11 世紀後半に比定される。

## ピット内出土土器

P1 からは非ロクロ成形の土師器皿 (619) が出土している。IVA2 類に分類され、12 世紀後葉～13 世紀前半に比定される。

P6 からは須恵器鉢 (620) が出土している。口縁部を斜め方向に切るもので、12 世紀後半の東播系須恵器である。

P18 からは須恵器椀 (621) が出土している。僅かに平高台を作り出す。東播系須恵器で、12 世紀後半に比定される。

## 包含層出土土器・土製品

包含層中からは、須恵器椀 (622・623)・高杯 (626)・甕 (627)・壺 (628)、白磁碗 (624・625)、弥生土器壺 (629)、土鏝 (630) などが出土している。

**須恵器 椀 (622・623)** は平底で体部は直線的に斜め上方に延びる。622 は底部に糸切痕が認められる。いずれも東播系須恵器で 12 世紀後半～13 世紀前半の所産である。

**高杯 (626)** は体部が緩やかに外上方に延び、かえりは短く内傾する。6 世紀後半の所産であろう。

**甕 (627)** は丸底で、体部は大きく内彎し、口縁部は大きく外方にひろく。体部中央に穿孔が 1 箇所見られる。

**壺 (628)** は器壁が比較的薄い。体部は中位で大きく「く」の字状に屈曲する。体部外面にカキ目が見られる。

**白磁 碗 (624・625)** は口縁部が玉縁状に肥厚する。いずれも横田・森田分類白磁碗Ⅳ類で、12 世紀後半～13 世紀前半に比定される。

**弥生土器 629** は弥生土器壺の底部である。

**土製品 630** は棒状の土鏝で、下半部は欠失する。穿孔が 1 箇所認められる。

## 2. 金属器（図版62、写真図版121）

M28・29はSD01の中央部付近の埋土中層から別々に出土した鉄製の角釘である。ともに先端部を欠くが、M28は短いものであろう。出土した炭化材とともに建築物に使われていたものであろうか。

M30は機械掘削時に遺構面下層の黒褐色シルト質の土層から出土した。太く短い釘であろう。

## 3. 石器・石製品（図版62、写真図版117・118）

S29は重機掘削時に出土したサヌカイト製の楔形石器である。素材剥片の構成面が広く残る。左側面に折れ面風の剝離面が残るが、これも素材の構成面の可能性がある。従って石核後付き剥片を楔に用いたのかもしれない。端部より錐状剝離が走る。幅19.2mm、厚み7.0mm、重さ6.8gを測る。包含層からは弥生土器片も出土しており、また、他の調査では縄紋時代以前の遺物も出土している。

S30はSD01西半部の南層埋土から出土した砥石である。長さ16.0cm、幅13.45cm、厚さ9.38cmのやや軟質の円盤を用いており、表面が平らになるまで使用しており、擦痕も著しい。両側面の一部にも使用痕が残る。下面の一部に粗い擦痕が見られるが、安定を良くするために擦ったものであろう。下面には火を受けたような変色部が見られる。

## 第4節 小結

当初予定していた調査範囲内のうち南側は完全に破壊されていたが、北半部は江戸時代の面まで残存しており、その約70cm下層に平安時代末から鎌倉時代初頭の遺構面が良好に埋没していた。その間層はブロックを含む整地層も見られるが、洪水砂と思われる堆積層である。検出された遺構は2条の溝と掘立柱建物などで、2条の溝はまさに22年前に発見され、初めて福原京に関連する遺構とされたものであった。そして22年前にはトレンチ調査であったが、今回は約39mにわたって検出することができた。

調査段階ではSD01とSD02を同時期のものと考えていたが、両溝の形状・堆積状況、そして遺物の状況から両者の設けられた時期や機能差が認められることが判明した。また、両者間での遺物の接合関係は認められなかった。

3ヶ所の土層断面の観察ではSD01と02とは切りあい関係がなく、埋土の堆積状況ではSD01が後まで窪地で残っていたことがわかるだけである。SD01が後に掘削され、一定期間は同時に存在した可能性は残る。

SD01内の遺物の出土状況からは多くの土器器や瓦器は北側から投棄されたものと判断される。また、遺物は溝内の西半部から集中して出土している。

SD01埋土中の炭化物を資料として放射性炭素年代測定を実施した結果（第10章参照）、暦年較正年代は1004AD～1154ADに含まれ、平安時代後期中頃に相当することが判明し、土器の示す年代以前の時期であることがわかった。暦年較正年代のうち最も新しい年は平清盛が攝關守になる直前の年にあたるが、清盛が摂津国八部郡を私領化したとされる応保2年（1162）の8年前になる。

建築部材として伐採後の乾燥などの期間を考慮してもやや差があるように思われるが、その頃伐採されたものとしてもよからう。また、「家は毀たれ、淀川に浮かび・」と方丈記に見られるように、平安京の屋敷の古材を再利用したのかもしれない。そうであるなら、SD01埋土中の炭化物は焚き火や篝火といった軽微な木材ではなく、建物の部材などが焼けたものの可能性がある。

但し、神戸大学医学部附属病院構内の調査で出土した瓦類はすべて須恵質で、播磨で作られたものであろう。京都産と判断される瓦の出土は確認できない。

この調査で検出された二条の溝（壕）については、その延長を調べるため平成16年度に国庫補助事業として確認調査及び理化学的探査を実施しており、第9章で記述する。（遺跡調査番号2004133）

また、この二条の溝（壕）や遺跡調査番号2003061で検出された土坑や掘立柱建物は立体駐車場の設計変更により保存されることとなった。この詳細については第12章で記述する。

二重の溝（壕）については、約500名の参加を得た現地説明会后、砂によって埋め戻しをおこない、再び成いは三度、土中に眠りにつくことになった。

多淵俊樹神戸大学名誉教授、鮎柄俊夫同志社大学歴史資料館専任講師には現地にて指導いただいた。また、高橋昌明神戸大学教授をはじめ多くの方々からご教示いただいた。

多淵俊樹 1982「附属病院構内で遺構発掘調査」神戸大学学報No.315

多淵俊樹 1985「医学部附属病院遺跡を調査して—福原京の発掘—」神戸大学学報No.340

岡田章一他 1997「楠・荒田町遺跡—神戸大学附属病院構内遺跡—」兵庫県教育委員会

池田征弘他 1997「神出窟跡群」兵庫県教育委員会

## 第9章 その他の調査

### 第1節 平成16年度の調査（遺跡調査番号2004133）

#### 1. 調査の概要

平成15年度に実施した神戸大学医学部附属病院立体駐車場整備事業に伴う発掘調査（遺跡調査番号2003061・2003172）において、平安時代末期の土坑や大型掘立柱建物、2本の平行する壕など福原京に関連すると考えられる貴重な遺構が発見された。そのため兵庫県教育委員会と神戸大学は保存協議（平成16年2月6日付け 教埋文第1486号、平成16年2月24日付け 神大産第130号、平成16年2月26日付け 教埋文第1619号）を重ね、構造物が遺構に抵触しない設計に変更して、地下に埋め戻した状態を保つ措置をとった。

平成15年度Ⅱ区で検出した2本の壕は、昭和57年に神戸大学の多淵敏樹教授（現名誉教授）によって発見されていたものの続きで、遺構の重要性が再認識された結果、この壕の延長を明らかにすることが、福原京の実態を復原する上で大きな意味をもつと考えられたため、同病院構内における確認調査を計画した。

調査の主眼は2本の壕の延長部分を検出することにあるが、東側延長の遺構面は過去の建築工事によって失われているため、西側の駐車場内を対象範囲に選んだ。

ただしその範囲も工事等による攪乱を蒙っている可能性が考えられたため、地下の状態を調べるために、事前にレーダー探査を実施した。作業は桜小路電気街の工藤博司氏の協力を得て、西口和彦調査専門員が6月14日に行った。その結果、分厚い盛土や地下埋設物の影響で不明確ではあるものの、全面的には攪乱されておらず、安定した地層が認められる場所も残っていることが判明した。

探査の所見を受けて、埋蔵文化財調査事務所は兵庫県教育委員会文化財室とも協議の上で、国庫補助事業による楠・荒田町遺跡の確認調査を進めることとした。

兵庫県教育委員会は神戸大学に対し、平成16年10月26日付け 教埋文第3817号で、神戸大学医学部附属病院構内における楠・荒田町遺跡の発掘調査についての依頼を行った。それに対し神戸大学より、平成16年11月1日付けで発掘調査を承諾する旨の回答があったため、埋蔵文化財確認調査の実施に至った。

調査期間は平成16年11月15日～11月22日、調査面積は45㎡。中川 渉、甲斐昭光、柏原正民が調査を担当した。

#### 2. 調査の方法

##### 調査区の設定

調査対象範囲である駐車場内には、過去に臨床検査部の建物の地下室があり、その範囲は既に地下数mにわたって攪乱されているため、対象から除外した。またその他にも、排水管・水道管等の地下埋設物が現存するため、それらを避けて設定する必要がある。以上の条件を踏まえて、2箇所の調査区（1・2トレンチ）を設定した。

1 トレンチは壕が西へ直線的に延びた場合に、検出が予想される箇所に設定した。規模は幅3.6m×延長6mで、平成15年度Ⅱ区からは22m離れている。

2 トレンチは壕が途中で曲がる場合を想定して設定した。平成15年度Ⅰ区の大型掘立柱建物との関係があるため、本来は壕のラインの北側が望ましかったが、攪乱・地下埋設物の関係で場所が確保できず、南側に

変更した。規模は幅4m×延長6mである。

### 調査の工程

まずアスファルト舗装版を切断・取り壊して、撤去後に盛土層を機械掘削した。盛土層の下からは人力で整形・精査・掘削し、写真撮影、断面・平面図作成などによって記録をとった。調査終了後は、遺構面保護のためⅠ区にのみ砂を入れ、掘削残土で埋戻して転圧、アスファルト舗装した。

現地調査の際には、大手前大学 多淵敏樹教授（神戸大学名誉教授）、神戸大学 高橋昌明教授、奈良県立橿原考古学研究所 北垣聡一郎共同研究員、同志社大学 鶴柄俊夫助教授、花園大学 山田邦和教授、京都女子大学 野口 実教授の諸先生方より、学識的見地から貴重なご指導・ご助言をいただいた。

### 3. 調査の結果

#### 1 トレンチ（図版63・64、写真図版66・67）

機械掘削したところ、南端から1～2mのあたりに、かつての臨床検査部の建物の基礎が現れ、無理に動かすと周辺の地下埋設物に影響を与えるおそれがあったため、撤去を断念した。これにより調査区は南北に分断された形となり、以下それぞれⅠT北・ⅠT南と分けて説明する。

#### 1 T北

全体に現地表面下2m前後は現代の舗装・盛土で、さらに調査区の東壁に沿って現代の攪乱坑があった。攪乱坑は最大3.6mの深さがあり、下面は岩盤にまで達していたため、その西壁断面を観察したところ、近代の盛土（1～12層）より下の面から、箱塚状に掘り込まれた東西方向の落ちが2本並んで見つかった。落ちの幅は両外側が壁に隠れていたため確認できなかったが、1m以上、深さ0.9m以上で、埋土はほとんどが黒色シルトブロックを含む埋戻し土であった。2本の落ちの間隔は内側の肩同士で1.4mである。これを平成15年度Ⅱ区の2本の壕と比較すると「北壕の形状がV字形であった」「規模・埋土が異なる」「落ちの延長方向がややずれる」など相違点もある一方「壕の延長箇所にあたる」「2本平行する」という顕著な共通点を有しているため、2本の落ちを壕の延長と考慮して埋土を掘り下げた。

掘削の結果、落ちの埋土（北側：13～16層、南側：17～20層）に遺物がほとんど含まれておらず、底面で花崗岩を整形した間知石状の石列を検出した。南北2本の石列は同工の石材を使って、互いに向き合う側に面を連ねており、一対のものであることは明らかであった。さらに2本の落ちの外側を断ち割ったところ、両側とも花崗岩の軟質岩盤を掘り込んでいることが判明した。この一体の遺構を「SX01」とする。

平成15年度Ⅱ区ではこのような石列は認められておらず、またこうした間知石状の石積みは、通常は近世以降の所産であるため、帰属時期の見直しに迫られた。

そこで両者の間の堆積土（21～36層）を掘削したところ、最下層より19世紀代の染付け・陶器片が出土したため、SX01の年代は幕末以降に下ることが明らかとなり、壕の延長ではないことが確定した。

部分的な調査のためSX01の性格については捉えにくいところもあるが、遺構が埋積した直上に重なっている近代の溝（4～8層）がこれを踏襲したとみるならば、東西方向の水路であったと考えるのが妥当である。しかし平成15年度Ⅱ区には続いていないため、途中で屈曲もしくは途絶するのであろう。

SX01の形成過程については、以下のように整理する。

- ①花崗岩の岩盤を上端の幅約3.6m（2間）、深さ1.2m+α掘り込んで、溝状の掘り方をつくる。
- ②掘り方底面の凹凸を整地（36層）しながら、両側に花崗岩の石材で石垣を積み上げる（現状は最下段しか残っていないが、本来は少なくとも3～4段あったとみられる）。両者の間隔は最も狭いところで1.56m。南側石列の間知石は30～50cm大の石材を用い、掘り方の角度が急で裏込めが比較的広く、最

大40cm大の裏込め石を使う。北側石列の間知石は50～70cm大の石材を用い、掘り方の角度が緩いため裏込めが狭く、裏込め石も小さい。間知石には幅5～8cm単位の矢穴痕が認められる。

③水路部分は比較的すみやかに、流水性の堆積（21～35層）で埋まる。

④埋積後、石垣部分を掘り込んで（北側:13～16層、南側:17～20層）、最下段を残して石材を抜き取り、すぐに埋め戻す。

#### 1 T 南

現地表面下0.8m前後までは現代の舗装・盛土で、さらに現地表面下1.9～2.2mまでの間は近代の盛土（1～17層）である。そのうち1～12層は東から西に向かって傾斜した堆積になっており、傾斜変換点を盛り出して拡張した状況が窺える。

現地表面下1.9mで黒色の土壌層にあたり、その面で南北方向の溝状遺構（SX02）を検出した。西肩が調査区外になるため全形は不明だが、検出範囲内の幅は1.1m、深さ1.5mで、垂直に近い箱状の掘り方を示す。標高24.1m以下は、岩盤（30層）を掘り込む形となる。埋土の大半はブロック土を含む埋め戻し土で、流水性の堆積は認められなかった。遺物が出土していないため時期は不明だが、SX01に対して直角方向になることから、両者は関連する遺構であることが予想される。ただし両者の接点は掘削できなかった範囲で、石垣の裏込めにもあたる場所なので、どのような関係になるかは不明である。

#### 2 トレンチ（図版64、写真図版67）

機械掘削で約2.3m掘り下げたが、ほとんどが現代の水路・石垣等の掘削によって攪乱されており、遺構面は残っていないかった。ただし南壁断面付近のみが攪乱を免れ、土層を観察することができた。

現地表面下1.8mまでは現代の舗装・盛土で、さらに現地表面下2.3mまでの間は近世の整地土・堆積土（2～9層）である。

現地表面下2.3mで暗灰色の土壌層にあたり、層中には古墳時代の土器が含まれている。その面を切って南北方向の溝（SD01）とピット1箇所を検出した。

SD01は西肩が調査区外になるため全形は不明だが、検出範囲内の幅は1.0m、深さ0.6mで、U字形に掘り込まれている。埋土からは19世紀代以降の軒丸瓦が出土しており、1 トレンチのSX01と同時期か、それ以降の所産である。

#### 4. 小結

今回の調査では、1 トレンチで東西方向の水路SX01と南北方向の溝状遺構SX02、2 トレンチで南北方向の溝SD01を検出した。遺構の向きは現在の敷地の方位に則っており、帰属時期はSX01・SD01が幕末以降で、時期不明のSX02もほぼ重なる時期と考えられる。遺構面の土壌層の標高は24.9～25.1mで、概ねそのレベルが当時の地表面に近いといえる。従ってSX01の本来の深さは1.5～1.6mあったとみられ、石垣も4～5段積みされていたことが想定できる。

これらの遺構のつながりや平面的な広がりには不明である。明治14年の兵庫神戸実測図（1：5,000）を見ると、縮尺が小さくて不十分ではあるが、陸軍鎮臺分営の建物が記入されているのみで、こうした東西方向の水路の表現は確認できない（『明治前期・昭和前期神戸都市地図』柏書房1995年）。今回検出した遺構は、幕末以降～鎮臺設置以前の所産である可能性が高い。その上の盛土（1 T 南の4～20層など）が鎮臺設置に伴う地業だったのであろう。

調査の所期の目的である壕の延長部分の追究については期待した結果が得られなかったが、以下のような点を述べることができる。

平成15年度Ⅱ区の壕の検出面の標高は25.4m前後、壕底のレベルは23.8～23.9mであるが、今回の1・2トレンチではそれに相当する層準で平安時代の地層は認められなかった。壕が直進していたとすると、1トレンチにおいては岩盤を幅5mにわたって開削することになるが、その箇所にはちょうどSX01が重なっているため、古代以前の地層が残っている部分は限られている。それでも遺構の方向がずれているため、断面にその痕跡が残る可能性は高いと考えられるが、証拠は得られなかった。

地形環境的には、平成15年度Ⅱ区では花崗岩由来の二次堆積層を掘り込んでいたのに対し、1トレンチでは基層に岩盤が現れ、そのレベルは北壁側で24.7m、南壁側で24.1mの傾斜をもつ。現状では平坦に見える地形も、本来は起伏に富んだものであったとみられる。また近代の盛土(4～15層)も東から西に向かって傾斜しており、もともと地形の変換点にあっていた可能性がある。その斜面の落ち際に有馬道が通っているとすると、地形の上からみても、壕は現有馬道を越えては続いていない蓋然性が高い。

制約の多い調査ではあったが、結論的には、壕の延長は22m西側までは延びておらず、途中で屈曲または途絶している可能性が高いといえる。2本のうちの1本のみが直進していた、ということも考えられなくもないが、その可能性も含めて、壕のつながりについては、残念ながら手掛かりを得ることはできなかった。



地中レーダー探査

## 第2節 平成8年度の調査（遺跡調査番号 960416）

### 1. 調査の概要

1996（平成8）年度の調査は、神戸大学医学部臨床研究棟新営工事に伴い、1997年2月4日～3月25日に実施した。調査区は昭和37年に兵庫県立医科大学図書館として建設された、医学部附属図書館跡地にあたる。また、調査区の南側では、同じく医学部臨床研究棟新営工事に伴い、1992年7月7日～同年10月30日に実施した本発掘調査（遺跡調査番号 920174）において、奈良時代～近世までの計3面の遺構面を調査した。特に調査区北側で検出された奈良時代の遺構は、医学部図書館（当時）側にまで広がりを持つ、多量の土器の一括廃棄土坑であったため、図書館部分とその周辺においても、同時期の遺構、遺物が存在する事が想定された。本調査区における調査にあたっては、1996年12月9日に実施した臨床研究棟新営工事に係る支障建物等基礎部撤去工事に伴う確認調査（遺跡調査番号 960360）において中世の包含層等の残存が確認されたため、事業に伴う影響部分に関して、本発掘調査を実施することとなったものである。

調査は、近現代の盛土及び攪乱等を機械力により掘削し、以下の堆積層について人力による掘削を行い、ベース層の精査で遺構の検出に努めた。当初、1992年度調査の結果に基づき、3面の遺構面の存在を想定していたが、県立医科大学附属図書館建設時に大きく削平を受け、更に図書館施設の地階部分や基礎等で大きく影響を受けており、上層の2面は既に削平され、3面についても広範囲で影響を受けていることが判明した。従って、本地区の調査については、上層2面が既に失われているため、最終遺構面である第3面のみが残存する可能性が高いことが想定された。

### 2. 遺構（図版66、写真図版69～71）

本調査で検出した遺構は、溝3条・ピット74基・土坑4基である。調査区内は西半部を中心に県立医科大学建設工事に伴う掘削等により激しく攪乱を受けており、辛うじて遺構を検出できたのは東半部のみであった。

#### 溝

##### SD101・102

調査区北東側において北西から南東方向に伸びる、並行する溝2条（SD101・102）を検出した。SD101は、検出延長約3.4m、幅約0.27m、深さ約10cmを測る。SD102は延長約2.3m、幅約0.29m、深さ約9cmを測る。何れも褐色系の粘質砂を埋土とし、方向も類似することから、同時期と考えて間違いはないが、遺物が出土しておらず、不明である。

##### SD103

調査区南東側においてほぼ東西方向に伸びる溝1条（SD103）を検出した。SD103は、検出延長約2.5m、幅約0.38m、深さ約4cmを測る極浅い溝であるが、北側の一部に1m×0.5mの床面へ集石を伴う土坑が付設している。溝の埋土は暗緑色の粘質砂で、汚泥状の堆積であることが窺われる。溝に伴う土坑は状況から集水枡のようなものと考えられ、土坑内にガラス片等も見られることから、時期的にも近代以降と新しいものと考えられる。

## ピット

ピットは大小合わせて全体で74基を検出したが、調査区東半部の中でも北側と南側の2箇所に集中している。しかし、現状では掘立柱建物等の施設を復元するには至らなかった。また、時期については中世頃と推測されるものの、遺物が出土しておらず、不明である。

## 土坑

調査区東半部の中央部分において長方形を基本とする土坑4基(SK101～104)を検出した。

### SK101-102

調査区東半部ほぼ中央に位置する。SK101は、長辺約1.5m×短辺約1.0mの長方形を呈し、深さ約0.14mを測る。遺構の東側壁に腐植層が貼り付いた状態であり、板杵が存在した可能性が考えられる。遺構は西側をSK102に切られる。また、遺構内からは色絵磁器鉢(645)が出土しており、県立医科大学附属病院関連時代の遺構と考えられる。SK102は、一辺約1.2mのやや変形した方形を呈し、深さ約0.10mを測る。埋土からはガラス片等が混入し、近現代の遺構であり、SK101を切ることから、時期的にも非常に新しいものである。

### SK103

調査区南東側東壁面付近に位置する。東西検出長約2.5m、南北長約2.5mの方形の土坑である。西側で不正形の攪乱、南側で南北方向の水路跡と思われる攪乱と接しており、同様の攪乱とも考えられる。

### SK104

調査区東側の東壁面付近に位置する東西検出長約1.6m、南北長約3.2mの方形の土坑である。西側で大きく攪乱を受けている。また、遺構内からは、「兵庫縣立医科大学附属病院」銘の色絵磁器鉢(634)が出土しており、同病院施設関連の遺構と考えられる。

## 3. 遺物(写真図版114・115)

本調査において出土した遺物は、県立医科大学附属病院関連のものが殆どであり、本報告書においては、その一部である15点について写真のみの掲載を行った。なお、掲載した個々の遺物解説については、出土遺物観察表にまとめている。

土坑内の遺物としては、SK101より色絵磁器鉢(645)、SK104より色絵磁器鉢(634)が出土している。何れも病棟用として使用された食器と考えられる。

機械掘削時、攪乱内、側溝掘削時のものとしては、色絵磁器蓋(631、639)、色絵磁器鉢(632、633、635、638、644)、色絵磁器碗(636、637、640、643)、色絵磁器破片(641)、染付磁器破片(642)を掲載している。何れも病棟用として使用された食器と考えられる。

## 4. 小結

以上の結果、本地区の調査では、中世と推測されるピット群が検出されたものの、当該時代の遺物の出土がなかったため、所属時期を断定するに至らなかった。その他の溝や土坑については、状況から非常に新しい時期のものと考えるを得ないが、県立医科大学附属病院附属図書館建設に伴う明確な攪乱に切られる遺構も存在しており、図書館棟建設以前の病院関連施設のものと考えられる。

## 第3節 平成7年度の調査（遺跡調査番号 950259）

### 1. 調査の概要

阪神・淡路大震災の災害復興事業として、神戸大学医学部附属病院看護婦宿舍新営工事が計画され、神戸大学事務局から、平成7年10月24日付け 神大施第160号で確認調査の依頼を受けたため、確認調査を平成7年11月6日・12月5日～11日の計6日間実施した。調査担当者は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所復興調査班 平田博幸・山本誠である。調査面積は151㎡である。

前回の確認調査（遺跡調査書号950132）に引き続き、調査区6ヶ所（トレンチ11・12・13・14・15・16）を新たに設定し、調査を実施した。

### 2. 調査の方法

重機による掘削を行ったのち、人力による掘削及び断面整形を実施して、調査を行った。調査対象地では、既存建物等の基礎が多く、遺構が既に破壊されている部分等は、調査の対象外とした。

### 3. 調査の結果（図版67・68、写真図版72・73）

#### 上層

地表面から1～0.6m程度の厚さの盛土（腐材混じり）の下位に、遺物包含層（2層・3層）を確認した。数片の土師器片・須恵器片の検出であるが、前回調査の結果から、2層は近世、3層は中世（平安時代末～鎌倉時代）の遺物包含層であると考えられる。前回調査の遺構検出面に続く面（2層下面・3層下面）が検出された。

### 4. 遺構と遺物（写真図版113・117）

遺構はトレンチ13・16で検出した。溝・土坑・柱穴など、いずれも平安時代末～鎌倉時代の遺構と考えられる。遺物は平安時代末～鎌倉時代の須恵器片・土師器片等を検出したが図化できるものはなかった。

S32は遺跡調査番号950259に先立つ確認調査、遺跡調査番号950132のトレンチ2（トレンチ14の一部）から出土した砥石である。両木口面は欠損しているが、一方が厚くなる形状で、断面は概六角形を呈し、表裏側面の6面を砥面として使用している。一部木口の欠損部分にも擦痕が認められ、欠損した後にも使用している。砂岩質の石材を用いており、中砥であろう。一部が赤化しており、ひびが見られる。

### 5. 小結

今回の調査では、既存建物の基礎等により限られた範囲の調査となったが、平安時代末～鎌倉時代の遺構・遺物を検出する事ができた。

## 第4節 その他の調査（図版 68、写真図版 115・120）

### 1. 遺跡調査番号 980112（図版 68）

遺跡調査番号 980112 は同 980351 と同様に埋設管敷設に伴って実施された調査で、幅が 50cm ほどのトレンチ状の調査である。両調査区は、遺跡調査番号 980190 調査区、及び 990132 調査区の南側に位置している。980112 調査区では、一部に遺物包含層と柱穴状の遺構が検出され、柱穴からは 674 の瓦器皿が出土している。

遺跡調査番号 980351 では既設の埋設管により既に擾乱されていたが、遺跡調査番号 980190 の調査成果からその北側には遺物包含層が残存していることが推測できた。このため遺跡調査番号 990132 の調査を実施している。

### 2. 遺跡調査番号 970318・970349

遺跡調査番号 970318・970349 は、医学部附属病院敷地の南側に位置する大学院演習施設の仮設建物に伴って実施された確認調査及び工事立会である。

遺跡調査番号 970318 では溝や遺物包含層が検出され、緑釉陶器皿（646）や青磁碗（647）が出土している。

また、遺跡調査番号 970349 では一銭銅貨（M31）が出土している。一銭銅貨（M31）は大正 11 年製造のものである。

この他、遺跡調査番号 2005130 では共同研究館整備事業に伴って確認調査を実施し、土坑を検出している。このように、医学部附属病院より南側にも平安時代～鎌倉時代の遺跡が広がっていることが判明している。

## 第10章 自然科学的分析

### 第1節 放射性炭素年代測定 (AMS 測定)

(株) 加速器分析研究所

#### (1) 遺跡の位置

精・荒田町遺跡は、兵庫県神戸市中央区楠町 (34° 41' 08"、135° 10' 12") に位置する。

#### (3) 測定の意義

溝の埋没年代を特定する。

#### (4) 測定対象試料

溝 (SD01) 埋土から出土した炭化材 1 点 (IAAA-62557) である。

#### (5) 化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- 2) AAA (Acid Alkali Acid) 処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では 1N の塩酸 (80°C) を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では 0.001~1N の水酸化ナトリウム水溶液 (80°C) を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では 1N の塩酸 (80°C) を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90°C で乾燥する。
- 3) 試料を酸化銅 1g と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500°C で 30 分、850°C で 2 時間加熱する。
- 4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素 (CO<sub>2</sub>) を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出 (還元) し、グラファイトを作製する。
- 6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

#### (6) 測定方法

測定機器は、3MV タンデム加速器をベースとした <sup>14</sup>C-AMS 専用装置 (NEC Pelletron 9SDII-2) を使用する。134 個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOxII) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により <sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C の測定も同時に行う。

#### (7) 算出方法

- 1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用した。
- 2) BP 年代値は、過去において大気中の炭素 14 濃度が一定であったと仮定して測定された、1950 年を基準